氷見市埋蔵文化財調査報告第29冊

# 柳田布尾山古墳

## 第1次・第2次発掘調査の成果

2000年3月
氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第29冊

# 柳田布尾山古墳

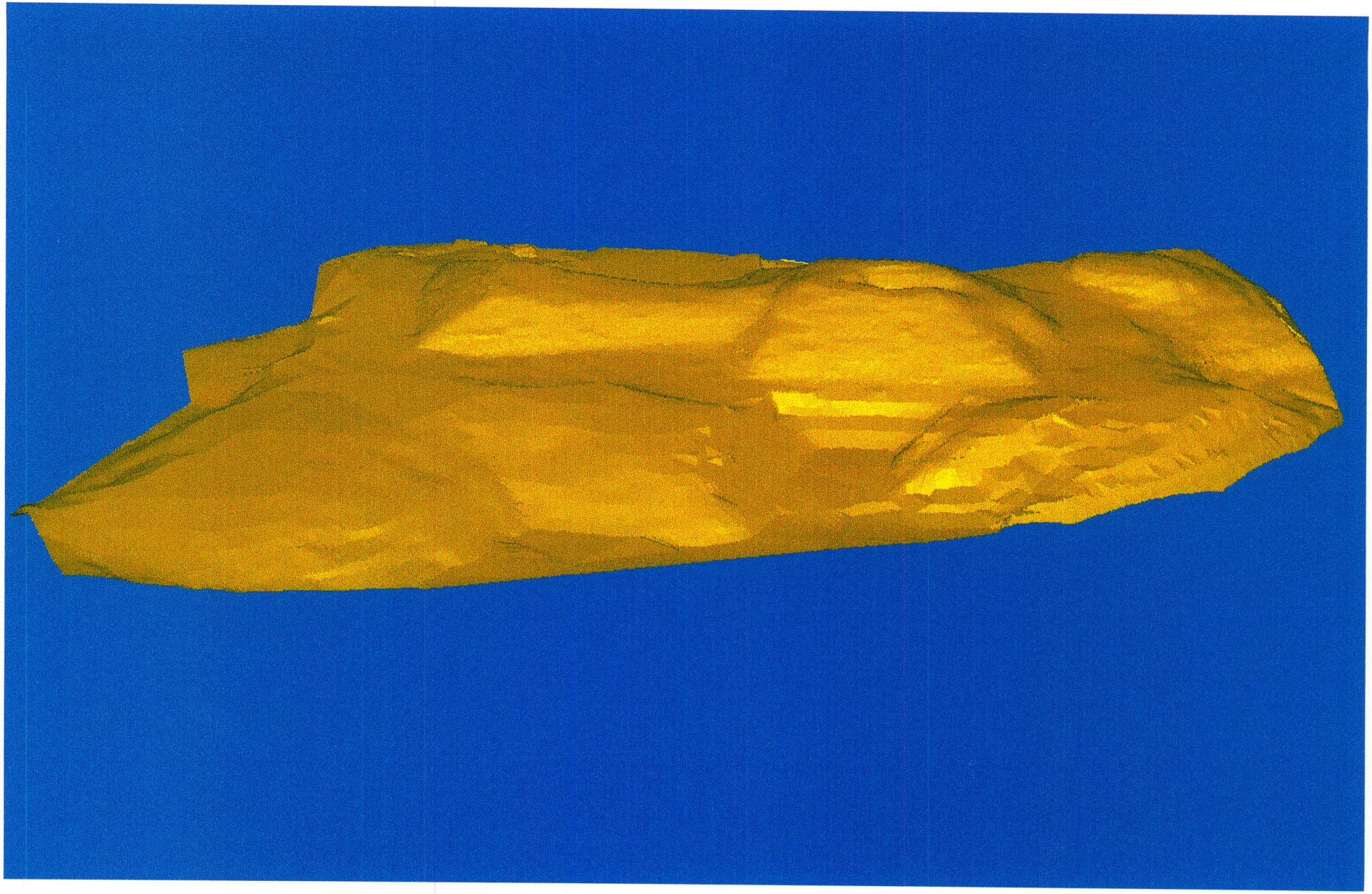
## 第1次・第2次発掘調査の成果

2000年3月

氷見市教育委員会

1.柳田布尾山古墳と富山湾（西から、手前右が後方部・左が前方部）

2.前方部陸橋と周濠の様子



1　柳田布尾山古墳鳥瞰図（西から）

氷見市埋蔵文化財調査報告第29冊

# 柳田布尾山古墳

## 第1次・第2次発掘調査の成果

2000年3月

氷見市教育委員会

# 序

東に富山湾を隔てた霊峰立山を仰ぐ氷見市は、古より海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

特に、大正７年に発見された大境洞窟は、日本で最初の洞窟遺跡として、また同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、国指定史跡になっております。

平成10年の柳田布尾山古墳発見のニュースは、この両史跡の発見にも匹敵し、改めて氷見地域の歴史の奥深さを強く感じさせられたのであります。

その後の現地公開やフォーラムに多くの方々にご参加いただきましたことは、大きな喜びであり、また文化財を保護する立場として、その責務の重大さを改めて痛感した次第であります。

文化財の保護を通して先人の文化を理解することは、真の地域社会の発展につながるものであると考えます。柳田布尾山古墳はその規模・質共に、文化財のシンボルとして、これからの氷見市の貴重な財産となることでありましょう。

この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護、そして古墳研究の一助となることを願っております。

終わりに、古墳を発見されました西井龍儀氏をはじめ、数々のご協力をいただきました造詣深い研究者の方々、またご指導・ご援助いただきました文化庁・富山県教育委員会・富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

氷見市教育委員会
教育長　江幡　武

# 例　言

1　本書は、富山県氷見市柳田字布尾山に所在する柳田布尾山古墳の、平成10・11年度に実施した第１次・第２次発掘調査の成果報告書である。

2　調査は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて実施した。

3　調査主体は、氷見市教育委員会であるが、平成11年度は富山県埋蔵文化財センターからも調査員の派遣を受けた。

4　調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。

5　出土遺物と調査にかかる資料は全て氷見市立博物館が保管している。

6　委員・事務担当者・調査担当者など、関係者の氏名は第１章に記した。

7　本書の作成は、県費補助金の交付を受けて、平成11年度に実施した。
編集・執筆は大野究が担当したが、第２章２の執筆は、氷見市史編さん室主任学芸員鈴木瑞麿氏にお願いした。また、付章の編集は小谷超が担当した。

8　土層や土器の色名については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』第20版に基づいている。

9　発見以後、調査・本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して深甚なる謝意を表したい。（敬称略）

機関

文化庁・富山県教育委員会文化財課・富山県埋蔵文化財センター・氷見市文化財審議会・氷見市立博物館・氷見市史編さん室・富山考古学会・特別養護老人ホームすわ苑・富山大学考古学研究室・(株)エイテック・北陸航測（株）

個人（五十音順）

安念幹倫・池田恵子・上野章・宇野隆夫・岡本淳一郎・河西健二・唐川明史・河村好光・岸本直文・岸本雅敏・久々忠義・小島俊彰・坂井秀弥・下條信行・関清・高橋浩二・都出比呂志・中屋克彦・西井龍儀・林寺厳州・広瀬和雄・松島吉信・丸山龍平・湊晨・宮田進一・宮本哲郎・山口辰一・山本正敏・吉村公男・和田晴吾

# 目　次

第１章：調査の概要 …… 1

1 発見の経緯 …… 1

2 調査組織とその概要 …… 1

3 古墳発見後の主な動き（含、調査日誌抄）…… 2

第２章：柳田布尾山古墳の立地と歴史的環境 …… 6

1 柳田布尾山古墳の位置と周辺の遺跡 …… 6

2 柳田村と布尾山 …… 9

第３章：発掘調査の成果 …… 17

第４章：まとめ …… 60

1 古墳の形状と規模 …… 60

2 古墳の立地について …… 60

3 古墳築造時期 …… 62

おわりに …… 64

参考文献 …… 66

報告書抄録 …… 67

付　章：古墳フォーラムの記録 …… 69

# 図目次


第１図　富山考古学会作成の平面図…… 3
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 7
第３図　林寺厳州氏採集の土器実測図…… 8
第４図　近世の柳田周辺の集落と街道（文政期）…… 12
第５図　柳田布尾山古墳平面図…… 13
第６図　柳田布尾山古墳調査区配置図…… 15
第７図　トレンチ平面図（１）…… 24
第８図　トレンチ平面図（２）…… 25
第９図　トレンチ平面図（３）…… 26
第10図　トレンチ平面図（４）…… 27
第11図　トレンチ平面図（５）…… 28
第12図　トレンチ平面図（６）…… 29
第13図　トレンチ平面図（７）…… 30
第14図　トレンチ平面図（８）…… 31
第15図　トレンチ平面図（９）…… 32
第16図　トレンチ平面図（10）…… 33
第17図　トレンチ断面図（１）…… 34
第18図　トレンチ断面図（２）…… 35
第19図　トレンチ断面図（３）…… 37
第20図　トレンチ断面図（４）…… 39
第21図　トレンチ断面図（５）…… 40
第22図　トレンチ断面図（６）…… 41
第23図　トレンチ断面図（７）…… 42
第24図　トレンチ断面図（８）…… 43
第25図　トレンチ断面図（９）…… 44
第26図　トレンチ断面図（10）…… 45
第27図　トレンチ断面図（11）…… 46
第28図　トレンチ断面図（12）…… 47
第29図　トレンチ断面図（13）…… 49
第30図　トレンチ断面図（14）…… 50
第31図　遺物実測図（１）…… 51
第32図　遺物実測図（２）…… 52
第33図　遺物実測図（３）…… 53
第34図　遺物実測図（４）…… 54
第35図　遺物実測図（５）…… 55
第36図　遺物実測図（６）…… 56
第37図　柳田布尾山古墳周辺の旧地形…… 61
第38図　柳田布尾山古墳の向きと周辺の出現期古墳…… 63

## 表目次

遺物観察表 …… 57

## 図版

巻首図版１　１　柳田布尾山古墳と富山湾
　　２　前方部陸橋と周濠の様子
巻首図版２　１　柳田布尾山古墳鳥瞰図
図版１　１　柳田布尾山古墳と富山湾
　　２　柳田布尾山古墳と二上山
図版２　１　Ｎトレンチ南側の様子
　　２　Ｎトレンチの土層
図版３　１　Ｎトレンチ北側の様子
　　２　Ｎトレンチ北側の遺物出土状況
図版４　１　Ｎトレンチ墳丘盛土の様子
　　２　Ｎトレンチ墳丘盛土の様子
図版５　１　Ｓトレンチ北側の様子
　　２　Ｓトレンチ北側の様子
図版６　１　Ｓトレンチ穴の土層
　　２　Ｓトレンチ溝の土層
図版７　１　Ｓトレンチ南側の様子
　　２　Ｓトレンチ南側落ち込みの遺物出土状況
図版８　１　ＳＷトレンチ全景
　　２　ＳＷトレンチ全景
図版９　１　ＳＥトレンチ全景
　　２　ＳＥトレンチ周濠の様子
図版10　１　ＳＥトレンチ全景
　　２　ＳＥトレンチ２号墳墳丘下の落ち込み
図版11　１　Ｅトレンチ・Ｅ２トレンチ全景
　　２　Ｅトレンチくびれ部の様子
図版12　１　Ｅトレンチくびれ部の土層
　　２　Ｅトレンチくびれ部の土層
図版13　１　ＮＥトレンチ全景
　　２　ＮＥトレンチと前方部コーナー
図版14　１　Ｅ３トレンチ全景
　　２　Ｅ３トレンチ全景
図版15　１　ＮＷトレンチ全景
　　２　ＮＷトレンチ全景

## 図　　版


図版16　1　Wトレンチ全景
　　2　Wトレンチ落ち込み
図版17　1　Wトレンチ全景
　　2　Wトレンチくびれ部土層
図版18　1　後方部トレンチ全景
　　2　後方部西側周濠の様子
図版19　1　古墳西側平坦面南北トレンチ
　　2　古墳西側平坦面南北トレンチ
　　3　古墳西側平坦面東西トレンチ
　　4　古墳西側平坦面東西トレンチ
図版20　1　発掘作業風景
　　2　断面清掃作業風景
　　3　ふるい作業風景
　　4　博物館実習生の屋外実習風景
　　5　保存等検討委員による視察風景
　　6　現地公開の様子
　　7　現地公開の様子
　　8　西井龍儀氏制作の古墳模型
図版21　1　出土遺物（1）
　　2　出土遺物（2）
図版22　1　出土遺物（3）
　　2　出土遺物（4）
図版23　1　出土遺物（5）
　　2　出土遺物（6）
図版24　1　出土遺物（7）
　　2　出土遺物（8）
図版25　1　出土遺物（9）
　　2　出土遺物（10）
図版26　1　出土遺物（11）
　　2　出土遺物(12)
図版27　1　出土遺物(13)
　　2　出土遺物(14)
図版28　1　出土遺物(15)
　　2　管玉表採地点
　　3　管玉採集地点近景

# 第１章　調査の概要

## １　発見の経緯

柳田布尾山古墳は、平成10年６月24日に、西井龍儀氏が発見した古墳である。

氷見市では、平成４年、市制施行40周年記念事業として、氷見市史編さん事業が計画され、平成６年に他の部会とともに考古部会が設けられた。西井氏はその委員の一人として主として古墳時代の担当され、折を見て市内の踏査をされていた。

西井氏から連絡を受けた市教育委員会生涯学習課では、直ちに現地の状況を確認し、略測によって、古墳の全長が100mを超えることを確認した。

## ２　調査組織とその概要

柳田布尾山古墳が発見されたとき、古墳北側では宅地造成による土砂採取が行われ、西側でも土砂採取が進行していた。特に西側の土砂採取は墳丘のすぐ横まで迫り、法面に周濠断面が露出する状態であった。また、墳丘部分も将来の宅地造成計画地に含まれており、前方部の一部はすでに不動産業者が取得している状況であった。

このため氷見市では、この古墳が貴重な文化財であるとの認識のもと、文化庁・県文化課・県埋蔵文化財センターの指導・助言を得て、下記の柳田布尾山古墳保存等検討委員会を組織し、現状保存を図るとともに、基礎データを得るための発掘調査を実施することになった。

### 柳田布尾山古墳保存等検討委員会委員

| | |
|---|---|
| 都出比呂志 | 大阪大学教授 |
| 和田　晴吾 | 立命館大学教授 |
| ○宇野　隆夫 | 国際日本文化研究センター教授 |
| ◎小島　俊彰 | 金沢美術工芸大学教授・富山県文化財保護審議会委員 |
| 西井　龍儀 | 富山考古学会副会長 |
| 棚瀬　佳明 | 富山県教育委員会文化課長（平成10年度） |
| 林　　清文 | 富山県教育委員会文化財課長（平成11年度） |
| 岸本　雅敏 | 富山県埋蔵文化財センター所長 |
| 江幡　　武 | 氷見市教育委員会教育長 |

協力委員

| | |
|---|---|
| 岸本　直文 | 文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官 |

（◎：委員長、○：副委員長、肩書は平成12年３月現在）

事務局：氷見市教育委員会生涯学習課

課　　長　石崎久男

課長代理　阿尾博子

文化係長　屋敷宗一（平成10年度）

文化係長　坂本研資（平成11年度）

主　　任　坂本研資（平成10年度）

主　　任　串田真弓（平成11年度）

主　　任　小谷　超

発掘調査は、以下の構成で行った。

調査担当者：大野　究（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

境　洋子（富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事、平成１１年度）

調査参加者：沢井正雄・高木俊夫・林良一・山端律・武田松二・田中一郎・川瀬又一郎・吉川覚治・瀬戸清・栗一枝・中村すみ子・中村かず子・坂田かずい・中田ひで子・丸山慣美子・川崎哲子・山下和子・沢井とき・東海舞子・松原秀子・田口久仁子・向春子・坂下のぶ子・山端花枝・飯山美和子・江村三朗（以上、氷見市シルバー人材センター）、山崎雅恵・中田書矢・小野基・佐藤慎・中島和哉・佐々木亮二・真井田宏彰・砂田普司・的場茂晃・塚田直哉・猪狩俊哉（以上、富山大学大学院生・研究生・学生）、横澤慈（奈良大学学生）

遺物整理　：三矢恵京・日南静・嵩尾朋昭

真井田宏彰・砂田普司・塚田直哉（以上、富山大学学生）

平成10年度の発掘調査は、平成10年12月15日から平成11年３月30日まで、のべ31日間実施した。

平成11年度の発掘調査は、平成11年５月28日から９月28日まで、のべ49日間実施した。

調査期間を通じて、各地権者や柳田地区をはじめとする地元の方々の、数多くのご協力を賜った。特に特別養護老人ホームすわ苑には、プレハブ・駐車用地の確保、テントや会見場所の借用など、多くのご助力を得た。ここに記して深く感謝申し上げる。

また平成11年３月27日・28日に、富山県教育委員会と氷見市教育委員会の共催で、現地公開を実施した。悪天候の中、2100人の参加があった。

さらに平成11年11月21日には、富山県教育委員会・氷見市・氷見市教育委員会・北日本新聞社の共催で、「とやまときめき歴史フォーラム　柳田布尾山古墳　そのロマンと不思議」を氷見市民会館で開催し、1000人の参加があった。また、同日の午前中に現地説明会を実施し、550人の参加があった。

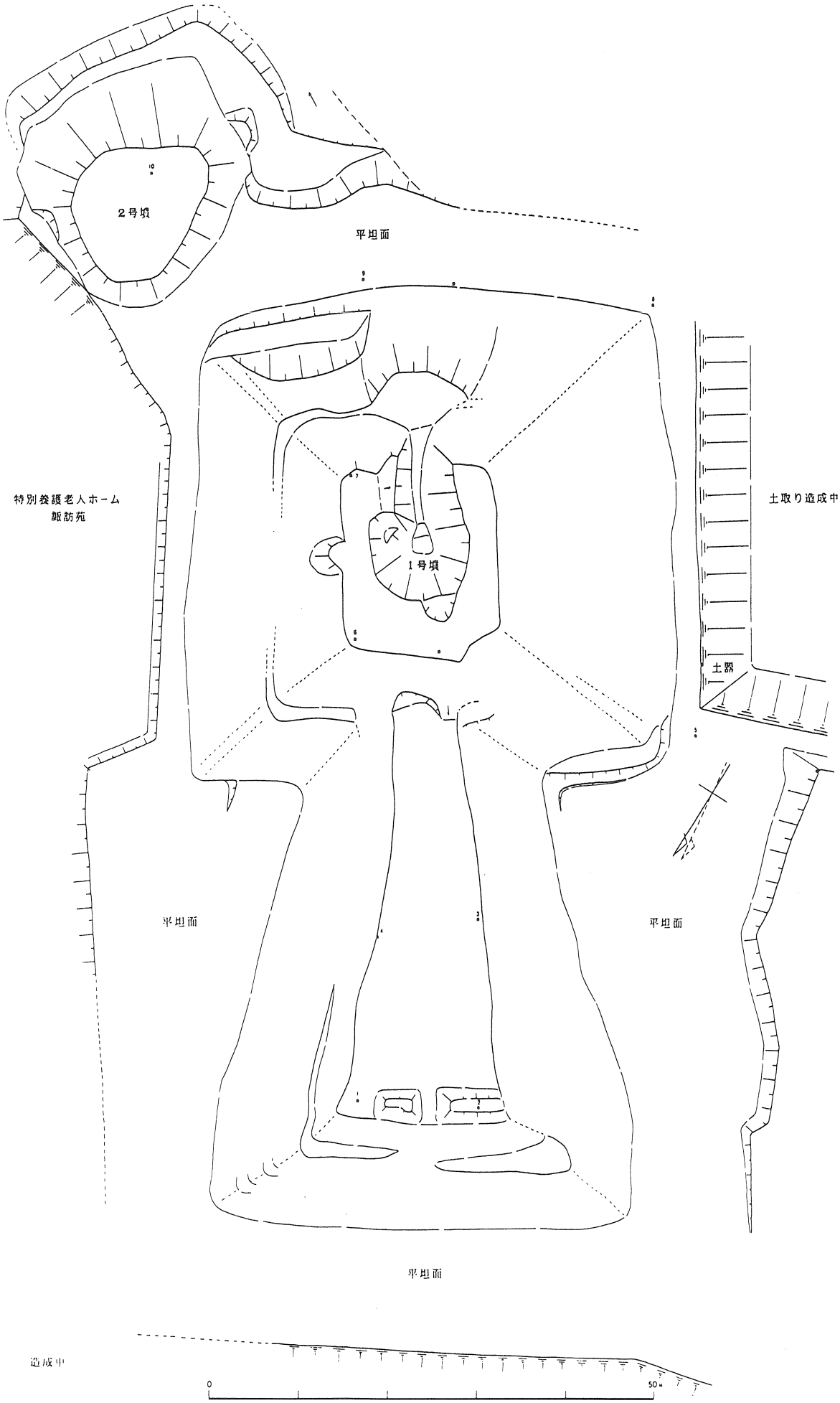
## 3　古墳発見後の主な動き（含、調査日誌抄）

平成10年

６月24日：西井龍儀氏、古墳を発見。

６月28日：富山考古学会のメンバーが、古墳の平板測量を行い、全長107mであることを確認する。

６月30日：ちょうどこの日に予定されていた氷見市文化財審議会において、古墳の発見と概要について説明する。




**第1図**　富山考古学会作成の平面図（1/600）

7月6日：県文化課と県埋蔵文化財センターと現地を視察し、今後の対応を協議。

7月7日：地権者に対して、古墳発見の周知と、調査のための現地立ち入りについての依頼を行う（～8日まで）。

7月9日：富山県庁において、県教委と市教委合同で、県知事・氷見市長談話を添えて記者発表を行う。午後、現地を報道関係者に公開する。

7月14日：富山考古学会から県教委・市教委あてに、古墳の保存について要望書が提出される。

7月24日：坂井秀弥文化庁文化財調査官、現地視察。

8月31日：都出比呂志大阪大学教授、現地視察。

10月23日：保存等検討委員会開催。

10月26日：古墳の測量調査始まる（1月19日まで）。

11月28日：氷見市民大学講座において、富山大学教授宇野隆夫氏が「柳田布尾山古墳が語る古墳社会」と題して講演。

12月10日：俳優苅谷俊介氏来跡。

12月15日：発掘調査開始。しばらく枝打ち・草刈り・掃除等の作業が続く。

平成11年

1月14日：西井龍儀氏が製作した古墳の模型が、市立博物館に寄贈され、21日から公開される。

1月25日：降雪で中断していた発掘調査再開。古墳センターライン設定。

1月26日：Nトレンチ作業開始。

2月15日：後方部西側法面の保護工事始まる（26日まで）。

2月17日：Nトレンチの周濠確認。

2月26日：Sトレンチ作業開始。

3月3日：Sトレンチ排土のふるい作業も平行して開始。井波町歴史民俗資料館山森伸正氏、福野町教委林浩明氏、日本芸術文化文化財総合研究所中沢潤氏、来跡。

3月4日：土砂採取法面に見える周濠断面の実測作業。富山考古学会会長湊晨氏来跡。

3月9日：Nトレンチの作業終了。Sトレンチ北へ拡張する。

3月17日：愛媛大学教授下條信行氏来跡。

3月18日：保存等検討委員会開催。

3月27日：現地公開初日。悪天候の中、600人が参加。

3月28日：現地公開2日目。1500人が参加。

3月30日：10年度の発掘調査終了。

5月28日：11年度の発掘調査開始。Sトレンチの調査続行。

6月1日：この日から県埋文センター境洋子文化財保護主事が調査に参加。SWトレンチ発掘開始。

6月4日：SEトレンチ作業開始。

6月8日：SWトレンチ拡張。2号墳の盛土を確認。

6月9日：SEトレンチで周濠確認。

6月11日：Sトレンチ作業終了。Eトレンチ作業開始。2号墳盛土から土師器破片多数出土。

6月15日：SWトレンチ作業終了。

6月21日：SEトレンチ作業終了。

6月22日：写真撮影。ＮＥトレンチ作業開始、墳丘コーナー確認。

6月23日：Ｅトレンチ拡張。Ｅ２トレンチ作業開始。ＮＥトレンチ拡張。

6月25日：境調査員が後方部南側で管玉を１点採集。

6月28日：ＮＥトレンチ再拡張。

7月２日：Ｅ２トレンチ作業終了。ＮＷトレンチ作業開始。ＮＥトレンチで陸橋を確認。

7月５日：ＮＥトレンチ作業終了。Ｅ３トレンチ作業開始。

7月６日：Ｅトレンチくびれ部の盛土を確認。

7月７日：Ｅトレンチ作業終了。Ｅ３トレンチで周濠確認。

7月８日：保存等検討委員会開催。Ｗトレンチ作業開始。

7月16日：Ｅ３トレンチ周濠覆土から土師器破片多数出土。

7月23日：ＮＷトレンチで周濠を確認。

7月27日：Ｅ３トレンチ・ＮＷトレンチ作業終了。木崎さと子氏が『新潮』８月号に、柳田布尾山古墳をモデルにした短編小説「うみやまの墓」を発表。

8月３日：市立博物館の実習生（金沢学院大学２名・上越教育大学２名）が来跡。発掘調査を体験実習する。

8月４日：Ｗトレンチ作業終了。後方部墳頂の調査開始。

8月９日：後方部のトレンチで粘土層を確認。

8月10日：写真撮影。古墳西側の平坦面の確認調査開始。

8月18日：石川考古学研究会河村好光氏来跡。東京大学教授佐藤信氏・法政大学大学院生一行来跡。

8月19日：西側平坦面の確認調査終了。

8月25日：保存等検討委員会開催。

8月26日：西側平坦面の確認調査をさらに拡げて再開。

8月31日：西側平坦面の確認調査終了。

9月８日：作家木崎さと子氏来跡。

9月９日：写真撮影。

9月27日：名古屋女子大学教授丸山龍平氏来跡。

9月28日：11年度の発掘調査終了。

10月18日：古墳の補足測量調査開始（2月22日まで）。

11月21日：現地説明会開催、550人が参加。氷見市民会館で「とやまときめき歴史フォーラム　柳田布尾山古墳　そのロマンと不思議」開催、1000人が参加。

平成12年

2月23日：保存等検討委員会開催。

3月３日：奈良女子大学教授広瀬和雄氏、富山大学講師高橋浩二氏来跡。

3月23日：埋め戻し、Ｎトレンチ壁面はぎ取り作業（28日まで）。

# 第２章　柳田布尾山古墳の立地と歴史的環境

## １　柳田布尾山古墳の位置と周辺の遺跡

氷見市は、富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎡、人口は約５万８千人である。

市域は、南・西・北の三方が標高200～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側は約20㎞の海岸線をもって富山湾に面している。丘陵は新第三紀と第四紀層から成り、山間部では地滑りが多く発生する。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、主として十二町潟が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘から成る。

市街地は、海岸線のほぼ中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は氷見駅と高岡駅を結ぶＪＲ氷見線が通り、主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道１６０号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道４１５号が通っている。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・第三次産業に従事する人が増え、高岡市など市街へ通勤する人も多い。また、能登半島入口の観光地として、市内には旅館・民宿が建ち並び、近年は温泉も各地で噴出している。

古墳の所在する丘陵は、市域南の二上山丘陵から北に向かって派生する支丘にあたり、古墳の標高は約25ｍ、平野との比高は約18ｍである。

この丘陵は、第四紀更新世後期の中位段丘で、窪層と呼ばれるものにあたる。窪層は氷見南東部に広がる高さ30～40ｍの海成段丘群であり、約12万年前の海進（下末吉海進）によって形成された。それ以前の十二町層や西田層を不整合に覆ってほぼ水平に堆積し、最も厚いところで約25ｍ程度である。地質は未固結の砂層であり、下部は主として細砂、上部は中粒砂から成り、いずれも粒のそろった良質の砂である。従って古墳築造以前の丘陵上部の自然地形は、ほぼ水平な段丘面であったと考えられる。

以下、古墳周辺の遺跡を時代ごとに概説する。

縄文時代：古墳と同じ丘陵の南約900ｍに、四十塚遺跡がある。縄文時代中期中葉から晩期初頭の遺物が出土し、主体は後期中葉から後葉までである。古墳北西部の柳田布尾山遺跡でも、縄文時代の遺物が採集されているが、分布は希薄である。また、富山湾に面した砂丘上でも若干縄文時代の遺物が採集されている。この地域には縄文中期から人が入り、後期には四十塚遺跡を中心に周辺の丘陵や砂丘部に進出したが、晩期初め頃に衰退したものと思われる。

弥生時代：まず、砂丘部の様相に目を向けると、柳田遺跡は小規模な発掘調査が行われたのみであり、範囲や遺構については詳細不明であるが、弥生時代後期、法仏Ｉ式を主体とする遺物が出土している。分布調査では柳田南遺跡・柳田茨木遺跡・島尾北遺跡でも弥生時代後期から古墳時代前期と推定する遺物が採集されているが、細かい時期の確定はできておらず、弥生終末期の様相は不明である。

一方、柳田布尾山古墳の調査では、第３章で報告するように、弥生時代後期から終末期にかけての遺物が出土し、古墳築造以前から丘陵に人の手が加わっていたことが明らかになった。柳田遺跡のあと、月影式期に集落が丘陵上に移転した可能性がある。

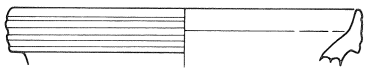
古墳時代：四十塚遺跡の発掘調査では、Ｂ地区で古墳時代住居跡と推定される隅丸方形の遺構が確認されて

**第2図**　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/ 25,000）

いるが、未報告のため概要は不明である。また、この遺跡はその名が示すとおり、複数の塚が所在したという伝承があるが、これも詳細は不明である。上田子古墳は、一辺約10mの方墳と推定される。なお、柳田布尾山古墳の所在する丘陵の北端裾には、６世紀前葉の須恵器窯である園カンデ窯跡が確認されている。これは今のところ県内最古の須恵器窯である。

古代：柳田遺跡・四十塚遺跡で奈良・平安時代の遺物が出土し、柳田布尾山古墳でも後方部南側で平安時代の遺構が確認されたが、詳細は不明である。

中世：小竹遺跡は、現在高岡市西田に所在する臨済宗国泰寺派総本山国泰寺の旧地とされる摩頂山を中心とした遺跡である。国泰寺は慈雲妙意が嘉暦３年（1328）に開いたと伝えられ、戦国末期の兵火で焼失し、現在地へ移ったという。なお、摩頂山には中世山城の遺構も確認されており、その一角では３８９枚の銅銭が発見されている。また、現在氷見市朝日本町に所在する浄土真宗光照寺はもと田子にあったといい、多胡城はその遺構と伝えられる。また、詳細時期不明であるが、園カンデ窯跡周辺・柳田沖宮遺跡・園長堤遺跡で鉄滓が採集されている。



**第3図**　林寺厳州氏採集の土器実測図
（すわ苑登り口近くで採集）

## 第2図凡例

1　柳田布尾山古墳（弥生・古墳）
2　窪北遺跡（古代・中世）
3　十二町潟排水機場遺跡（縄文）
4　松田江北遺跡（古代・中世）
5　窪シムラ遺跡（縄文・中世）
6　柳田遺跡（弥生）
7　柳田茨木遺跡（弥生・中世）
8　柳田南遺跡（弥生・古代）
9　島尾北遺跡（縄文・弥生）
10　島尾遺跡（中世・近世）
11　上泉遺跡（古墳・中世）
12　大浦三蔵遺跡（古墳）
13　園カンデ窯跡（古墳）
14　園長堤遺跡（時期不明）
15　柳田沖宮遺跡（時期不明）
16　柳田布尾山遺跡（縄文）
17　上泉西遺跡（古代）
18　大浦遺跡（弥生）
19　大浦B遺跡（時期不明）
20　馬乗山遺跡（古墳）
21　堀田サカイ遺跡（弥生・近世）
22　大浦深素遺跡（古代）
23　四十塚遺跡（縄文・古墳）
24　多胡城跡（伝承地）
25　田子遺跡（古代）
26　上田子遺跡（中世）
27　上田子遺跡（古墳）
28　堀田モリノ田塚（中世）
29　堀田竹端遺跡（古代・中世）
30　堀田ニキ塚山古墳群（古墳）
31　堀田大久前遺跡（古代）
32　堀田なんまいだ松古墳（古墳）
33　堀田東谷内遺跡（時期不明）
34　堀田ガス山遺跡（時期不明）
35　堀田館ノ山塚（中世）
36　堀田ワタリウエ遺跡（古代・中世）
37　堀田城跡（中世）
38　蒲田B遺跡（中世）
39　堀田長尾遺跡（中世）
40　蒲田A遺跡（中世）
41　小竹遺跡（中世）

## 2　柳田村と布尾山

柳田村と布尾山周辺の歴史的変遷や寺社、街道を資史料をもとにみることにする。

### （1）資史料に見る近世以前の「柳田」

近世以前の柳田村を知る歴史的な文献等の資史料は、あまり多くない。「柳田」の名が見られる中世資料として、岐阜県神岡町の常蓮寺所蔵の鉦鼓と能登穴水城主であった長家の記録「如庵様御合戦場之覚」[1]（長家文書・穴水町所蔵）がある。

常蓮寺の鉦鼓銘[2]によれば、

（鉦鼓両耳間刻銘）　「延慶二年正月下旬」
（同右耳右下刻銘）　「越中国薗楊田阿弥陀寺常住物」

とあり、延慶２年（1309)に越中の薗楊田というところに阿弥陀寺という浄土信仰の寺院が存在し、その什物であったことが推測される。この「薗楊田」という地域名は、現在氷見地域であると比定されている。現在の園は、南側にある布尾山周辺の丘陵を挟み、柳田と隣接する地域である。この鉦鼓が常蓮寺に伝来した経緯については不詳であるが、阿弥陀寺があったとされる「薗楊田」という場所について考察してみると、その当時「園」と「柳田」が地域として分けられていたかどうかは不明であり、広く現在の園と柳田を含んだ地域の総称、あるいは園または柳田の地域内でそれぞれに接している付近を中心とした比較的狭い範囲の地域を示す名称などの説が考えられる。前者とすれば、広範囲となり位置の確定はむずかしいが、後者として考察すると、両地域の境に位置する布尾山周辺がそれにあたるとも考えられる。

また、穴水城主であった長連龍の合戦記である「如庵様御合戦場之覚」には、

（天正六年寅）
同同
一、氷見ヤナイタ合戦、大将堀江弥八（テキ）・ミ方神保（ヤ）アキ（氏張）守相引、

一、同合戦、両方ノ大将右ニ同、氏春勝利

とあり、天正６年（1576）氷見柳田で氷見城主堀江弥八郎と守山の神保氏張の合戦が二度にわたり行なわれたことを伝えている。

### （2）近世の柳田村

柳田の歴史をみるとき、史料を通して具体的に村の様子を知ることができるのは、近世に入ってからである。天正13年（1585）越中の川西三郡は、前田利長が領有し、氷見庄（氷見郡）も前田家の支配地となった。柳田村も加賀藩領となり、近世初期は十村組として五十里組・五十里村少右衛門組に属し、文政以降は南条組に属した。柳田村は、東側には海が開け、太田村より「松田江の長浜」と呼ばれる砂浜が長く続き、海辺から内陸にかけて氷見砂丘と称される砂丘地が広がり、畑地となっている。西側には布尾山等の丘陵があり、中央部は水田が広がる比較的広い耕作地がある。この地形から寛文10年（1670）の村御印[3]によれば、草高は896石（免5ツ1歩)、小物成として山役27匁、また浜では製塩を行い、塩竈役336匁5分（外145匁5分退転）が充てられていた。このほか、近世の集落の規模を知る史料として天保４年（1833）の「射水郡村々家高調理帳[4]」（折橋家文書）がある。これによると、柳田村は当時家数が104軒あり、南条組内でも比較的大きな村であったことがわかる。本村の集落は、「大川（おおこ)」と「柳出（やんだし)」という二つの地域名（俗称）で呼ばれていた（『窪村のあゆみ[5]』)。本村集落のほか、『越登賀三州志[6]』や『加越能三州地理志稿[7]』によれば、垣内として「布尾」があげられている。「布尾」は、「野々尾」ともいわれ、高樹文庫[8]所蔵の文政３年（1820）「射水郡一町一分下絵図」などの近世絵図にも垣内としての記載があり、現在の布尾山付近にあたると推定される。嘉永３年（1850）には園村より布尾山の山畑新開願が出され、同年改作奉行より園村百姓紋七、善太郎ほか７名に

3600歩あまりの新開裁許状が出されている[9]（のちにこの新開は譲渡され園村領となった。）。また布尾山山麓には以前多くの人が居住していたと伝え、その様子は『窪村のあゆみ』に「文政年間に二十戸位あったという。これが明治十六、七年頃には、尚十二、三戸の家があったと聞いている。」とある。また、同地区にある浄土真宗本願寺派寺院の明覚寺所蔵の文化３年（1806）の柳田村領絵図写にも布尾山山麓の谷間に「字野々尾」と書かれたところがあり、6軒あまりの家形が描かれていることから、明治以前にはかなりの人が居住していたことがわかる。その後それらの人々も本村の集落へ転居したと伝える。

（３）柳田村と街道

現在柳田を通る主要道として国道160号と県道薮田・下田子線、国道415号がある。近世には高岡往来とも呼ばれた御上使往来[10]（巡見使道）と伏木往来または放生津往来と称された浜往来[11]（海浜道）があった。高樹文庫所蔵の射水郡下絵図（前記）をはじめ、天保７年の「三州測量図籍[12]」などにより、この街道を考察してみると、御上使往来は柳田地内では一部現在の国道415号に重なり、途中から南西に大きく曲折して泉村（上泉）に入り、泉村では山際を通って、下田子村地内にいたっていた。途中垣内の布尾へも細い道が繋っていた（第14図参照）。また泉村への曲がり角より島村への道も延びている。浜往来は、柳田村では集落内を通らず、現在の国道415号より東側の砂丘地の中を通り、島村（島尾）地内より村中を通らずに浜道となって太田村にいたっている。途中には「三軒茶屋」と呼ばれる所があり、旅人が休憩する程度の茶屋が三軒あったと伝える[13]。島村へは追分といわれる所より道が分岐し、御上使往来からの道と合流して村中へ続いていたと考えられる。

（４）柳田村と神社・寺院

現在柳田には、神社として手向神社と柳田神社の二社がある。手向神社はもと布尾山にあったと伝え、熊野権現（熊野社）と称されたが、天保15年（1844）京都の神祇管領長上吉田家より社号裁許を受け、「手向神社」と改称した。柳田神社は、昭和３年字釜口2797番地の住吉社と字釜口2765番地にあった天神社を合祀して「弥那岐多神社」と社号を改称した。その後さらに現在の「柳田神社」に改称した。

近代以降、柳田村の神社がこの二社になったのは、明治初年から明治政府が打ち出した神社制度の整備・改革の一環として、明治39年ごろからはじまった一町村一社をめざしたともいわれる神社合祀によるものであり、それ以前は柳田にも多くの社があった。

近世の神社を知る史料として、加賀藩へ提出された社号帳がある。現在確認できるものとして正徳2年(1712)の「射水郡堂宮社人山伏持分并百姓持分相守り申品書上ヶ申帳[14]」（有磯正八幡宮上田家文書、「正徳の社号帳」と称される）がある。この社号帳によれば、柳田村の神社として、熊野権現・住吉・諏訪・神明・天神・稲荷の６社があげられており、神職として松本伯耆・鈴木式部・田中伊賀が居住していた。

その後の社号帳として、宝暦9年（1759）「越中神主持宮書上帳（仮称）」（同上田家文書、「宝暦の社号帳」と称される）があり、これによれば、柳田村神主の田中伊豆の持宮として天神・稲荷社の２社、同村鈴木式部の持宮として住吉大明神・諏訪社・神明宮の３社、同松本薩摩の持宮として熊野権現・諏訪社の２社が書き上げられている。この内松本薩摩の持宮の諏訪社は「同村之内布尾産神」と記されており、当時布尾山に祀られていたことがわかる。この後文化年間、文政年間にも社号帳が加賀藩へ提出されているが、これをみるに近世末期の柳田村では、宝暦の社号帳に見える神社にあまり大きな変化は見られない。

近代に入り、神祇官により明治初期に神社明細帳[15]が調整された。富山県のものはその後も加筆訂正され、現在のものは昭和17年の成立であるとされ、これにより合祀の過程を知ることができる。この明細帳によれば、手向神社の境内社金刀比羅社を大正９年、字諏訪野3892番地の諏訪社を昭和３年、字釜口3280番地の神明社と字布尾山3864番地の神明社、字明神2940番地の少彦名社を昭和３年にそれぞれ字明神2926番地の手向神社へ

合祀している。弥那岐多神社（柳田神社）については、前記のように住吉社と天神社が合祀された。字釜口2843番地の愛宕社へは、字浜畑3583番地の神明社と字内田943番地の稲荷社、字釜口3305番地の諏訪社を昭和３年に合祀して愛宕神社と社号を改称している。（後にこの愛宕神社は弥那岐多神社に合祀され、同時に社号を柳田神社と改称した。）この明細帳によれば、昭和初年まで布尾山周辺には諏訪社（字諏訪野）と神明社（字布尾山）があったことがわかる。

近世の柳田村にあった寺院としては、浄土真宗本願寺派の明覚寺、真福寺の２か寺がある。貞享２年の寺社由来書上（石川県立図書館蔵）によれば、明覚寺は文正元年（1466）道西により建立されたとある。また寺院明細帳[16]によれば、神官弓部尹明が出家して、永承２年（1047）真言宗寺院を創立し、のちに道西が文明５年（1473）真宗に改宗したとも伝える。また真福寺については、貞享の書上では応永元年(1567）教誓により建立されたとある。明細帳では寛永19年（1642）同じく教誓により創立されたとある。

現存する寺院は、この真宗寺院２か寺であるが、柳田には前記の阿弥陀寺をはじめ近世以前、このほかにも数か寺の寺院があったという伝承地がある。

（５）地元地誌にみる伝承地

ここでは前記の神社や寺院、街道などのほか、寺院跡や館跡、塚などの伝承地について少し紹介しておきたい。

柳田の記録類や伝説を伝えるものに『窪村のあゆみ』や「柳田百年誌[17]」、「柳田概史[18]」などがある。これらは、地元の郷土研究家によりまとめられた地誌で、村御印や新開文書などの史料をはじめ、柳田に伝わる伝承・伝説の聞書を数多く集録している。『窪村のあゆみ』に記載の「第八章　口碑・伝説」の内には、柳田に関する項目として、松の下舘・茨木舘・長光寺・金向山遠照寺・布尾山西光寺・興国寺・熊野社・稲荷社・野々尾塚・一本松・二本松・追分地蔵尊・塩焚場・鳥潜り・乎不崎など多くの伝承地があげられている。この内「野々尾塚」については、「この地は円形の古墳を形造って、布尾山三四番地にある。」とある。また、別項の第四「布尾村のこと」としてあげる中に、布尾山周辺の聞き書として、「又、元より布尾村の氏神を諏訪社と云う。其社の後当りに与太郎穴と云って、今に至り追々赤壁にてすり臼に用い、其他作庭等に用うべし。所々追々、九尺四方、九尺に六尺斗りの穴蔵あらわれ出る。そのあたりには人家の跡らしき箇所あまた見ゆ。今に至っては山或は畑なり。」と記している。これらは、布尾山周辺の大変興味深い伝承である。またこの周辺に長光寺・金向山遠照寺・布尾山西光寺・興国寺・熊野社・稲荷社・諏訪社などの旧跡地の伝承もあり、これらは布尾山周辺がかなり以前から開拓され集落を形成し、近世以前には丘陵周辺にいろいろな宗教施設があったことをうかがわせる伝承である。

（鈴木瑞麿）

註

（１）『氷見市史』３資料編一　古代・中世・近世（一）1998　p319　中世史料193を参照。

（２）同上　p144中世史料16を参照。

（３）同上 p463　近世史料77　同表2　p885を参照。「加越能三箇国高物成帳」（加越能文庫・金沢市立玉川図書館）。

（４）『近世越登賀（越中・能登・加賀）史料』1992　桂書房

（５）『窪村のあゆみ』1959　窪村誌編纂委員会 p2

（６）『越登賀三州志』1933　石川県図書館協会

（７）『加越能三州地理志稿』1934　石川県図書館協会

（８）高木村（新湊市）居住で加賀藩の測量方を務めた石黒信由の蔵書・絵図を中心とした文庫で、現在新湊市博物館に寄託されている。

（９）『窪村のあゆみ』1959　窪村誌編纂委員会　p6

（10）御上使とは、将軍の代替わりごとに幕府から大名領の巡視のため派遣される諸国巡見使のこと。加賀藩では、近世中期街道の整備を行い、巡見使の通る経路（巡見使を案内する道）を巡見使道として定めた。これを御上使往来と呼んだ。

(11) 加賀藩が定めた街道の内、越中では脇村（氷見市）から放生津を経由して泊村（朝日町）にいたる海浜道があり、これを浜往来と呼んだ。

(12) 金沢市立玉川図書館と高樹文庫に所蔵されている。石黒信由は、加賀藩より文政２年諸郡絵図等の作成を命ぜられ、文政７年これを提出した。その後測量野帳を整理し、清書して提出するよう命ぜられ、作成したものが三州測量図籍である。

(13) 当時柳田在住の故開兵太郎氏より平成３年三軒茶屋についての聞き取り調査を行なった。開氏宅は、三軒あった茶屋の一軒とのこと。

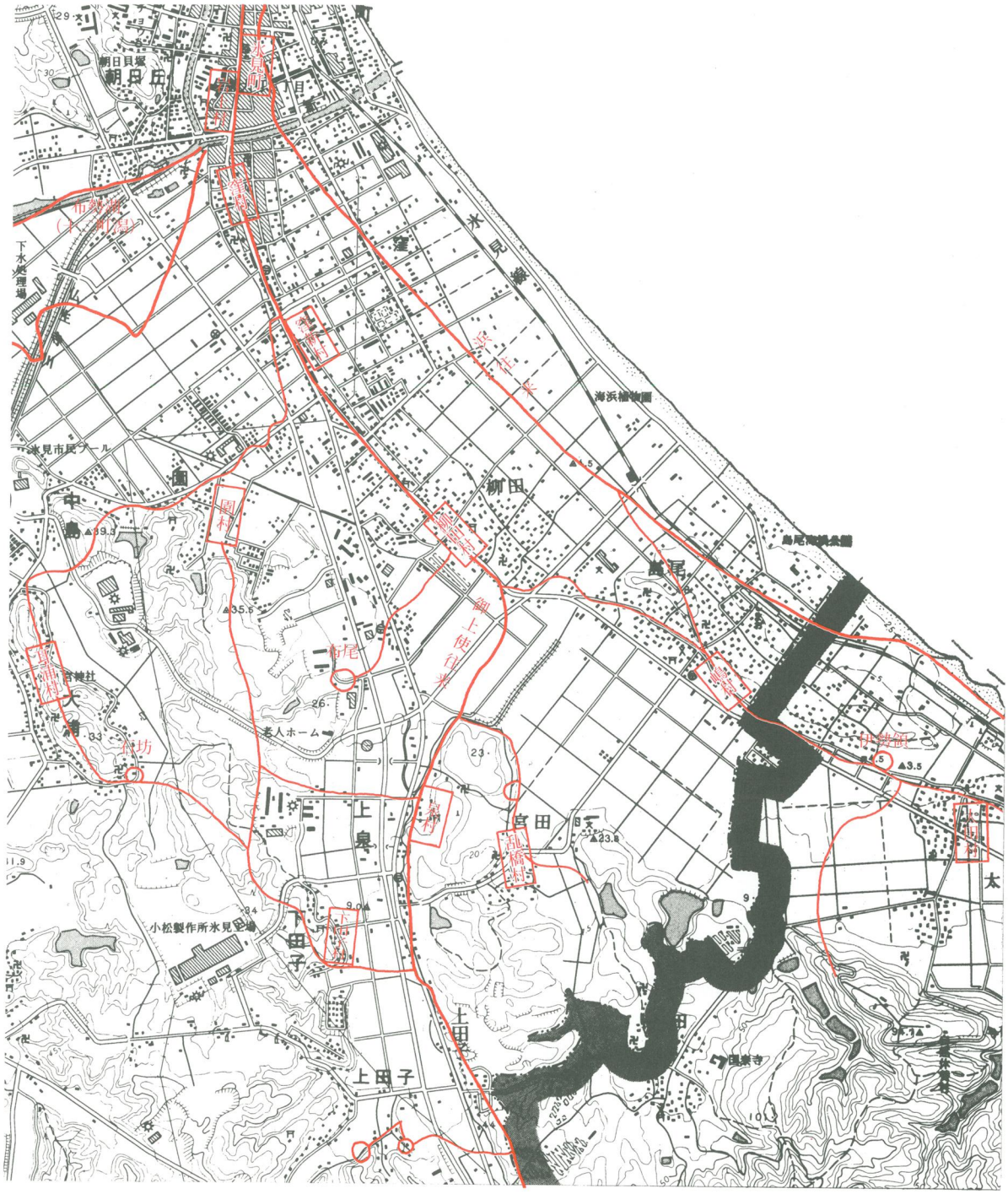
(14) 高岡市横田町の有磯正八幡宮神職上田正宙氏蔵。もと砺波郡戸出村居住の十村川合家旧蔵のものと伝える。

(15) 富山県神社明細帳は富山県神社庁に架蔵されている。

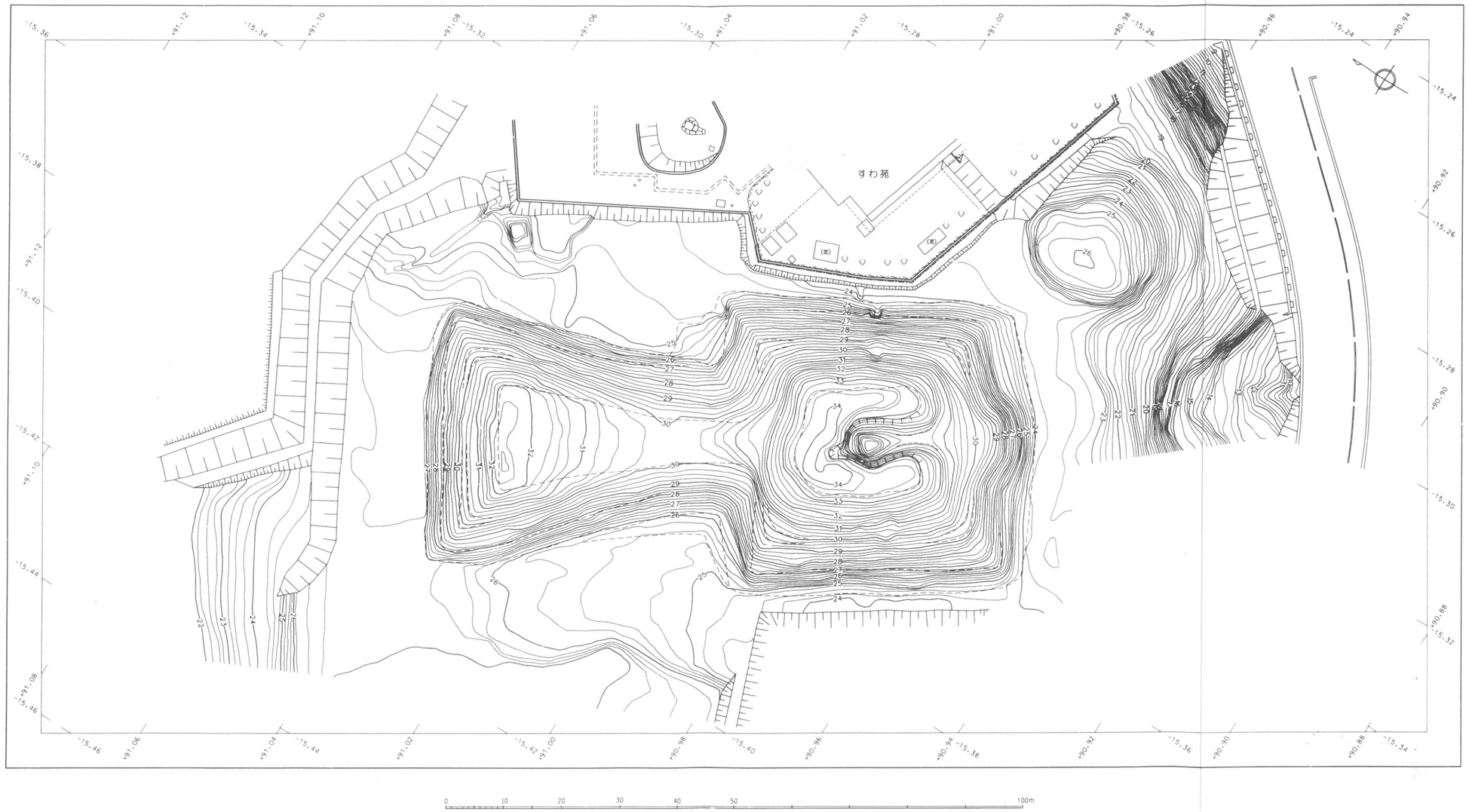
(16) 富山県寺院明細帳は富山県立図書館に架蔵されている。

(17)「柳田百年誌」茨木武義著　1976 タイプ印刷

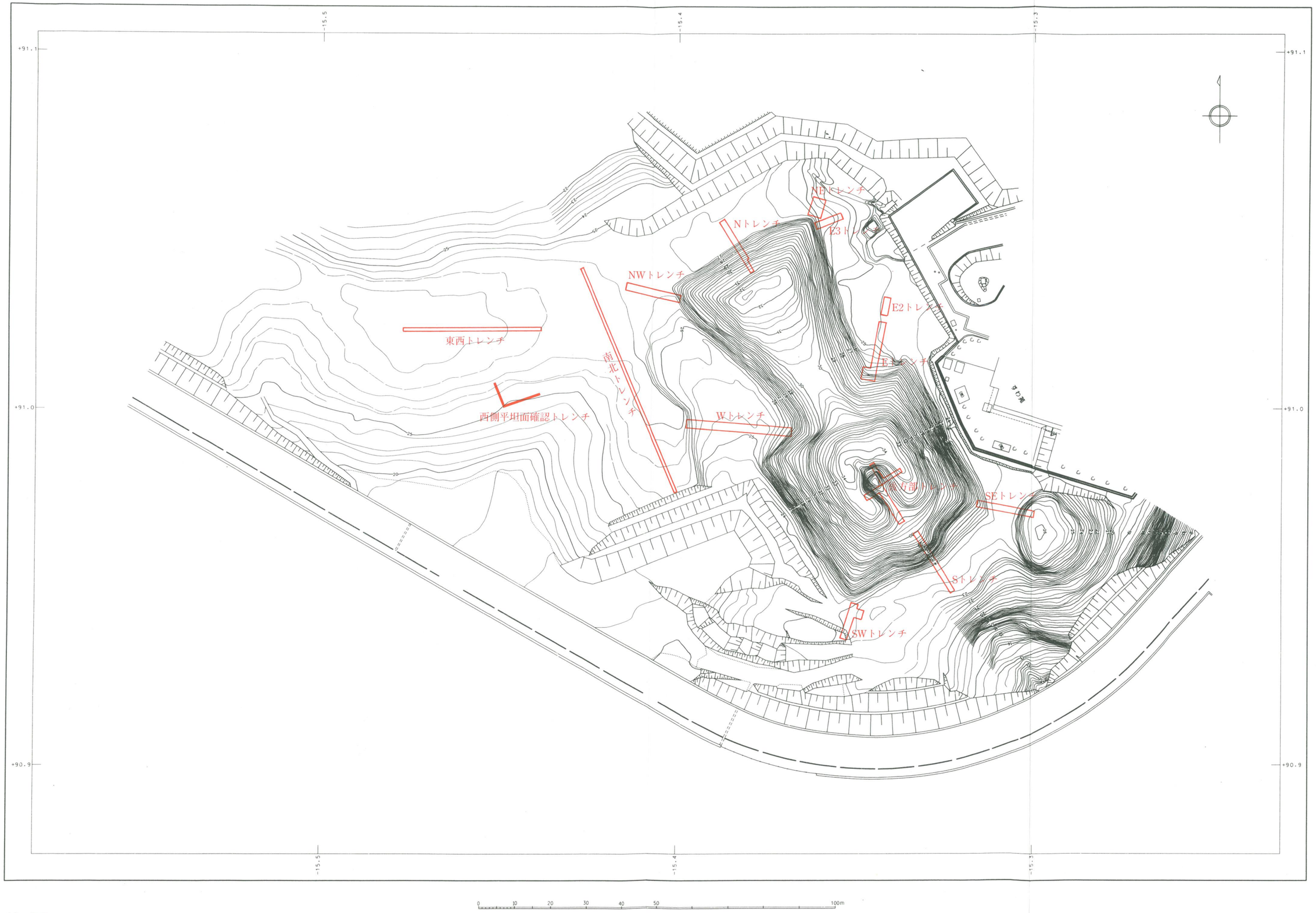
(18)「柳田概史」屋鋪善作自筆　1950




**第4図**　近世の柳田周辺の集落と街道（文政期）




**第5図**　柳田布尾山古墳平面図（1/800）




**第6図**　柳田布尾山古墳調査区配置図（1/ 1,000）

# 第３章　発掘調査の成果

平成10・11年度の発掘調査は、14カ所のトレンチ延べ455㎡について実施した。以下、各トレンチごと調査着手順に記述する。

出土遺物は表採資料を含めて1242点である。大半は土器細破片であり、図化したのは107点である。なお、限られた予算・人員・期間の中で効率的に遺物を取り上げるために、2カ年の調査では各トレンチの一側面の延長に任意に設置した杭を基準点とし、トータルステーションを使って、水平距離と角度及び標高を記録する方法を採用した。また、この基準点の位置については、各トレンチ平面図に示した。実測図・観察表では、弥生時代後期から古墳時代前期のものは、各トレンチごとにまとめ、その他の時代の遺物については時代ごとに一括した。北陸における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年は、近年地域ごとに多くの研究がなされている（石川県立理文セ1986・1995、岡本他 1999、小田木 1989、金沢市教委 1996、富山考古学会 1999 など）。ここでは主として富山考古学会『富山平野の出現期古墳』（1999年）に収められた久々忠義氏の編年を参照し、土器破片の時期を分類した。なお、この作業にあたっては久々氏から多くのご教示を受けた。ただし、土器はいずれも破片資料であるため、以下に示す時期分類は確定ではなく、その時期の可能性が高いものという程度に理解している。分類できないものについては、時期不明とした。また、中世の遺物については宮田進一氏から多くのご教示を受けた。

Ｎトレンチ　（第18・31図）

古墳センターラインに沿って前方部前面裾に設けた長さ15ｍのトレンチである。当トレンチは、古墳墳丘裾の位置確認と、周濠の形状確認を目的に設定した。なお、トレンチ南側、古墳頂部に向けて４ｍ調査区を拡張したが、時間の都合で表土を除去したのみであるため、この部分は図面では省略した。

調査の結果、地山の様相から古墳裾はＮ杭から南へ8.4mの地点であり、その標高は25.2mを測る。墳丘はここから約50度の角度で一旦立ち上がる。その後は、攪乱のため明確ではないが、約30度に角度を緩めていると推測する。地山は標高28ｍの地点で水平になり、39層は旧表土と考える。そこから上は盛土によって墳丘を造っており、調査区内では10種の盛土を観察した。

周濠は幅約８ｍを測り、底は北側に向かって緩く傾斜する。最も深い所で地表面から2.3mである。標高25ｍ前後に腐植層があり、この下の層から土師器破片が多数出土した。また、腐植層上部の２・６層からは主として中世の遺物が出土している。

当トレンチからは199点の遺物が出土し、うち25点を図示した。

１～４は、法仏式併行期とする土器破片である。１は34層から出土した甕口縁である。ゆるく外反する有段口縁で端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施し口径14cmである。２は34層から出土した高杯又は器台の脚部である。「ハ」の字状にひらく大型のものであり、底径は24cmである。外面はナデ調整、内面はハケ調整であり、端部は丸くおさめる。３は21層から出土した甕口縁である。ゆるく外反する有段口縁で端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施し、口径15cmである。４は21層から出土した壺底部である。底外面は平らで、内面はハケ調整、外面はナデ調整を施す。底径５cmである。

５・６は、月影Ｉ式併行期とする土器破片である。５は34層から出土した有段口縁の器台である。端部に面をとり、口径17cmである。内外面ナデ調整を施す。６は39層から出土した器台脚部である。ほぼ垂直に立ち上がる円筒状のものであり、外面はミガキ調整である。

7～12は、月影Ⅱ式併行期とする土器破片である。7は22層から出土した甕口縁である。ほぼ直立気味に立ち上がる有段口縁であり、端部はやや尖る。内外面ともナデ調整を施し、口径は18cmである。8は28層から出土した「く」の字甕口縁である。頸部の屈曲はゆるく、端部に面をとり、口径は18cmである。外面はナデ調整、内面はハケ調整を施す。9は21層から出土した「く」の字甕口縁である。頸部が強く屈曲し、端部に面をとり、口径は18cmである。内外面の一部にハケ調整を施す。10は39層から出土した甕底部である。底径2.8cmであり、あげ底である。内面はハケ調整である。11は22層から出土した細頸台付壺胴部である。胴部最大径の部分に突帯を貼り付ける。またこの部分は接合痕に沿って破損しており、成形時に付けられた刻み目が観察できる。内面はミガキ調整、外面の調整は不明である。12は39層から出土した高杯又は器台である。口縁端部を欠くが、杯底部が屈曲するタイプのものである。内外面ともナデ調整である。

13は25層から出土した時期未確定の壺である。口縁端部を欠くが、「く」の字状で端部に面をとるタイプのものであろう。

71は1層から出土した古代土師器高坏の脚部である。外面はケズリ調整である。

76・77・80～83・87は中世の非ロクロ成形土師器小皿である。76は口径11cmであり、体部がゆるやかに立ち上がり、端部が外反する。15世紀後半のものであろう。77は口径12cm、器高2.3cmである。底部と体部が明瞭に区別されるタイプのものである。15世紀後半から16世紀前半のものであろう。80は口径13.4cm、底径7cm、器高2.2cmであり、底部からゆるやかに体部が立ち上がる。15世紀後半のものであろう。81は口径9cm、器高1.8cmであり、口縁端部をややつまみ上げる。15世紀後半から16世紀前半のものであろう。82は口径11cmであり、ゆるやかに体部が立ち上がる。83は口径12cmであり、口縁部が厚くふくらみ、端部をつまみ上げる。15世紀後半のものであろう。87は底径7cmである。

95～97・100は中世珠洲壺である。100は口径25cmである。

Sトレンチ　（第7・18・19・31図）

古墳センターラインに沿って後方部後面裾に設けた長さ20mのトレンチである。当トレンチは、古墳墳丘裾の位置確認と、周濠の有無確認を目的に設定した。

なお、後方部南側斜面には盗掘坑掘削に伴う排土が押し出されており、Sトレンチで発掘した排土については現地でふるい作業を平行して行った。

調査の結果、墳丘裾に平行して幅1.5m、深さ40cmの溝を検出したが、この溝は古墳からの流土を断ち切っているため、後世のものであろう。SWトレンチで検出した溝と方角がほぼ一致しているが、幅・深さが異なるため、同一のものかどうかは検討を要する。見かけの裾は現在地籍の境になっているため、この溝は地境として掘られた可能性もある。この溝があるため古墳裾は明確にできず、今後補足調査が必要であるが、現段階ではこの溝の部分に墳丘裾があるものとしておく。

地山は標高26.4mの地点で水平になるとみられ、それより上は盛土によって築かれている。ただし、今回の調査では盛土の様子を観察するには至っていない。

一方、古墳南側には古墳軸と合致しない不定形の落ち込みがあり、底から古代の遺物が出土した。地山の改変はこの落ち込みのみであり、このトレンチで周濠は検出していない。

また、トレンチ東側の墳丘裾で穴を検出した。地山を深さ約1m掘り込んでいる。この上を古墳からの流土が覆っているため、古墳築造時か、それ以前の遺構であろう。全形をうかがえないため、性格は不明である。

当トレンチからは89点の遺物が出土し、うち7点を図示した。

14は法仏式併行期とする高杯であり、３層の出土である。口径26cmであり、杯底部で屈曲し外反する。口縁端部は引き出し上部で面をとる。内外面ともナデ調整である。

15は月影Ⅰ式併行期とする器台であり、30層の出土である。受部は稜をもち、ゆるやかに外反する。脚部はほぼ垂直に立ち上がり、裾部で屈曲する。

16は月影Ⅱ式併行期とする有段口縁の甕であり、３層の出土である。口径16cmであり、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整である。

17は時期未確定の有段口縁の甕であり、３層の出土である。

70は古墳時代後期の土師器内黒椀であり、15層の出土である。ゆるやかに体部が立ち上がり、口縁で外反する。口径は12cmである。外面の調整は不明であり、内面はミガキ調整である。

72は古代須恵器横瓶であり、15層の出土である。

73は古代土師器椀であり、15層の出土である。底径６cmを測り、回転糸切り痕がある。内外面とも摩滅が激しい。

ＳＷトレンチ　（第8・17図）

後方部南西隅の裾を確認するために設けた長さ11ｍのトレンチであり、南側に２×２ｍ拡張した。

調査の結果、幅2.5mの溝を検出したが、これは後世のものであろう。また、後方部西側裾に沿った形で、幅90cmの浅い溝を検出したが、遺物がなく、古墳築造時の区画溝か、後世の地境溝か、時期・性格は不明である。

また、このトレンチでは周濠を確認していない。

当トレンチからは20点の遺物が出土し、うち３点を図示した。

85は２層から出土した中世の非ロクロ成形土師器小皿であり、底径５cmである。

92は１層から出土した中世珠洲壺である。

106は１層から出土した銅銭「天聖元寶」である。直径2.5cm、重量1.8gである。

ＳＥトレンチ　（第9・20・21・32図）

後方部南東隅に設定した長さ17ｍのトレンチである。当トレンチは古墳裾の位置と周濠の形状の確認、さらに２号墳との関わりを調べるために設けた。

調査の結果、古墳と２号墳の間に幅８ｍ、深さ2.1mの周濠を確認した。ただし、この周濠の経路については明らかでない。

一方２号墳は、土層から確実に古墳であることが判明した。36・37層が旧表土であり、その上が盛土である。旧表土下の地山面で、0.8×1.4m以上の長方形の落ち込みを検出したが、未調査のため性格は不明である。

標高23ｍ付近に周濠の腐植層があり、その下の層から土師器破片が出土した。

当トレンチからは237点の遺物が出土し、うち８点を図示した。

18～21は法仏式併行期とする土器破片である。18は８層から出土した甕底部であり、底径６cmである。内面はハケ調整である。19は38層から出土した壺口縁であり、口径15cmである。台付壷であろう。調整は不明である。20は31層から出土した壺である。外反する口縁をもち、端部上面に面をとる。端部下には刻み目をいれる。口径は18cmである。21は９層から出土した甕又は壺の底部である。底径６cmである。

22は月影Ⅰ式併行期とする器台脚部であり、41層からの出土である。裾部に向かってゆるく開き、外面はハ

ケ調整である。

23・24は月影Ⅱ式併行期とする土器破片である。23は38層から出土した「く」の字甕である。口径22cmであり、外反した口縁端部を面とりする。内外面の調整は不明である。24は38層から出土した壺である。頸部を「く」の字状に屈曲させ、端部を下方にやや引き出す。口径は15cmである。

68は38層から出土した縄文土器破片であり、細い沈線をめぐらせる。縄文後晩期のものであろう。

Ｅトレンチ及びＥ２トレンチ　（第10・11・21・22・23・32図）

東側のくびれ部の状況を確認するために設けたトレンチであり、長さ17mである。また南側で２×３m拡張し、北側には１mおいてトレンチを延長する形で長さ５mのＥ２トレンチを設けた。

くびれ部の土層は複雑であり、後方部では他のトレンチと同じく地山を削り出しているのに対して、前方部は一旦地山を掘り下げた後に改めて盛土していることが判明した。また、この盛土には炭や焼土が多く含まれていた。

さらに、このトレンチでは墳丘に沿って幅1.2m前後、深さ20～30cmの溝を確認した。この溝はくびれ部に沿って折れ曲がり、前方部の盛土もこの溝から立ち上がるため、古墳築造時に掘られた可能性がある。

古墳測量図では、このくびれ部に約６×６mの基壇状の方形遺構がうかがえるが、調査の結果この部分は地山の掘り残してあることが判明し、古墳と関係する施設の可能性が高まった。しかし、この遺構に伴う遺物はなく、性格は不明である。

Ｅトレンチでは周濠が確認できなかったため、さらにＥ２トレンチを設定したが、このトレンチでも確認できなかった。従ってＳＥトレンチと後述するＥ３トレンチで検出した周濠のつながりは不明である。

Ｅトレンチからは98点の遺物が出土し、うち10点を図示した。

25は法仏式併行期とする壺底部であり、28層の出土である。底径６cmであり、外面はハケ調整を施す。

26・27は月影Ⅰ式併行期とする土器破片である。26は９層出土の有段口縁甕である。口縁端部を欠き、内外面はナデ調整である。27は37層出土の高杯又は器台脚部である。裾が「ハ」の字状に開き端部に面をとる。内外面にミガキ調整を施し、底径は13cmである。

28～32は月影Ⅱ式併行期とする土器破片である。28は９層出土の有段口縁甕である。口縁端部を欠くが、口径は13cm程であろう。外面の調整は不明、内面はナデ調整である。29は37層出土の「く」の字甕口縁である。口径は16cmであり、端部は軽く面をとる。内外面ともナデ調整である。30は３層出土の甕又は手あぶり土器である。復原口径は12cmである。体部内外面にハケ調整を施す。31は21層から出土した壺口縁である。口径11cmであり、外面に赤彩を施す。32は23層から出土した壺底部である。底径４cmのあげ底のものであり、内面はハケ調整である。

33は時期未確定の高杯又は器台であり、９層からの出土である。

84は１層から出土した中世の非ロクロ成形土師器小皿である。口径は９cmであり、底部からゆるやかに立ち上がり、口縁端部をつまみ上げる。15世紀後半のものであろう。

Ｅ２トレンチからは20点の遺物が出土し、うち７点を図示した。

75・78・79・86は中世の非ロクロ成形土師器小皿である。75は口径９cmであり、口縁端部をつまみ上げる。口縁に油煙痕が残る灯明皿である。15世紀後半のものであろう。78は口径8.5cm、底径3.8cm、器高2.0cmである。体部を強くナデ、口縁端部を丸くおさめる。79は口径10cm、器高1.5cmである。口縁が厚くなり、端部を丸くおさめる。86は口径13cmであり、端部を丸くおさめる。内面にすすが付着する。

90は33層から出土した中世珠洲壺又はすり鉢である。99は33層から出土した中世珠洲壺である。101は33層から出土した中世珠洲すり鉢である。口径は30cmであり、口縁端部は水平に面をとる。珠洲Ⅳ期のものであろう。

ＮＥトレンチ　（第13・24・32図）

前方部北東隅の裾を確認するために設けたトレンチであり、当初は長さ５ｍで設定したが、拡張の結果調査区は５×４ｍになった。

調査の結果、墳丘裾は地山削り出しによって築かれており、前方部稜線の延長部分の地山が掘り残され、Ｎトレンチで確認した周濠がここで一旦途絶えることが判明した。Ｅ３トレンチの結果から、この掘り残し部分は陸橋であると考える。

周濠部分の層位は、Ｎトレンチのそれとほぼ同じ様相を呈し、標高25ｍ前後に腐植層があり、その下の層から土師器破片が出土している。

当トレンチからは49点の遺物が出土し、うち７点を図示した。

34は月影Ⅰ式併行期とする甕底部であり、９層からの出土である。底径４cmである。

35は月影Ⅱ式併行期とするあげ底の壺底部であり、９層からの出土である。底径4.4cmである。

89・94は３層から出土した中世珠洲甕である。102・104は３層から出土した中世珠洲すり鉢である。102は口径26cmであり、口縁内端に面をとる。珠洲Ⅴ期のものであろう。104は口径32cmであり、口縁内面に面をとり、そこに波状文を施す。珠洲Ⅵ期からⅦ期のものであろう。

Ｅ３トレンチ　（第12・25・26・33図）

ＮＥトレンチで確認した掘り残しが陸橋になるのかどうか確認するために、前方部東側面裾に設定した長さ８ｍのトレンチである。

調査の結果、幅５ｍ、深さ1.8mの周濠を確認し、ＮＥトレンチの遺構は陸橋であると考えた。

当トレンチからは383点の遺物が出土し、うち13点を図示した。

38～40は月影Ⅰ式併行期とする土器破片である。38は５層から出土した有段口縁甕である。口径は18cmであり、擬凹線を施す。39は６層から出土した壺である。体部外面はハケ調整である。40は６層から出土した破片であり、おそらく低脚杯であろう。

41～44は月影Ⅱ式併行期とする土器破片である。41は６層から出土した「く」の字口縁甕である。口径は14cmであり、口縁部をつまみ上げ面をとる。内外面ともナデ調整である。42は13層から出土した有段口縁甕であり、端部を欠く。調整は不明である。43は６層から出土した「く」の字口縁甕である。44は６層から出土した高坏であり、外面はミガキ調整である。

45は時期未確定の高坏又は器台であり、６層からの出土である。

46～49は古府クルビ式併行期とする土器破片である。46は12層から出土した甕である。体部内面にハケ調整を施す。47は14層から出土した壺である。口縁が「ハ」の字状に開くもので、端部を軽く面とりする。口径は16cmであり、内外面ともナデ調整である。48は６層から出土した有段口縁壺である。口径は15cmであり、「ハ」の字状に開く。内外面ともナデ調整である。49は14層から出土した高杯又は器台脚部である。底径は10cmであり、裾部でさらに外反する。

50は、６層から出土した不明石製品である。残存長2.35cm、最大幅1.2cm、厚さ0.76cm、重量4.6gである。

ＮＷトレンチ　（第14・27・32図）

前方部北西側の裾の様子を確認するために設定した長さ16ｍのトレンチである。

この部分に陸橋は存在せず、幅約３ｍ、深さ約１ｍの周濠を検出した。

当トレンチからは18点の遺物が出土し、うち５点を図示した。

36は月影Ⅰ式併行期とする有段口縁甕であり、７層からの出土である。口径は15cmである。

37は月影Ⅱ式併行期とする「く」の字口縁甕であり、７層からの出土である。口径は18cmである。端部に面をとり、外面にハケ調整を施す。

74は１層から出土した中世珠洲壺の底部である。底径９cmであり、外面に静止糸切り痕が残る。

105は１層から出土した中世越前甕破片である。

107は１層から出土した近世越中瀬戸皿である。口径13cmであり、内外面に鉄釉を施す。18世紀頃のものであろう。

Ｗトレンチ　（第15・16・28・29・30・34図）

古墳西側のくびれ部と周濠の様子を確認するために設定した長さ30ｍのトレンチである。

この部分の周濠は、トレンチ東端から16～19ｍの地点にある地山の掘り残しによって、二分される。東側の周濠は幅約12ｍ、深さ１ｍであり、西側の周濠は幅約６ｍ、深さ1.4ｍである。

これと同様の層位置は、後方部西側の土砂採取面でも確認され、ここでも西側の周濠の幅は約６ｍ、深さも1.4ｍである。

また、Ｗトレンチくびれ部近くの南側では溝状の遺構を検出している。

当トレンチからは128点の遺物が出土し、うち21点を図示した。

52は法仏式併行期とする甕であり、16層からの出土である。受け口状の口縁をもち、口径は16cmである。内外面ともナデ調整である。

53～57は月影Ⅰ式併行期とする土器破片である。53は10層から出土した有段口縁甕である。口径は18cmであり、内外面ともナデ調整である。54は16層から出土した有段口縁甕である。口径は16cmであり、内外面ともナデ調整である。55は13層から出土した壺である。口縁部が長くのびて外反する有段壷であり、内面と外面端部近くにハケ調整を施し、器壁が薄い。56は13層から出土した大型高坏である。口径は36cmであり、端部に軽く面をとる。摩滅のため不鮮明であるが、外面はミガキ調整と思われる。57は13層から出土した高杯脚部である。裾に向かってゆるやかに外反し、透孔が少なくとも１個ある。摩滅が激しいが、外面はハケ調整と思われる。

58～64は月影Ⅱ式併行期とする土器破片である。58は10層から出土した有段口縁甕である。内外面ともナデ調整であり、端部は丸くおさめる。59は17層から出土した「く」の字口縁甕である。ゆるやかに外反する口縁は先細り気味で丸くおさめる。口径は12cmであり、内外面ハケ調整である。60は６層から出土した広口壺である。口径は18cmであり、端部は軽く面をとる。61は13層から出土した有段口縁壺である。口径は13cmであり、内外面ナデ調整である。62は18層から出土した高杯脚部である。ゆるやかに開き、裾部で外反する。端部は先細りで丸くおさめ、底径は７cmである。外面に赤彩を施す。63は19層から出土した有孔鉢である。64は６層から出土した有段の鉢であり、口径は14cmである。

65は古府クルビ式併行期とする高杯又は器台脚部であり、６層からの出土である。「ハ」の字状に開き端部は丸くおさめる。底径は12cmである。

66・67は時期未確定の土器破片である。66は19層出土の器台である。67は11層出土の小型高杯又は器台である。

88は２層から出土した中世珠洲すり鉢である。91は表採の中世珠洲甕である。93・98は３層出土の中世珠洲壺である。103は１層出土の中世珠洲すり鉢である。ごくわずかに内傾する面をとり、そこに波状文を施す。口径は31cmである。珠洲Ｖ期のものであろう。

その他　（第33図）

51は後方部南側裾近くで表面採集の碧玉製管玉である。長さ3.2cm、直径1.3cm、重量9.8gである。

古墳西側平坦面の調査

平成11年度に、古墳西側の平坦面に２カ所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。Ｉトレンチは幅１ｍ、長さ69ｍであり、このうち63㎡を調査した。Ⅱトレンチは幅１ｍ、長さ39ｍであり、このうち36㎡を調査した。

それぞれ地山まで掘削したが、遺構・遺物は存在しなかった。

後方部のトレンチについて

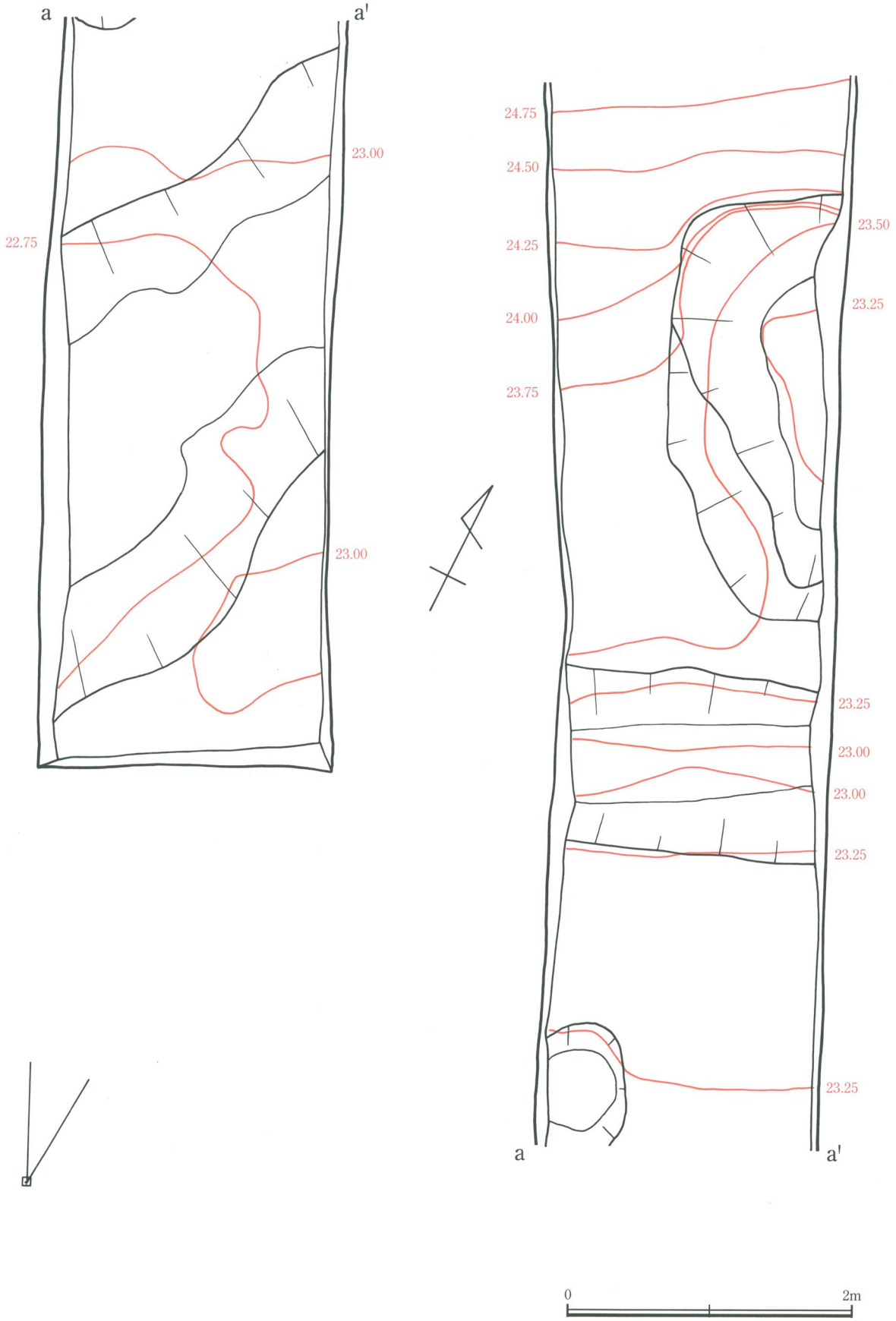
後方部の盗掘坑については、Ｌ字形に２本のトレンチを設定し、44㎡を調査した。当トレンチは盗掘がどの程度埋葬施設に影響しているかを確認するために設定した。

調査の結果、盗掘坑東側斜面において、粘土層を確認した。ただ、当トレンチの調査は、来年度続行する予定であるため、報告は次年度にまとめて行う予定である。

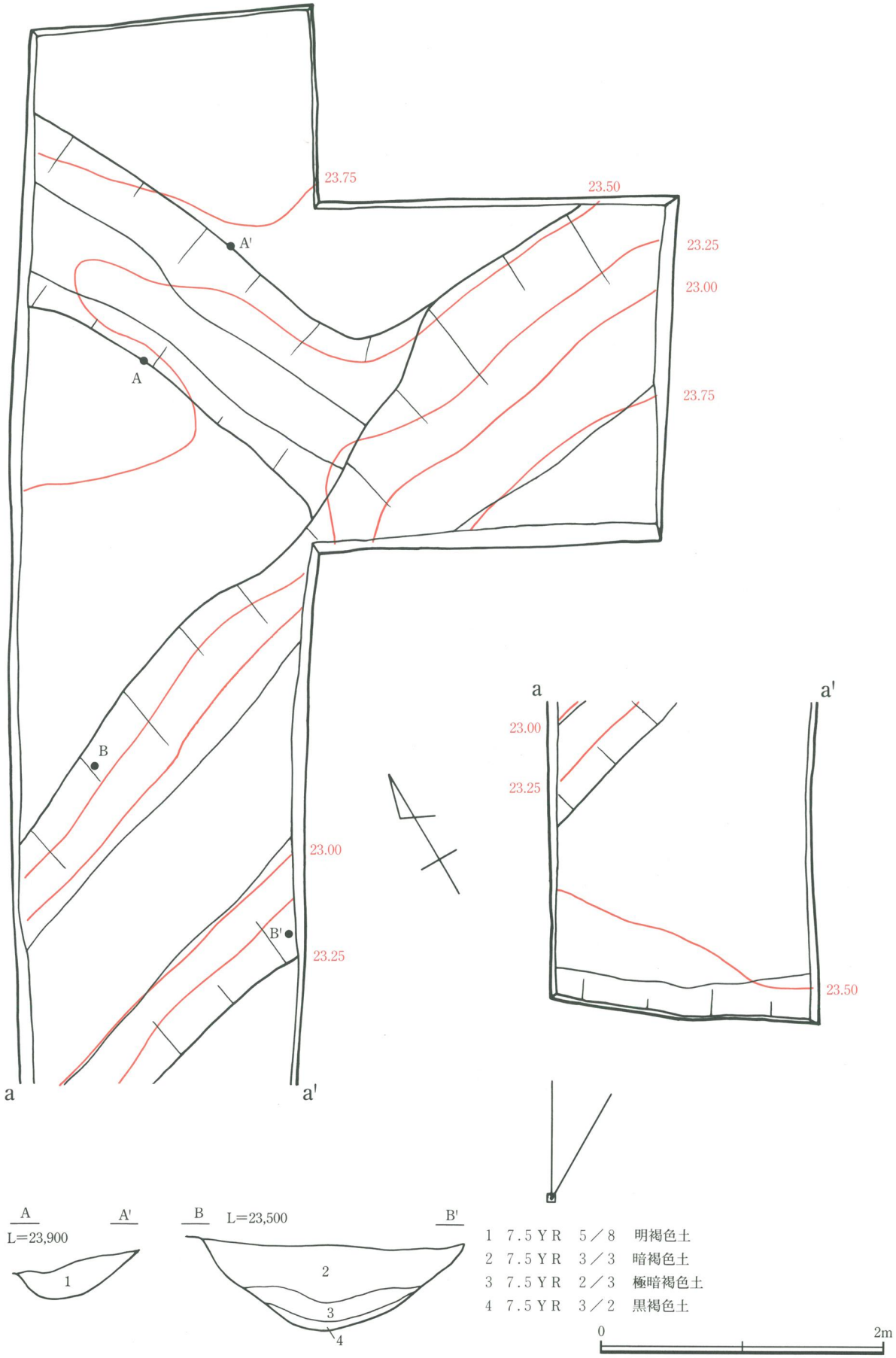
調査後の措地

Ｎトレンチの周濠壁面は、今後の利用の便を図るため、はぎ取りを行った。

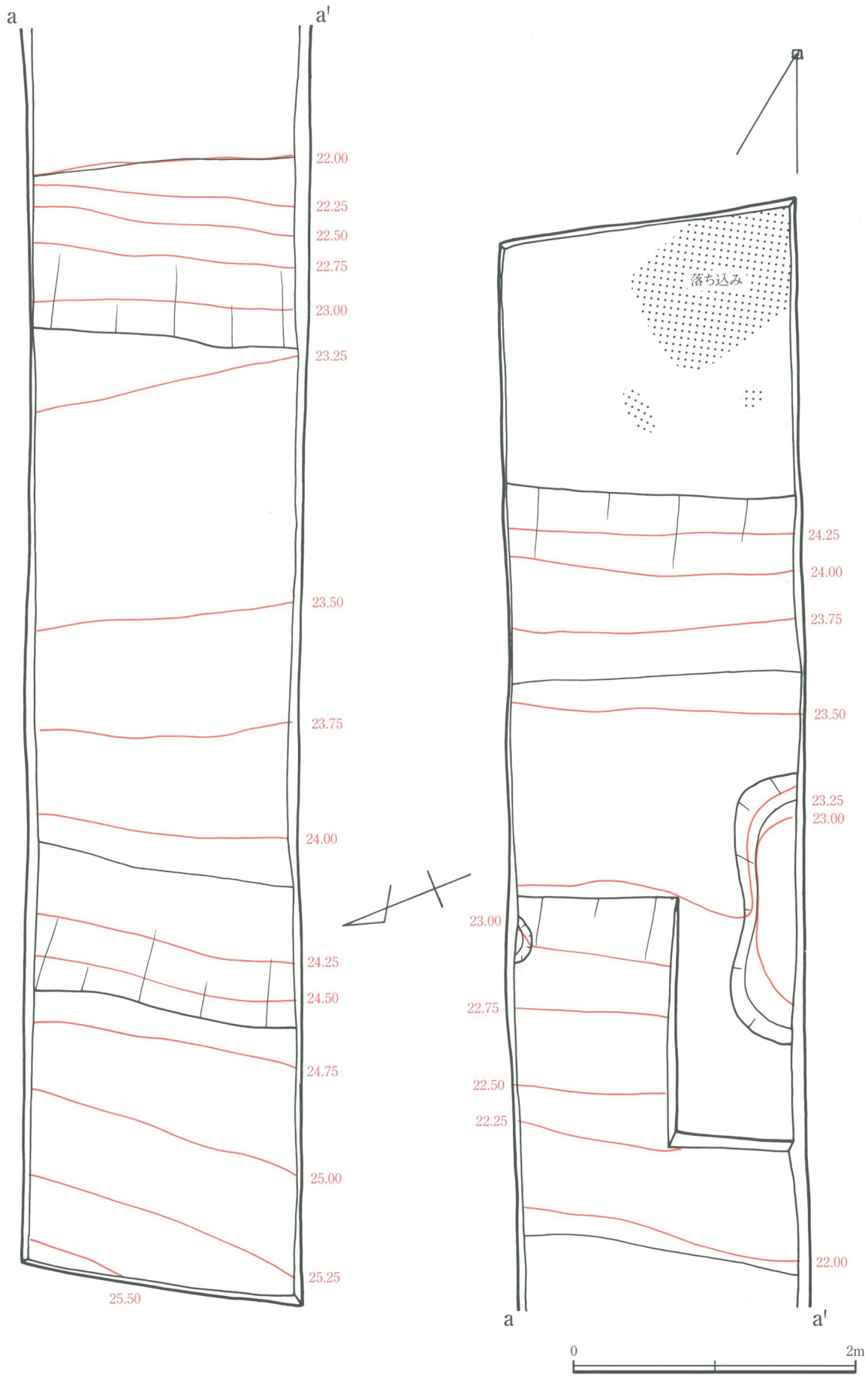
また、後方部のトレンチを除いて、埋め戻しを行った。埋め戻しにあたっては、地山面に小砂利を2～3cmの厚さでしきつめ、遺構の保護につとめた。



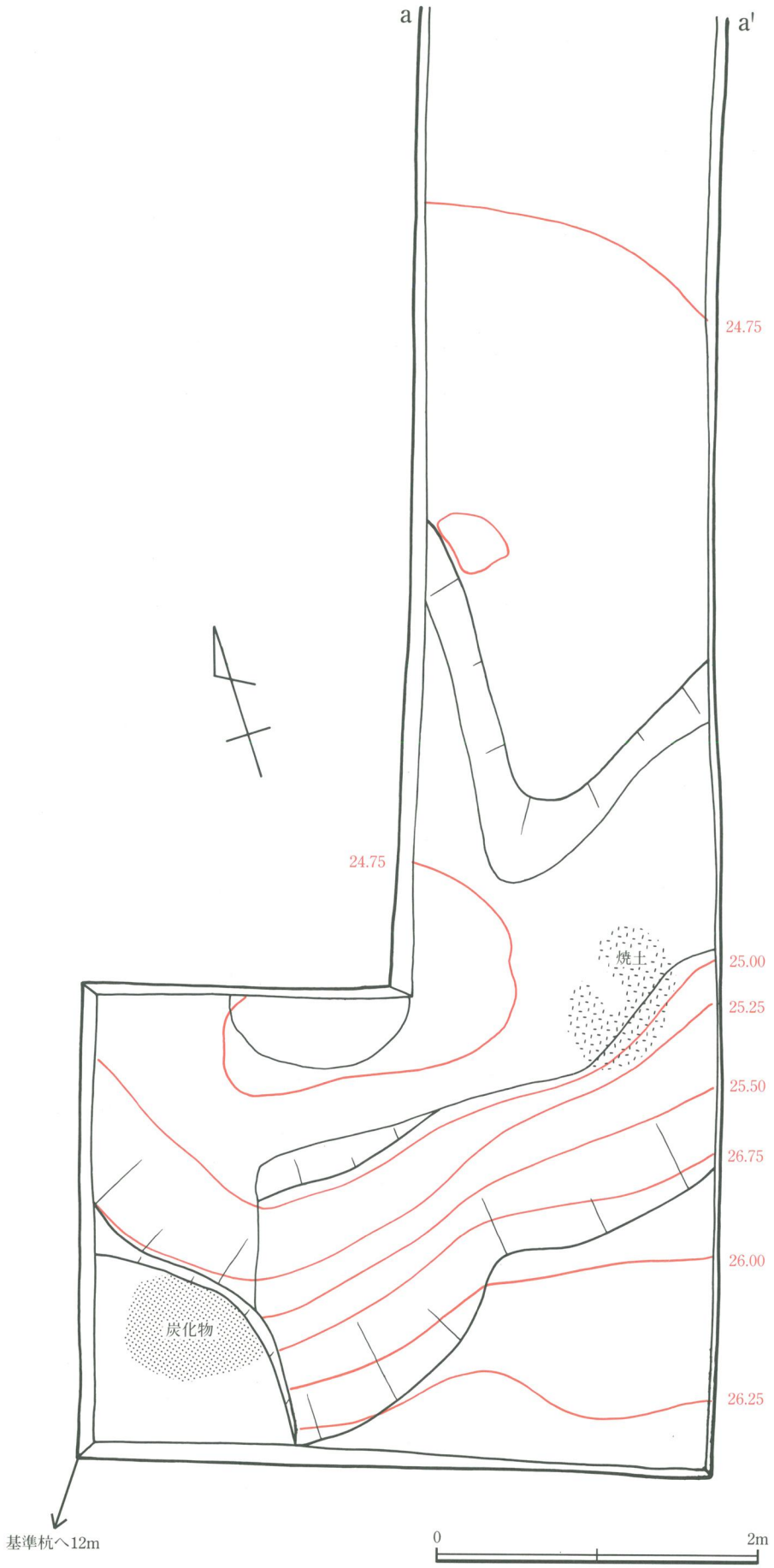

**第7図**　トレンチ平面図（1）Sトレンチ（1/40、方位は磁北）



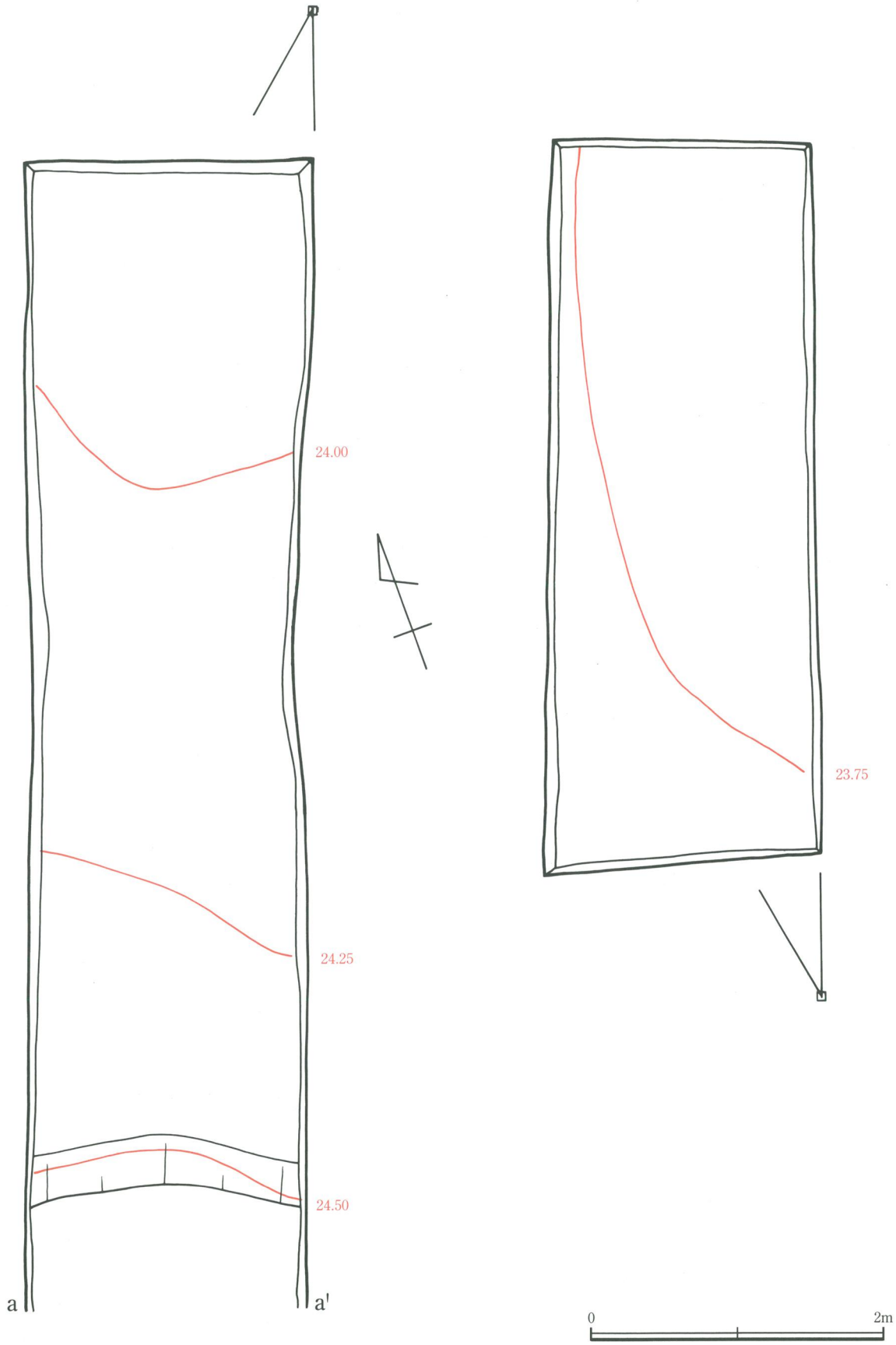

**第8図**　トレンチ平面図（2）SWトレンチ（1/40、方位は磁北）



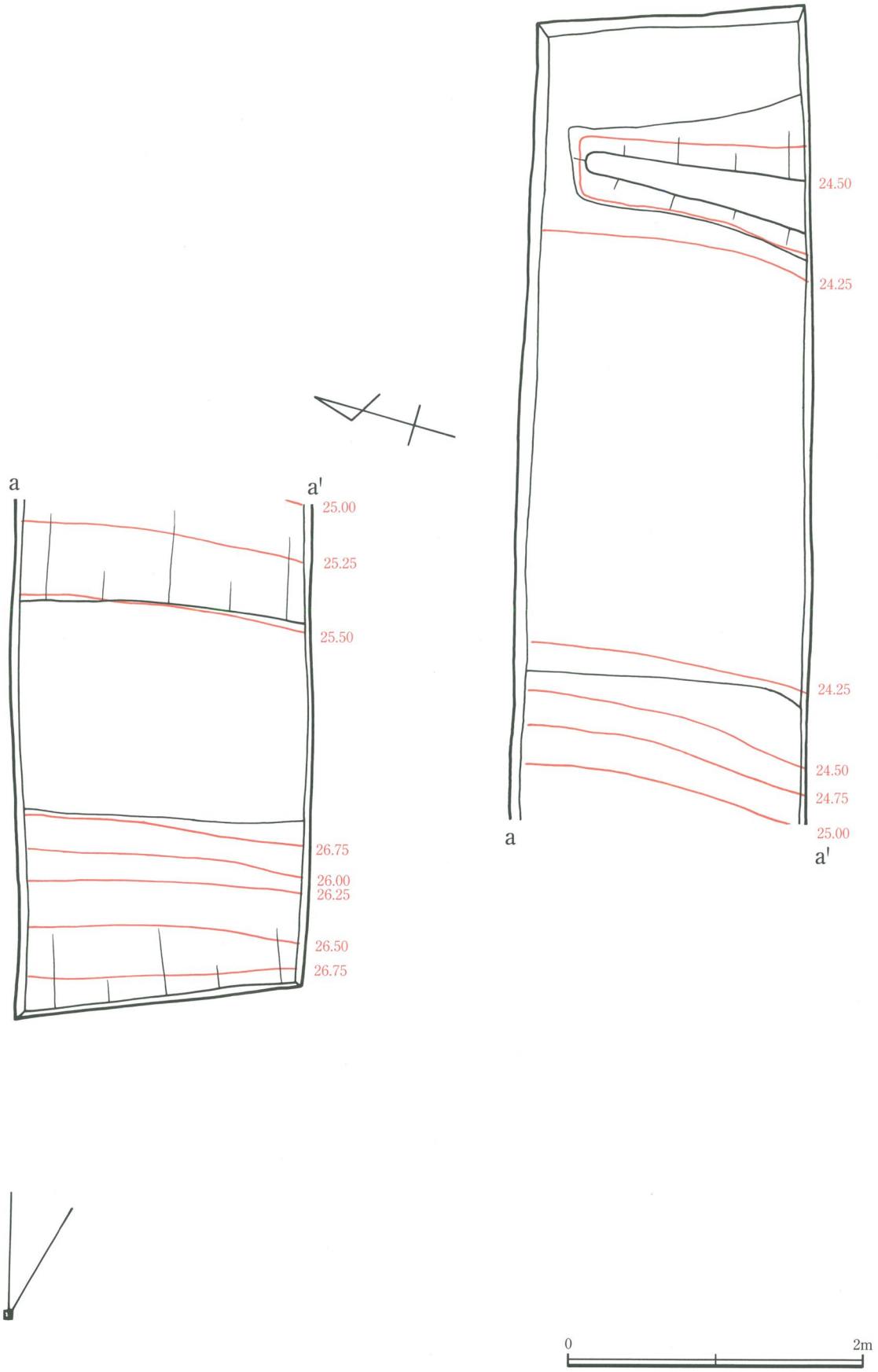

**第9図**　トレンチ平面図（3）SEトレンチ（1/40、方位は磁北）



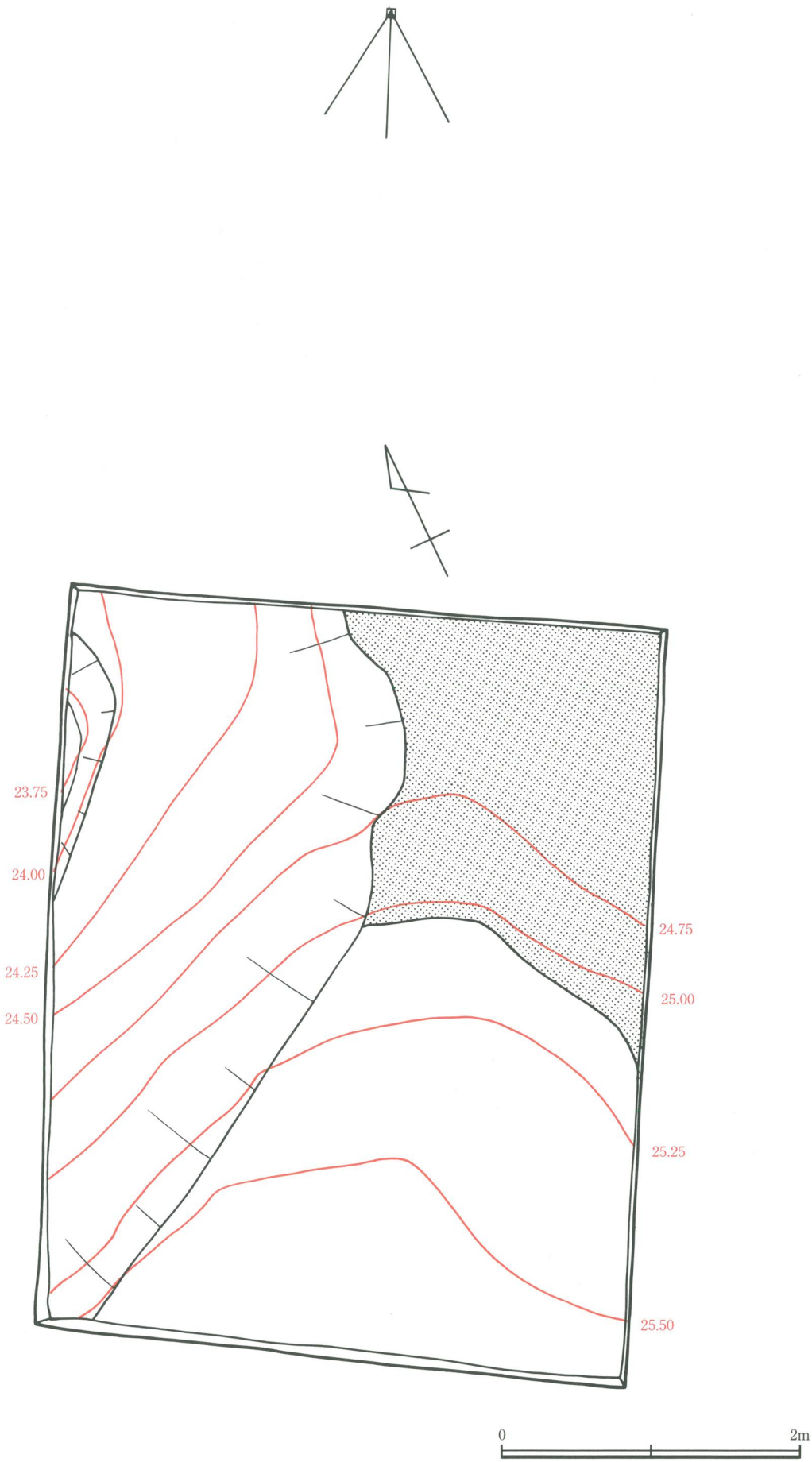

**第10図**　トレンチ平面図（4）Eトレンチその1（1/40、方位は磁北）



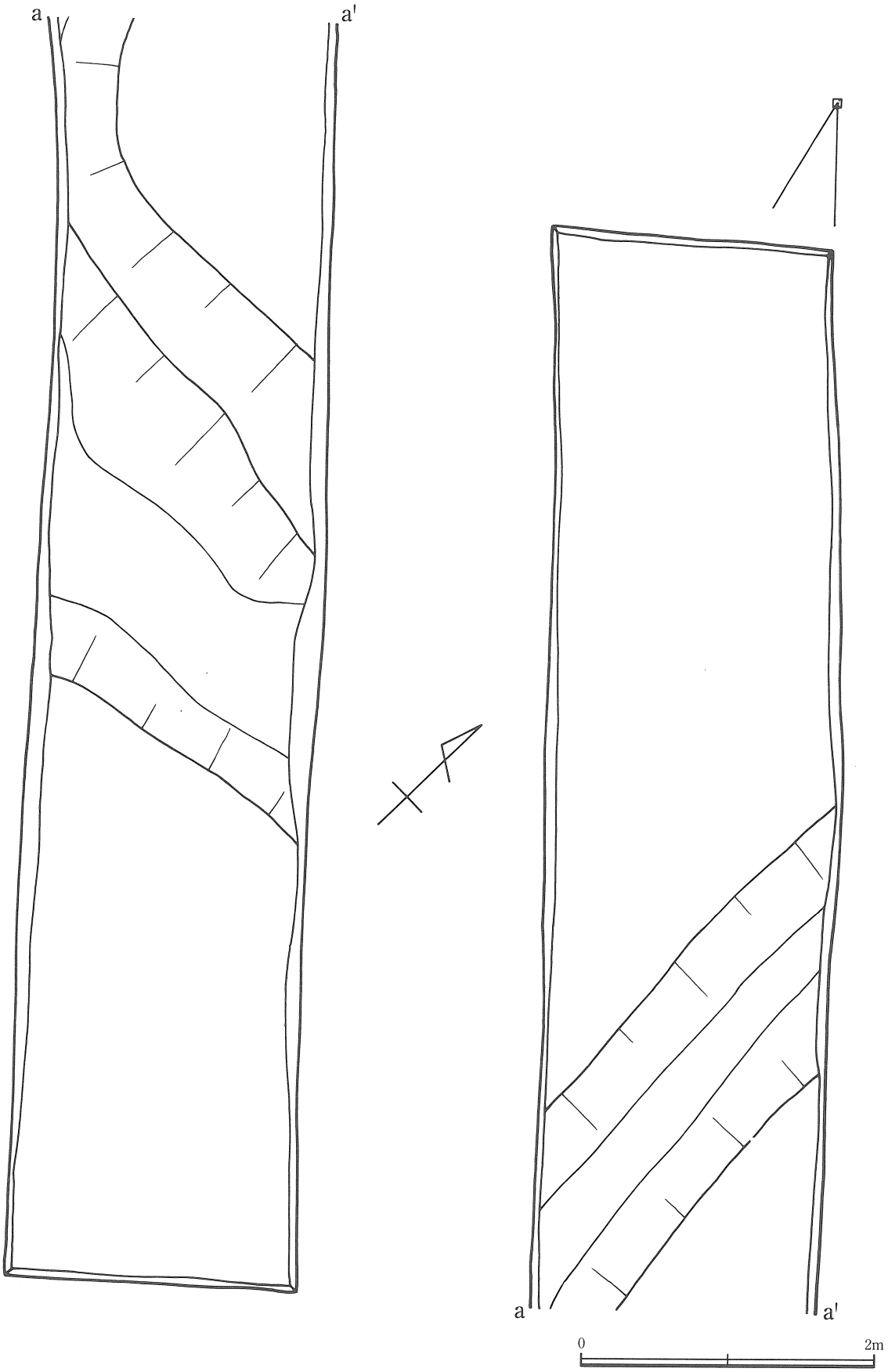

**第11図**　トレンチ平面図（5）Eトレンチその2・E2トレンチ（1/40、方位は磁北）



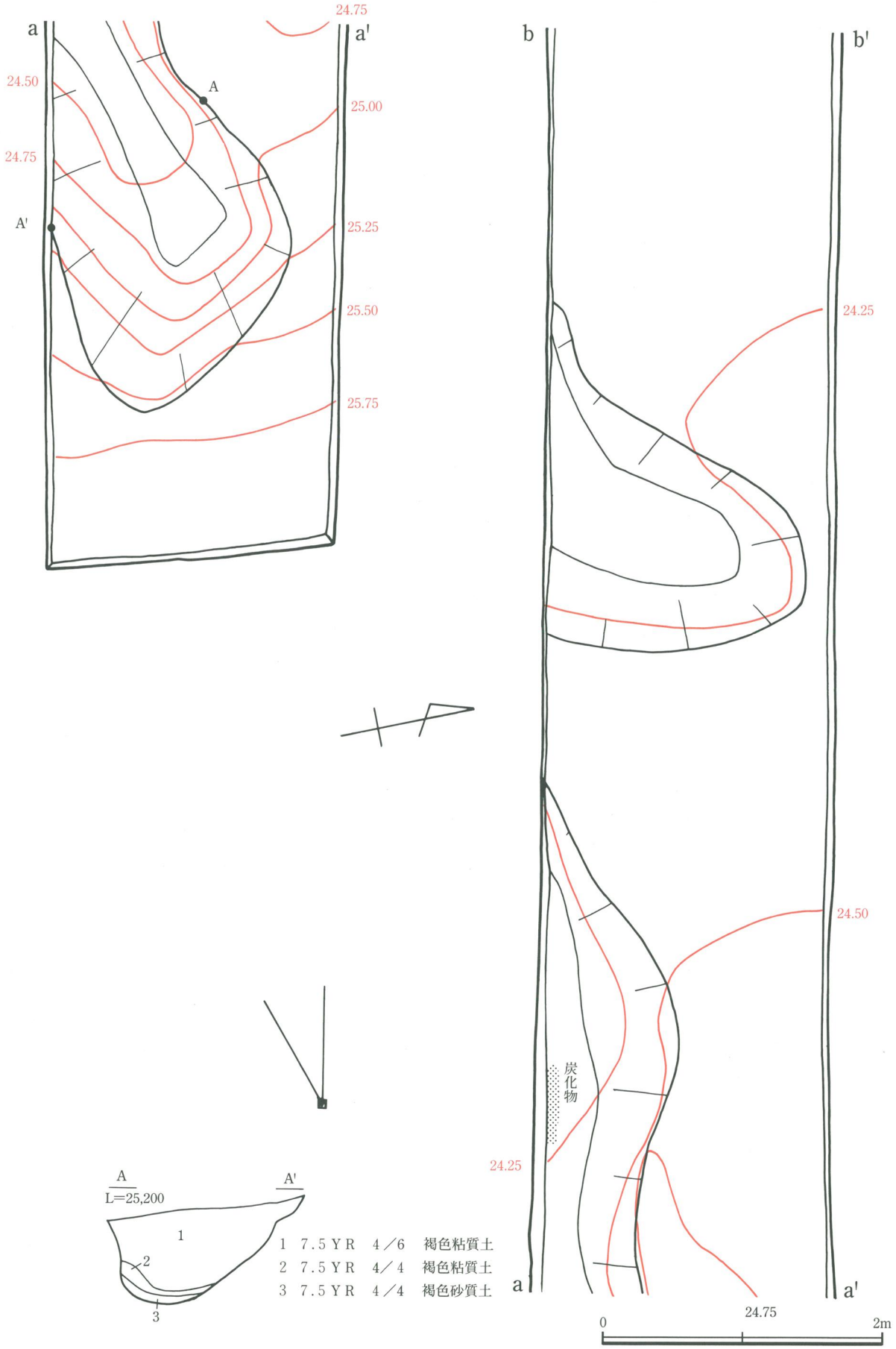

**第12図**　トレンチ平面図（6）E3トレンチ（1/40、方位は磁北）



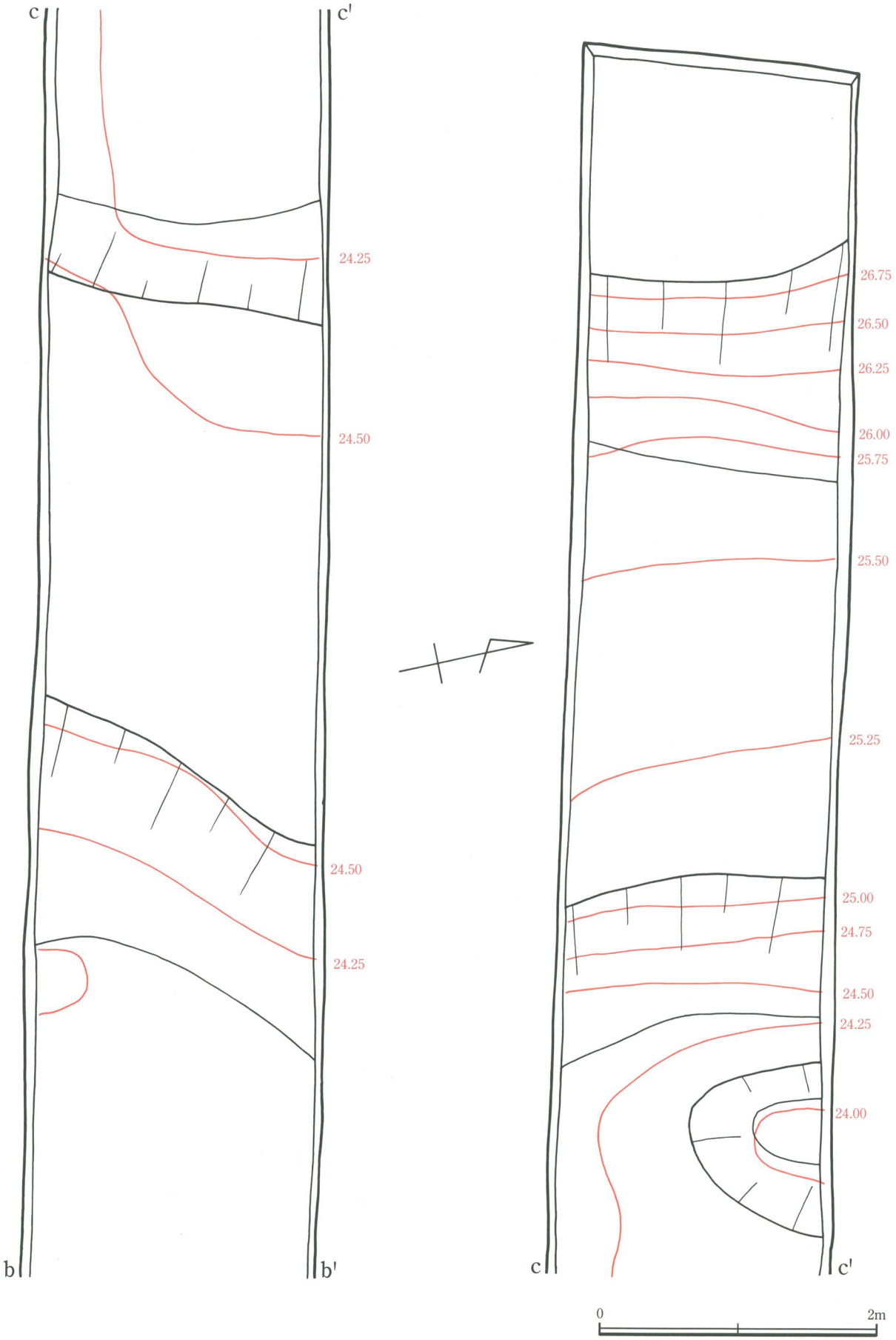

**第13図**　トレンチ平面図（7）NEトレンチ（1/40、方位は磁北、網点は陸橋部分）



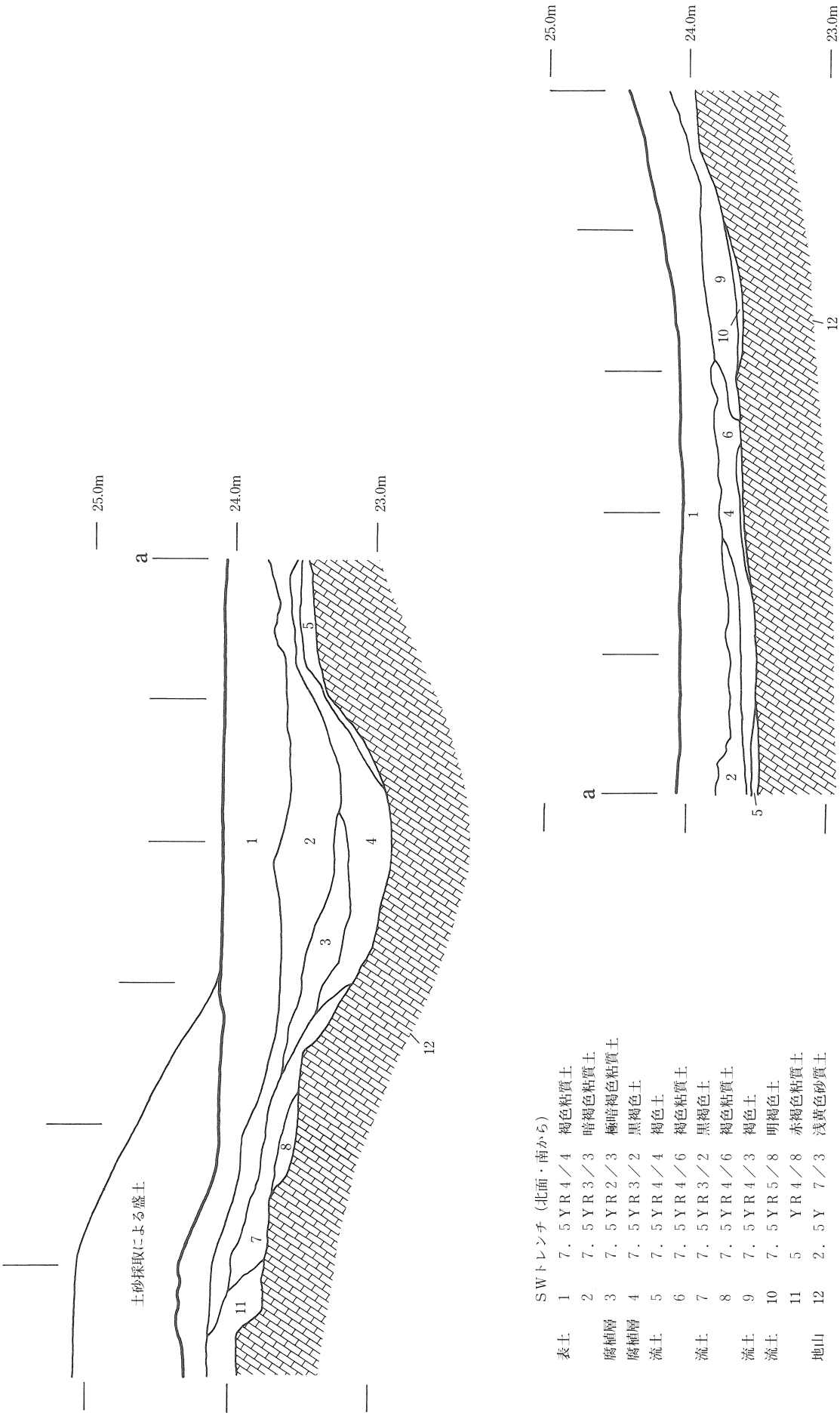

**第14図**　トレンチ平面図（8）ＮＷトレンチ（1/40、方位は磁北）



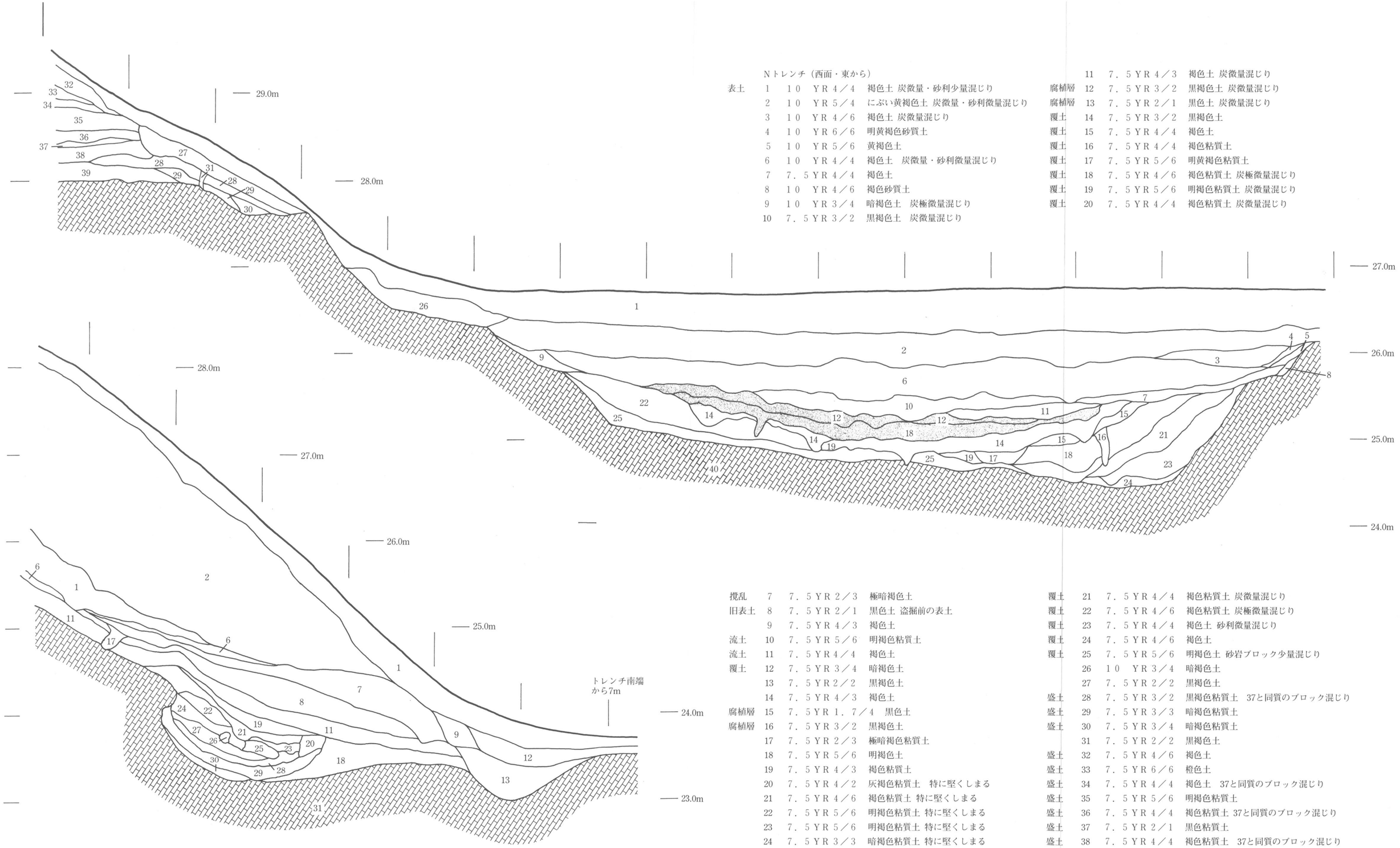

**第15図** トレンチ平面図（9）Wトレンチその1（1/40、方位は磁北）




**第16図**　トレンチ平面図（10）Wトレンチその2（1/40、方位は磁北）




**第17図**　トレンチ断面図（1）（1/40）




Nトレンチ（西面・東から）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 10 YR 4／4 | 褐色土 炭微量・砂利少量混じり | |
| | 2 | 10 YR 5／4 | にぶい黄褐色土 炭微量・砂利微量混じり | |
| | 3 | 10 YR 4／6 | 褐色土 炭微量混じり | |
| | 4 | 10 YR 6／6 | 明黄褐色砂質土 | |
| | 5 | 10 YR 5／6 | 黄褐色土 | |
| | 6 | 10 YR 4／4 | 褐色土 炭微量・砂利微量混じり | |
| | 7 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 | |
| | 8 | 10 YR 4／6 | 褐色砂質土 | |
| | 9 | 10 YR 3／4 | 暗褐色土 炭極微量混じり | |
| | 10 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 炭微量混じり | |
| | 11 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 炭微量混じり | |
| 腐植層 | 12 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 炭微量混じり | |
| 腐植層 | 13 | 7．5YR 2／1 | 黒色土 炭微量混じり | |
| 覆土 | 14 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 | |
| 覆土 | 15 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 | |
| 覆土 | 16 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 | |
| 覆土 | 17 | 7．5YR 5／6 | 明黄褐色粘質土 | |
| 覆土 | 18 | 7．5YR 4／6 | 褐色粘質土 炭極微量混じり | |
| 覆土 | 19 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 炭微量混じり | |
| 覆土 | 20 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 炭微量混じり | |

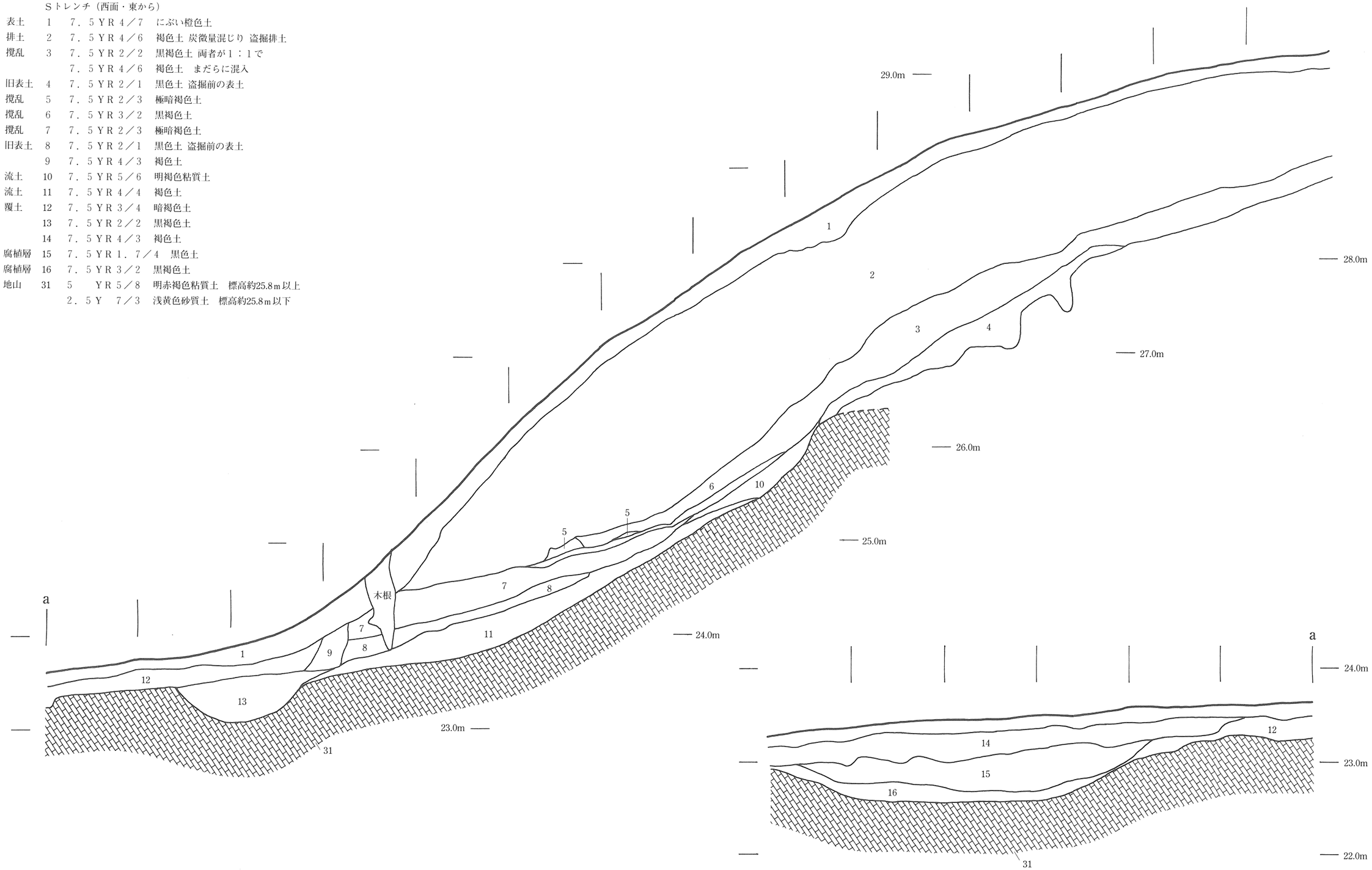
Sトレンチ（東面・西から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR 4／7 | にぶい橙色土 |
| 排土 | 2 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 炭微量混じり 盗掘排土 |
| 撹乱 | 3 | 7．5YR 2／2 | 黒褐色土 両者が1：1で |
| | | 7．5YR 4／6 | 褐色土 まだらに混入 |
| 旧表土 | 4 | 7．5YR 2／1 | 黒色土 盗掘前の表土 |
| 撹乱 | 5 | 7．5YR 2／3 | 極暗褐色土 |
| 撹乱 | 6 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 |
| 撹乱 | 7 | 7．5YR 2／3 | 極暗褐色土 |
| 旧表土 | 8 | 7．5YR 2／1 | 黒色土 盗掘前の表土 |
| | 9 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 |
| 流土 | 10 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 |
| 流土 | 11 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| 覆土 | 12 | 7．5YR 3／4 | 暗褐色土 |
| | 13 | 7．5YR 2／2 | 黒褐色土 |
| | 14 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 |
| 腐植層 | 15 | 7．5YR 1．7／4 | 黒色土 |
| 腐植層 | 16 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 |
| | 17 | 7．5YR 2／3 | 極暗褐色粘質土 |
| | 18 | 7．5YR 5／6 | 明褐色土 |
| | 19 | 7．5YR 4／3 | 褐色粘質土 |
| | 20 | 7．5YR 4／2 | 灰褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 21 | 7．5YR 4／6 | 褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 22 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 23 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 24 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 25 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 |
| | 26 | 7．5YR 3／4 | 暗褐色土 |
| | 27 | 7．5YR 4／6 | 褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 28 | 7．5YR 2／3 | 極暗褐色粘質土 特に堅くしまる |
| | 29 | 7．5YR 4／3 | 褐色粘質土 |
| | 30 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| 地山 | 31 | 5 YR 5／8 | 明赤褐色粘質土 標高約25.8m以上 |
| | | 2．5Y 7／3 | 浅黄色砂質土 標高約25.8m以下 |
| 覆土 | 21 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 炭微量混じり |
| 覆土 | 22 | 7．5YR 4／6 | 褐色粘質土 炭極微量混じり |
| 覆土 | 23 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 砂利微量混じり |
| 覆土 | 24 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 |
| 覆土 | 25 | 7．5YR 5／6 | 明褐色土 砂岩ブロック少量混じり |
| | 26 | 10 YR 3／4 | 暗褐色土 |
| | 27 | 7．5YR 2／2 | 黒褐色土 |
| 盛土 | 28 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色粘質土 37と同質のブロック混じり |
| 盛土 | 29 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色粘質土 |
| 盛土 | 30 | 7．5YR 3／4 | 暗褐色粘質土 |
| | 31 | 7．5YR 2／2 | 黒褐色土 |
| 盛土 | 32 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 |
| 盛土 | 33 | 7．5YR 6／6 | 橙色土 |
| 盛土 | 34 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 37と同質のブロック混じり |
| 盛土 | 35 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 |
| 盛土 | 36 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 37と同質のブロック混じり |
| 盛土 | 37 | 7．5YR 2／1 | 黒色粘質土 |
| 盛土 | 38 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 37と同質のブロック混じり |
| 旧表土 | 39 | 7．5YR 2／1 | 黒色粘質土 |
| 地山 | 40 | 5 YR 5／8 | 明赤褐色粘質土 標高約27.5m以上 |
| | | 2．5Y 7／3 | 浅黄色砂質土 標高約27.5m以下 |

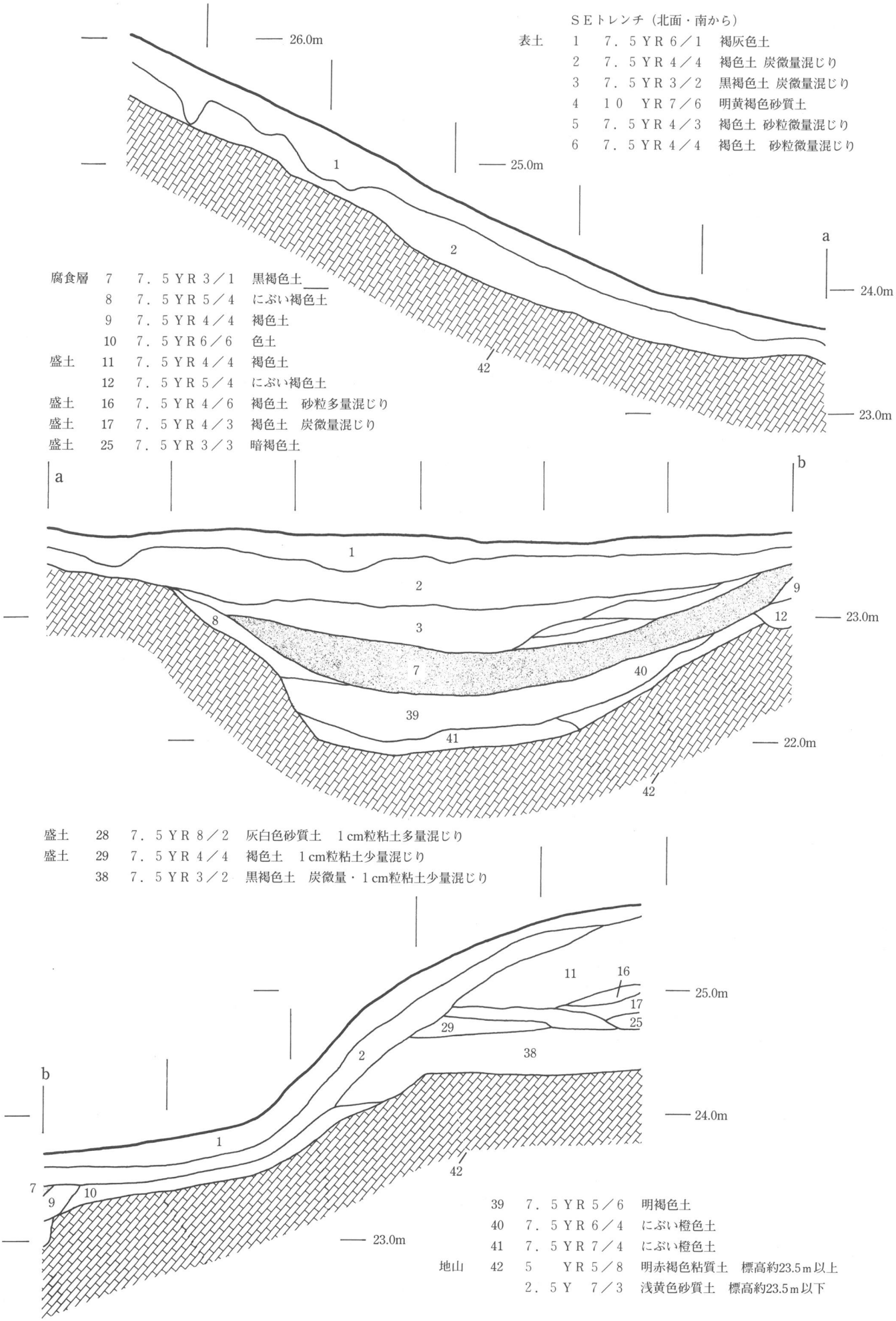
**第18図** トレンチ断面図（2）（1/40）

Ｓトレンチ（西面・東から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | ７．５ＹＲ４／７ | にぶい橙色土 |
| 排土 | 2 | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色土 炭微量混じり 盗掘排土 |
| 攪乱 | 3 | ７．５ＹＲ２／２ | 黒褐色土 両者が１：１で |
| | | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色土　まだらに混入 |
| 旧表土 | 4 | ７．５ＹＲ２／１ | 黒色土 盗掘前の表土 |
| 攪乱 | 5 | ７．５ＹＲ２／３ | 極暗褐色土 |
| 攪乱 | 6 | ７．５ＹＲ３／２ | 黒褐色土 |
| 攪乱 | 7 | ７．５ＹＲ２／３ | 極暗褐色土 |
| 旧表土 | 8 | ７．５ＹＲ２／１ | 黒色土 盗掘前の表土 |
| | 9 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色土 |
| 流土 | 10 | ７．５ＹＲ５／６ | 明褐色粘質土 |
| 流土 | 11 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色土 |
| 覆土 | 12 | ７．５ＹＲ３／４ | 暗褐色土 |
| | 13 | ７．５ＹＲ２／２ | 黒褐色土 |
| | 14 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色土 |
| 腐植層 | 15 | ７．５ＹＲ１．７／４ | 黒色土 |
| 腐植層 | 16 | ７．５ＹＲ３／２ | 黒褐色土 |
| 地山 | 31 | ５　　ＹＲ５／８ | 明赤褐色粘質土　標高約25.8ｍ以上 |
| | | ２．５Ｙ　７／３ | 浅黄色砂質土　標高約25.8ｍ以下 |




**第19図**　トレンチ断面図（3）（1/40）



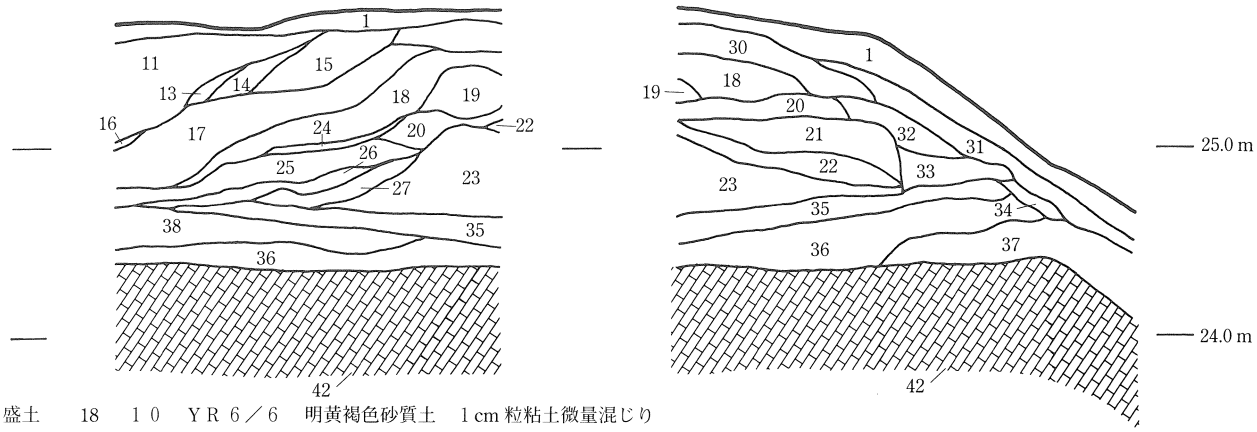

SEトレンチ（北面・南から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR 6／1 | 褐灰色土 |
| | 2 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 炭微量混じり |
| | 3 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 炭微量混じり |
| | 4 | 10 YR 7／6 | 明黄褐色砂質土 |
| | 5 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 砂粒微量混じり |
| | 6 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 砂粒微量混じり |
| 腐食層 | 7 | 7．5YR 3／1 | 黒褐色土 |
| | 8 | 7．5YR 5／4 | にぶい褐色土 |
| | 9 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| | 10 | 7．5YR 6／6 | 色土 |
| 盛土 | 11 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| | 12 | 7．5YR 5／4 | にぶい褐色土 |
| 盛土 | 16 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 砂粒多量混じり |
| 盛土 | 17 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 炭微量混じり |
| 盛土 | 25 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色土 |
| 盛土 | 28 | 7．5YR 8／2 | 灰白色砂質土 1cm粒粘土多量混じり |
| 盛土 | 29 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 1cm粒粘土少量混じり |
| | 38 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 炭微量・1cm粒粘土少量混じり |
| | 39 | 7．5YR 5／6 | 明褐色土 |
| | 40 | 7．5YR 6／4 | にぶい橙色土 |
| | 41 | 7．5YR 7／4 | にぶい橙色土 |
| 地山 | 42 | 5 YR 5／8 | 明赤褐色粘質土 標高約23.5m以上 |
| | | 2．5Y 7／3 | 浅黄色砂質土 標高約23.5m以下 |

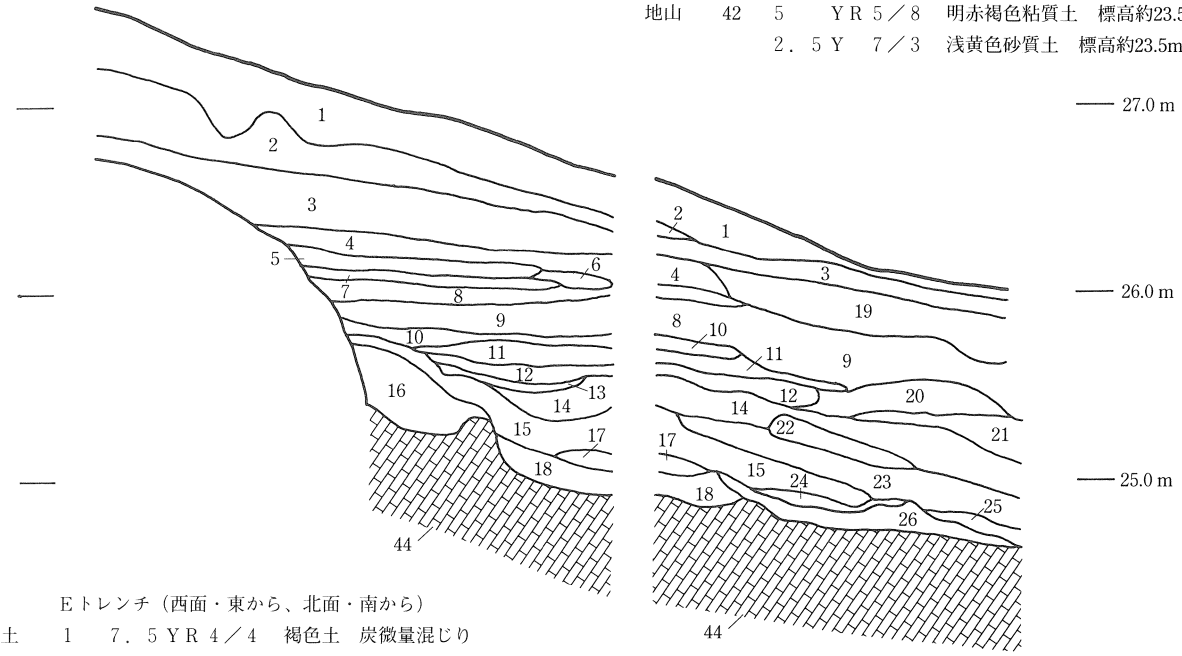
**第20図** トレンチ断面図（4）（1/40）

SEトレンチ（西面・東から、北面・南から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR 6／1 | 褐灰色土 |
| 盛土 | 11 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| 盛土 | 13 | 10　YR 8／3 | 浅黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 14 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 |
| 盛土 | 15 | 10　YR 8／3 | 浅黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 16 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　砂粒多量混じり |
| 盛土 | 17 | 7．5YR 4／3 | 褐色土　炭微量混じり |



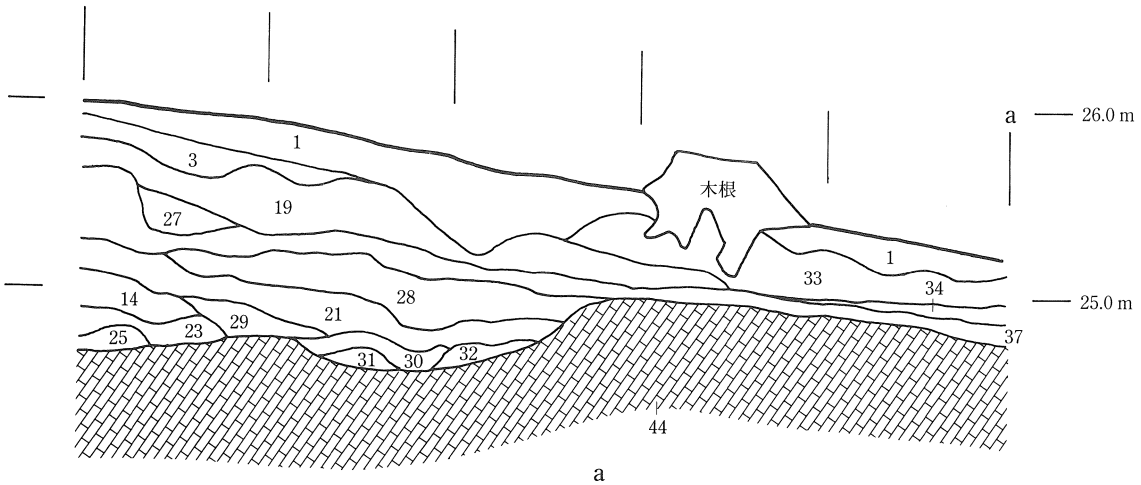

| | | | |
|---|---|---|---|
| 盛土 | 18 | 10　YR 6／6 | 明黄褐色砂質土　1cm粒粘土微量混じり |
| 盛土 | 19 | 7．5YR 3／4 | 暗褐色土　1cm粒粘土微量混じり |
| 盛土 | 20 | 7．5YR 6／6 | 橙色土　1cm粒粘土微量混じり |
| 盛土 | 21 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 |
| 盛土 | 22 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色土 |
| 盛土 | 23 | 10　YR 8／1 | 灰白色砂質土　黄褐色砂粒少量混じり |
| 盛土 | 24 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 25 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色土 |
| 盛土 | 26 | 10　YR 5／6 | 黄褐色砂質土　1cm粒粘土少量混じり |
| 盛土 | 27 | 7．5YR 3／4 | 暗褐色土　1cm粒粘土少量混じり |
| 盛土 | 28 | 7．5YR 8／2 | 灰白色砂質土　1cm粒粘土多量混じり |
| 盛土 | 29 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　1cm粒粘土多量混じり |
| 盛土 | 30 | 10　YR 6／3 | にぶい黄橙色砂質土 |
| | 31 | 10　YR 6／4 | にぶい黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 32 | 10　YR 4／3 | にぶい黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 33 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 |
| 盛土 | 34 | 10　YR 4／6 | 褐色砂質土 |
| 盛土 | 35 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 |
| | 36 | 7．5YR 3／1 | 黒褐色土　黄褐色砂粒少量混じり |
| | 37 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　炭微量混じり |
| | 38 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土　炭微量・1cm粒粘土少量混じり |
| 地山 | 42 | 5　YR 5／8 | 明赤褐色粘質土　標高約23.5m以上 |
| | | 2．5Y　7／3 | 浅黄色砂質土　標高約23.5m以上 |




Eトレンチ（西面・東から、北面・南から）

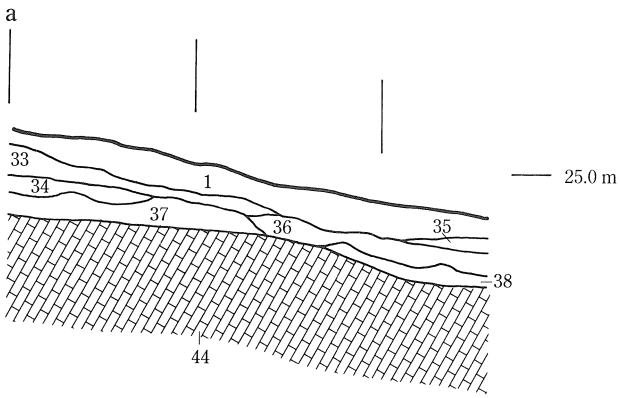
| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 2 | 7．5YR 5／4 | にぶい褐色土　炭少量混じり |
| 盛土 | 3 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　炭少量混じり |
| 盛土 | 4 | 7．5YR 5／8 | 明褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 5 | 7．5YR 6／8 | 色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 6 | 10　YR 6／4 | にぶい黄橙色砂質土　炭極微量混じり |
| 盛土 | 7 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 8 | 10　YR 6／3 | にぶい黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 9 | 7．5YR 5／6 | 明褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 10 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 11 | 7．5YR 5／4 | にぶい褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 12 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 13 | 7．5YR 4／6 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 14 | 7．5YR 4／3 | 褐色土　炭少量混じり |
| 盛土 | 15 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭少量混じり |
| 盛土 | 16 | 7．5YR 5／6 | 明褐色土　炭極微量混じり |
| 盛土 | 17 | 7．5YR 3／3 | 暗褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 18 | 10　YR 5／4 | にぶい黄褐色砂質土　炭微量混じり |
| 盛土 | 19 | 10　YR 4／2 | 灰黄褐色砂質土　炭極微量混じり |
| 盛土 | 20 | 10　YR 8／4 | 浅黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 21 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭極微量混じり |
| 盛土 | 22 | 10　YR 8／4 | 浅黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 23 | 10　YR 7／3 | にぶい黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 24 | 10　YR 6／3 | にぶい黄橙色砂質土 |
| 盛土 | 25 | 7．5YR 4／4 | 褐色土　炭微量混じり |
| 盛土 | 26 | 7．5YR 4／6 | 褐色砂質土　炭微量混じり |
| 地山 | 44 | 2．5Y　7／3 | 浅黄色砂質土 |

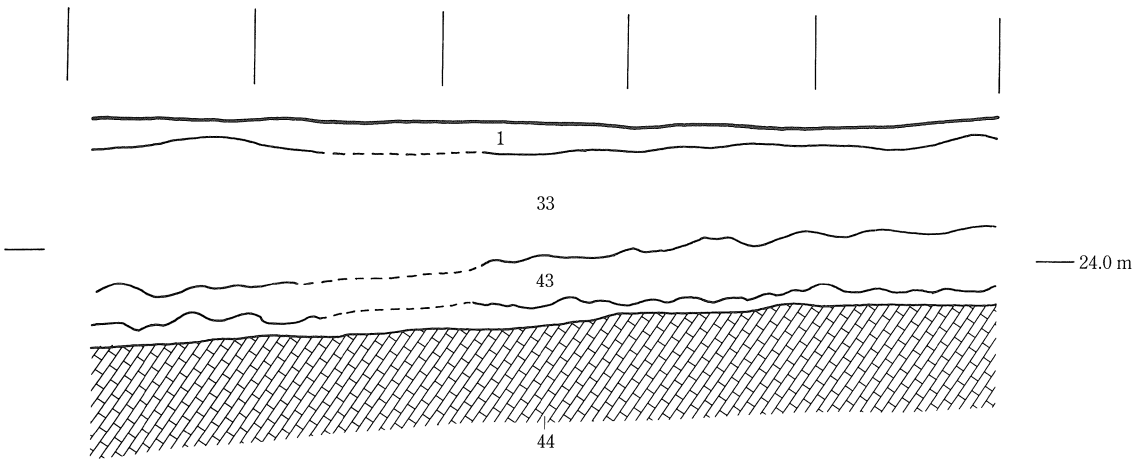
**第21図**　トレンチ断面図（5）（1/40）




Eトレンチ（西面・東から）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| 盛土 | 3 | 7．5ＹＲ４／６ | 褐色土 | 炭少量混じり |
| 盛土 | 9 | 7．5ＹＲ５／６ | 明褐色土 | 炭微量混じり |
| 盛土 | 14 | 7．5ＹＲ４／３ | 褐色土 | 炭少量混じり |
| 盛土 | 21 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭極微量混じり |
| 盛土 | 23 | １０　ＹＲ７／３ | にぶい黄橙色砂質土 | |
| 盛土 | 25 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| 盛土 | 27 | 7．5ＹＲ４／３ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| 盛土 | 28 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭少量混じり |
| 盛土 | 29 | １０　ＹＲ７／３ | にぶい黄橙色砂質土 | 炭少量混じり |
| 覆土 | 30 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | |
| 覆土 | 31 | １０　ＹＲ７／４ | にぶい黄橙色砂質土 | |
| 覆土 | 32 | １０　ＹＲ５／６ | 黄褐色砂質土 | 炭微量混じり |
| | 33 | １０　ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| | 34 | 7．5ＹＲ５／６ | 明褐色土 | 炭極微量混じり |
| | 35 | １０　ＹＲ４／３ | にぶい黄褐色土 | |
| | 36 | １０　ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭極微量混じり |
| | 37 | １０　ＹＲ４／６ | 褐色砂質土 | |
| | 38 | １０　ＹＲ４／６ | 褐色土 | |
| 地山 | 44 | ２．５Ｙ　７／３ | 浅黄色砂質土 | |

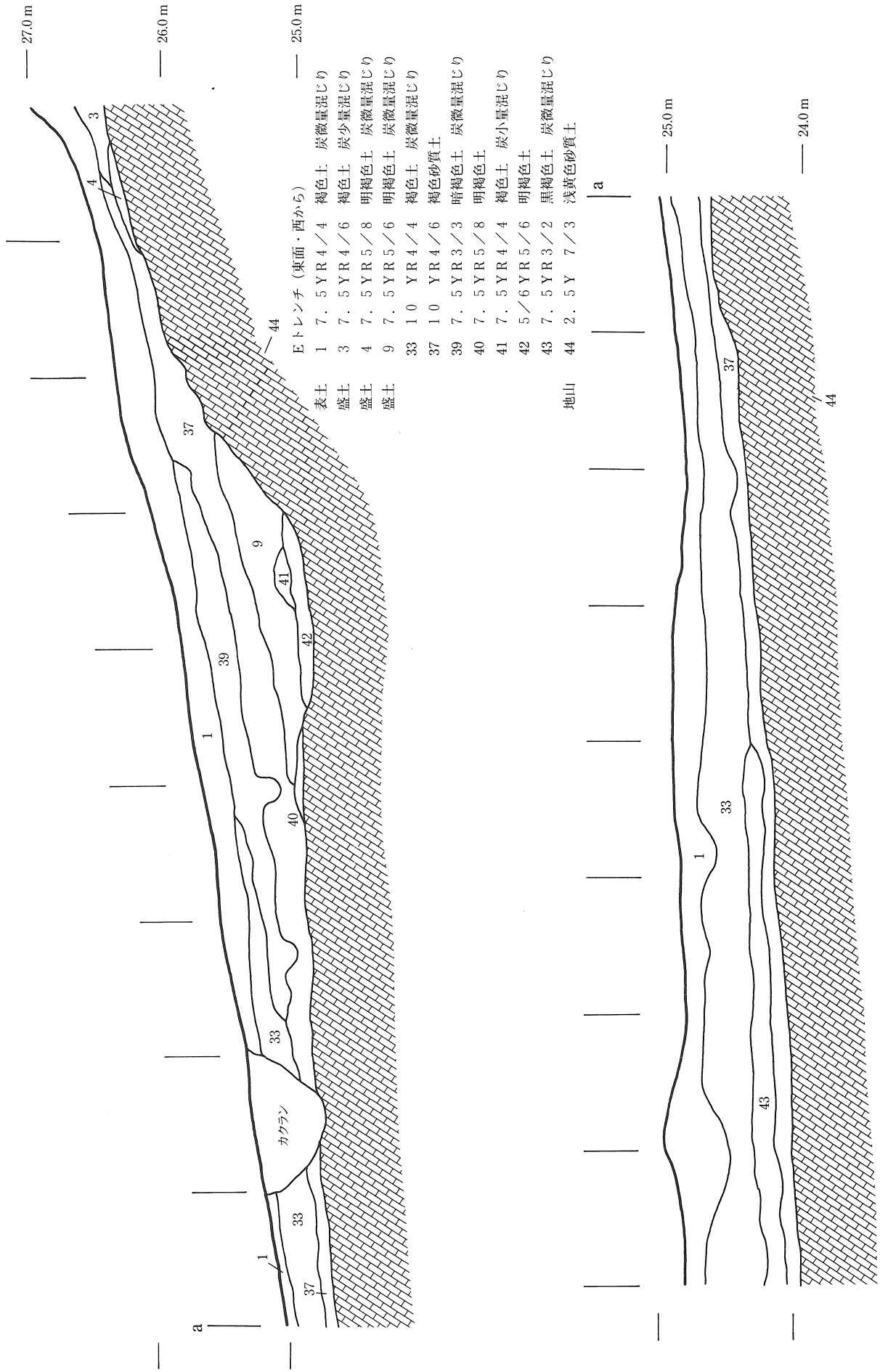


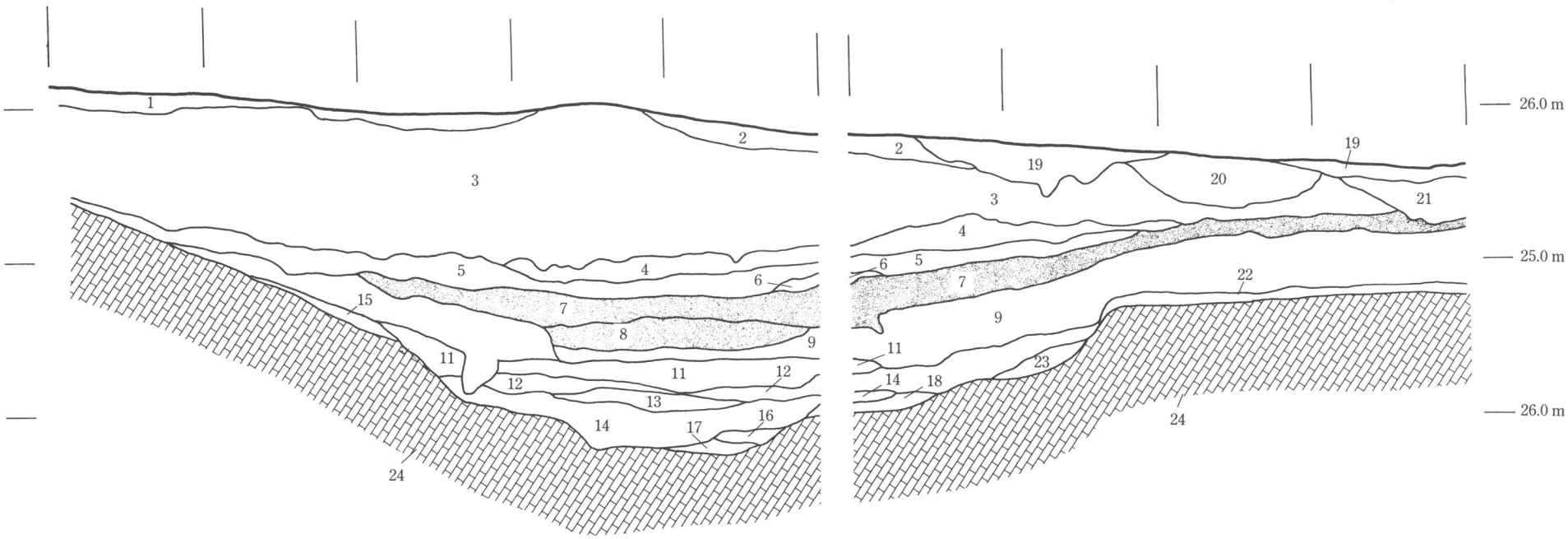

Ｅ２トレンチ（東面・西から）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| | 33 | １０　ＹＲ４／４ | 褐色土 | 炭微量混じり |
| | 37 | １０　ＹＲ４／６ | 褐色砂質土 | |
| | 43 | 7．5ＹＲ３／２ | 黒褐色土 | 炭微量混じり |
| 地山 | 44 | ２．５Ｙ　７／３ | 浅黄色砂質土 | |

**第22図**　トレンチ断面図（6）（1/40）



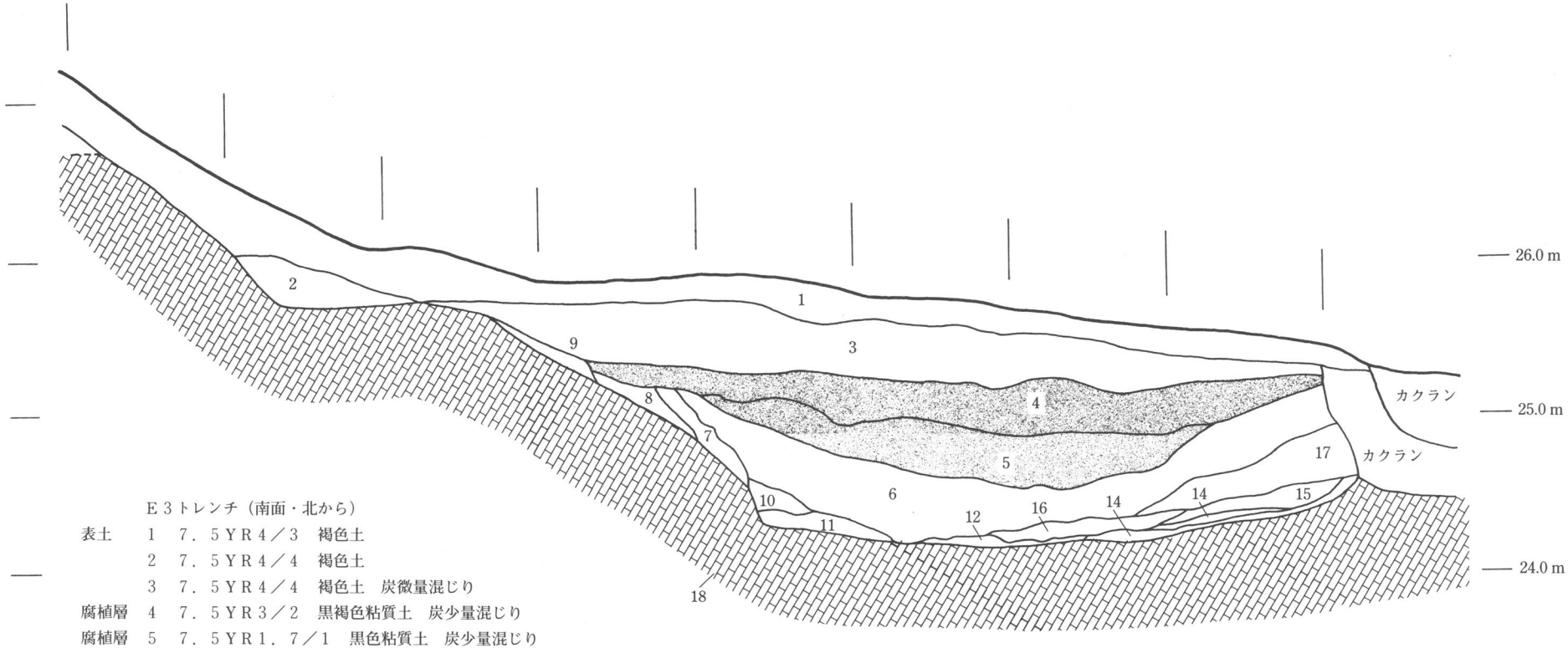

**第23図**　トレンチ断面図（7）（1/40）




**第24図**　トレンチ断面図（8）（1/40）

ＮＥトレンチ（西面・東から、北面・南から）

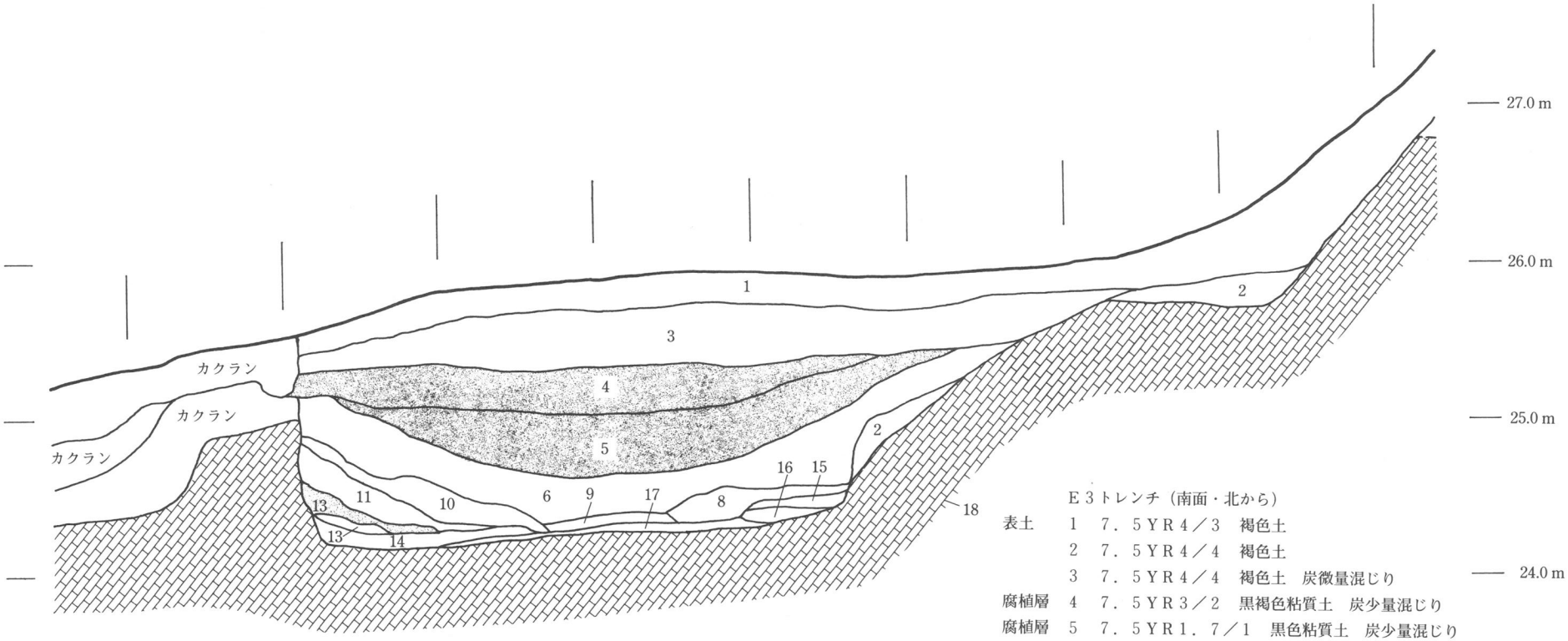
| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5ＹＲ5／1 | 褐灰色土 |
| 撹乱 | 2 | 7．5ＹＲ5／6 | 明褐色土 |
| | 3 | 7．5ＹＲ4／3 | 褐色土　炭少量混じり |
| | 4 | 7．5ＹＲ3／3 | 暗褐色土 |
| | 5 | 7．5ＹＲ3／2 | 黒褐色土 |
| | 6 | 7．5ＹＲ4／3 | 褐色土 |
| 腐植層 | 7 | 7．5ＹＲ3／1 | 黒褐色土 |
| 腐植層 | 8 | 7．5ＹＲ2／1 | 黒色土 |
| 覆土 | 9 | 7．5ＹＲ4／4 | 褐色土 黒色土少量混じり |
| | 10 | 7．5ＹＲ4／6 | 褐色土 |
| | 11 | 7．5ＹＲ4／4 | 褐色土 |
| | 12 | 7．5ＹＲ4／4 | 褐色土 |
| | 13 | 7．5ＹＲ5／6 | 明褐色土 |
| | 14 | 7．5ＹＲ4／6 | 褐色土 |
| | 15 | 7．5ＹＲ5／8 | 明褐色土 |
| | 16 | 7．5ＹＲ3／4 | 暗褐色土 |
| | 17 | 7．5ＹＲ5／6 | 明褐色砂質土 |
| | 18 | 7．5ＹＲ4／6 | 褐色土 |
| 撹乱 | 19 | 7．5ＹＲ4／3 | 褐色土 |
| 撹乱 | 20 | 7．5ＹＲ4／4 | 褐色土 |
| 撹乱 | 21 | 7．5ＹＲ6／8 | 橙色土 |
| | 22 | 7．5ＹＲ4／6 | 褐色土 |
| | 23 | 7．5ＹＲ4／3 | 褐色土 |
| 地山 | 24 | 5　ＹＲ5／8 | 明赤褐色粘質土 標高約24.5ｍ以上 |
| | | 2．5ＹＲ7／3 | にぶい黄色砂質土 標高約24.5ｍ以下 |




**第25図**　トレンチ断面図（9）（1/40）

Ｅ３トレンチ（南面・北から）

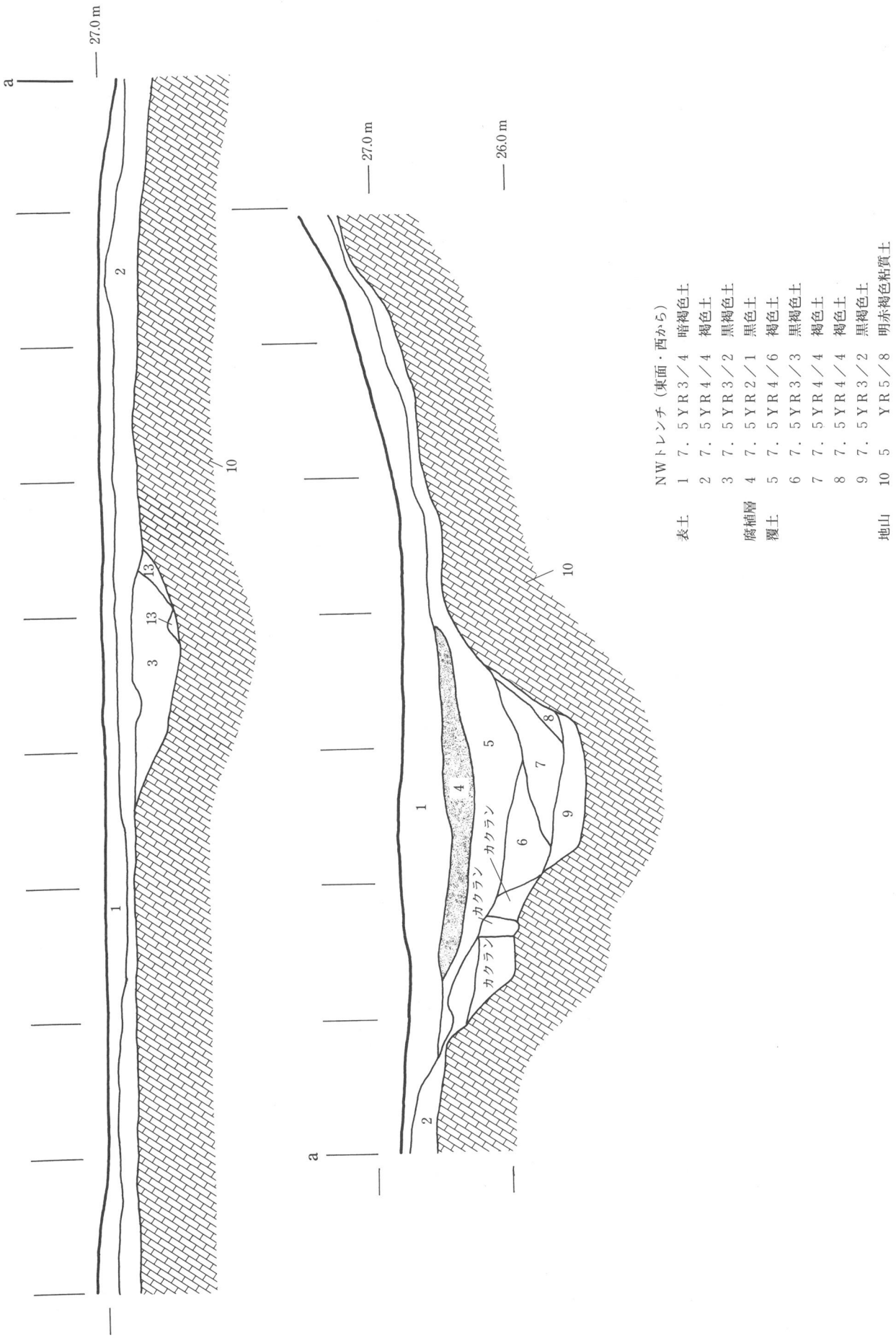
| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色土 |
| | 2 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色土 |
| | 3 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色土　炭微量混じり |
| 腐植層 | 4 | ７．５ＹＲ３／２ | 黒褐色粘質土　炭少量混じり |
| 腐植層 | 5 | ７．５ＹＲ１．７／１ | 黒色粘質土　炭少量混じり |
| 覆土 | 6 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 7 | ７．５ＹＲ４／６ | 明褐色粘質土 |
| | 8 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 9 | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色土 |
| | 10 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 11 | ７．５ＹＲ３／３ | 暗褐色粘質土　炭微量混じり |
| 腐植層 | 12 | ７．５ＹＲ２／２ | 黒褐色粘質土　炭少量混じり |
| | 13 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 14 | ７．５ＹＲ５／６ | 明褐色土 |
| | 15 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 16 | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色粘質土 |
| | 17 | ７．５ＹＲ５／６ | 明褐色土 |
| 地山 | 18 | ５　ＹＲ５／８ | 明赤褐色粘質土　標高約25.4ｍ以上 |
| | | ２．５ＹＲ７／３ | にぶい黄色砂質土　標高約25.4ｍ以下 |



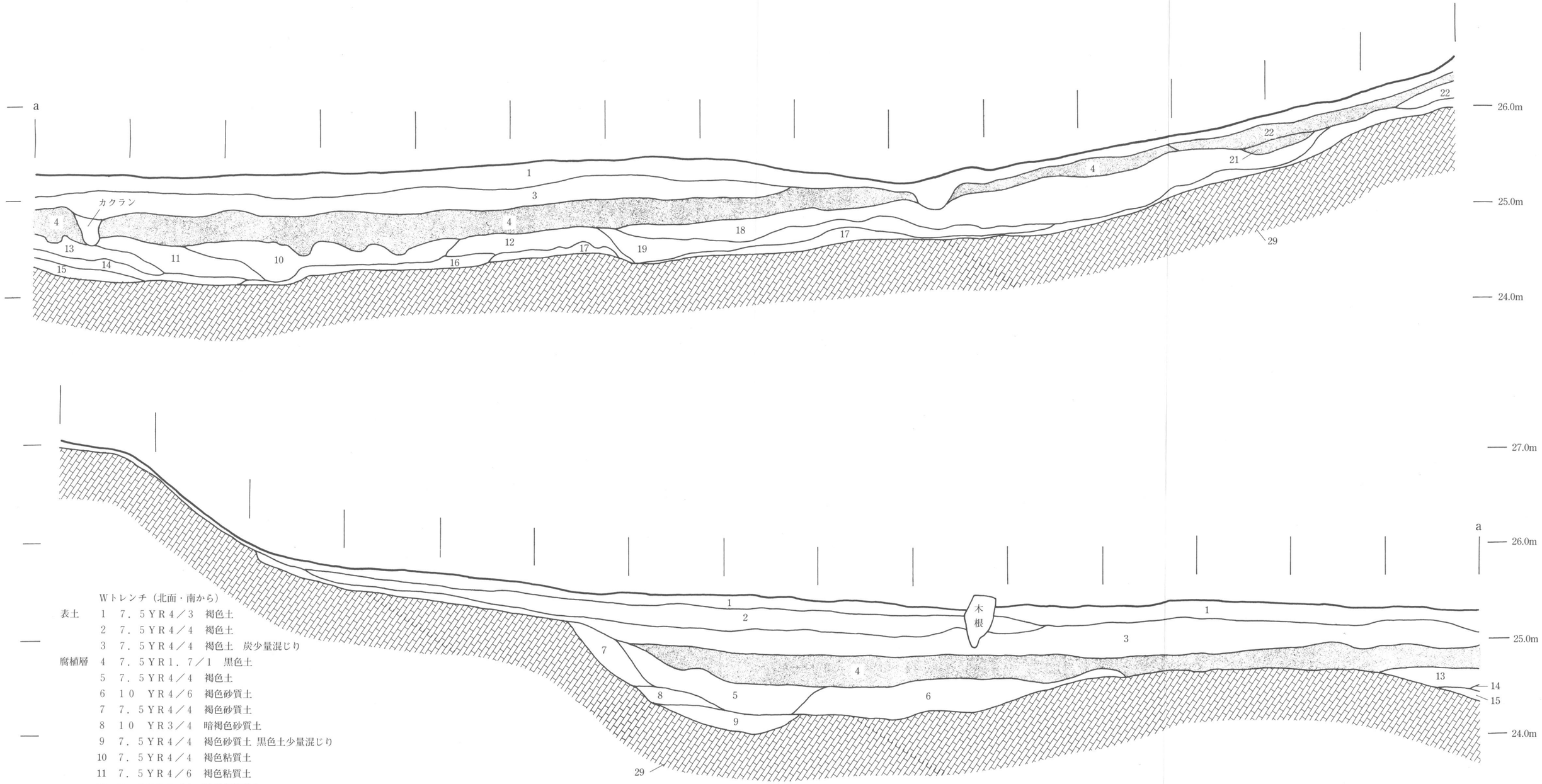

E３トレンチ（南面・北から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色土 |
| | 2 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色土 |
| | 3 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色土　炭微量混じり |
| 腐植層 | 4 | ７．５ＹＲ３／２ | 黒褐色粘質土　炭少量混じり |
| 腐植層 | 5 | ７．５ＹＲ１．７／１ | 黒色粘質土　炭少量混じり |
| 覆土 | 6 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 7 | ７．５ＹＲ４／６ | 明褐色粘質土 |
| | 8 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 9 | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色土 |
| | 10 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 11 | ７．５ＹＲ３／３ | 暗褐色粘質土　炭微量混じり |
| 腐植層 | 12 | ７．５ＹＲ２／２ | 黒褐色粘質土　炭少量混じり |
| | 13 | ７．５ＹＲ４／４ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 14 | ７．５ＹＲ５／６ | 明褐色土 |
| | 15 | ７．５ＹＲ４／３ | 褐色粘質土　炭微量混じり |
| | 16 | ７．５ＹＲ４／６ | 褐色粘質土 |
| | 17 | ７．５ＹＲ５／６ | 明褐色土 |
| 地山 | 18 | ５　ＹＲ５／８ | 明赤褐色粘質土　標高約25.4ｍ以上 |
| | | ２．５ＹＲ７／３ | にぶい黄色砂質土　標高約25.4ｍ以下 |

**第26図**　トレンチ断面図（10）（1/40）



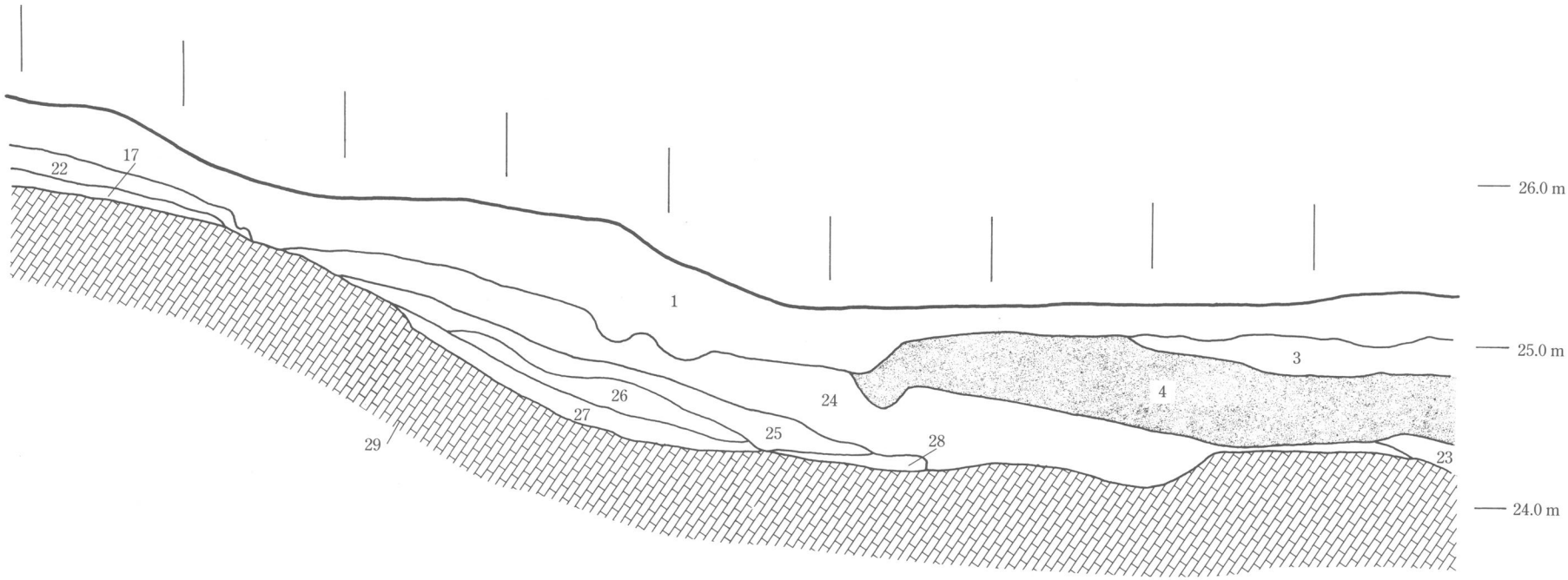

**第27図**　トレンチ断面図（11）（1/40）




Wトレンチ（北面・南から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5ＹＲ４／３ | 褐色土 |
| | 2 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 |
| | 3 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土　炭少量混じり |
| 腐植層 | 4 | 7．5ＹＲ１．７／１ | 黒色土 |
| | 5 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色土 |
| | 6 | １０　ＹＲ４／６ | 褐色砂質土 |
| | 7 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色砂質土 |
| | 8 | １０　ＹＲ３／４ | 暗褐色砂質土 |
| | 9 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色砂質土 黒色土少量混じり |
| | 10 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 11 | 7．5ＹＲ４／６ | 褐色粘質土 |
| | 12 | 7．5ＹＲ３／４ | 暗褐色粘質土 |
| | 13 | 7．5ＹＲ５／６ | 明褐色粘質土 |
| | 14 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 15 | １０　ＹＲ５／８ | 黄褐色砂質土 |
| | 16 | １０　ＹＲ４／６ | 褐色砂質土 |
| | 17 | １０　ＹＲ５／６ | 黄褐色砂質土 |
| | 18 | 7．5ＹＲ４／４ | 褐色粘質土 |
| | 19 | 7．5ＹＲ４／６ | 褐色粘質土 |
| 腐植層 | 20 | 7．5ＹＲ３／２ | 黒褐色土 |
| 腐植層 | 21 | 7．5ＹＲ２／２ | 黒褐色土 |
| | 22 | 7．5ＹＲ６／８ | 橙色土 |
| 地山 | 29 | ５　ＹＲ５／８ | 明赤褐色粘質土 標高約26.5ｍ以上 |
| | | ２．5ＹＲ７／３ | にぶい黄色砂質土 標高約26.5ｍ以下 |

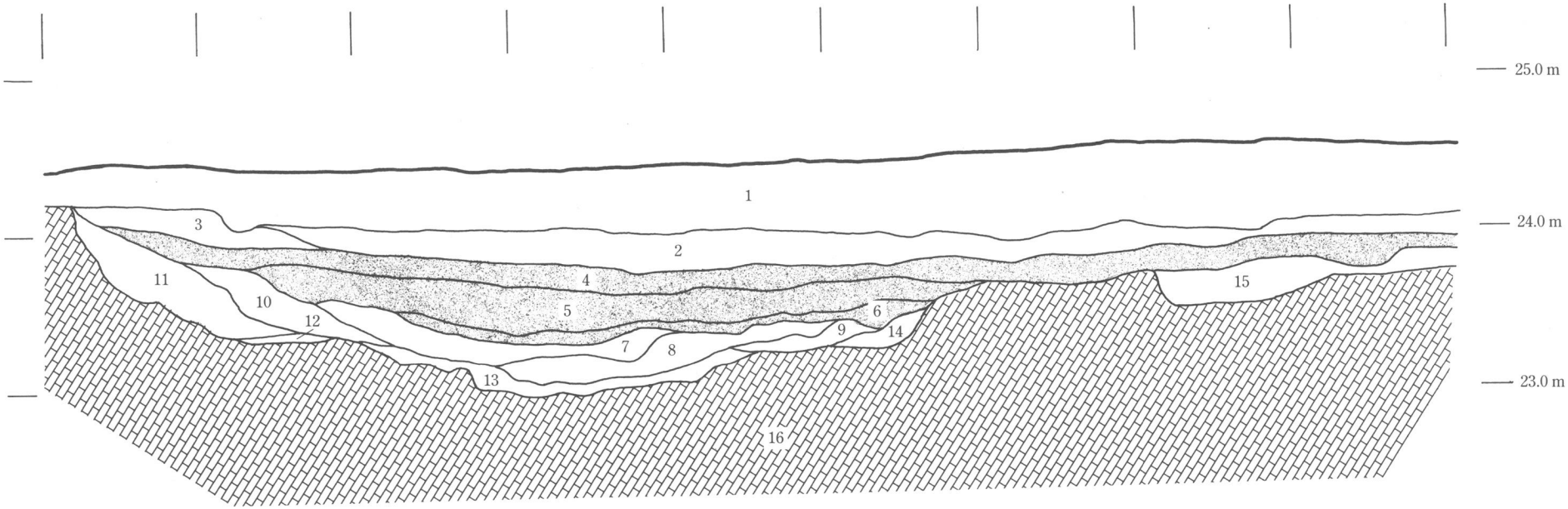
**第28図**　トレンチ断面図（12）（1/40）




Wトレンチ（南面・北から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR4／3 | 褐色土 |
| | 3 | 7．5YR4／4 | 褐色土　炭少量混じり |
| 腐植層 | 4 | 7．5YR1．7／1 | 黒色土 |
| | 17 | 10　YR5／6 | 黄褐色砂質土 |
| | 22 | 7．5YR6／8 | 橙色土 |
| | 23 | 7．5YR4／4 | 褐色土 |
| | 24 | 7．5YR4／6 | 褐色粘質土 |
| | 25 | 7．5YR4／4 | 褐色粘質土 |
| | 26 | 10　YR4／6 | 褐色砂質土 |
| | 27 | 7．5YR5／6 | 明褐色砂質土 |
| | 28 | 5　YR5／6 | 明赤褐色土 |
| 地山 | 29 | 5　YR5／8 | 明赤褐色粘質土　標高約26.5m以上 |
| | | 2．5YR7／3 | にぶい黄色砂質土　標高約26.5m以下 |

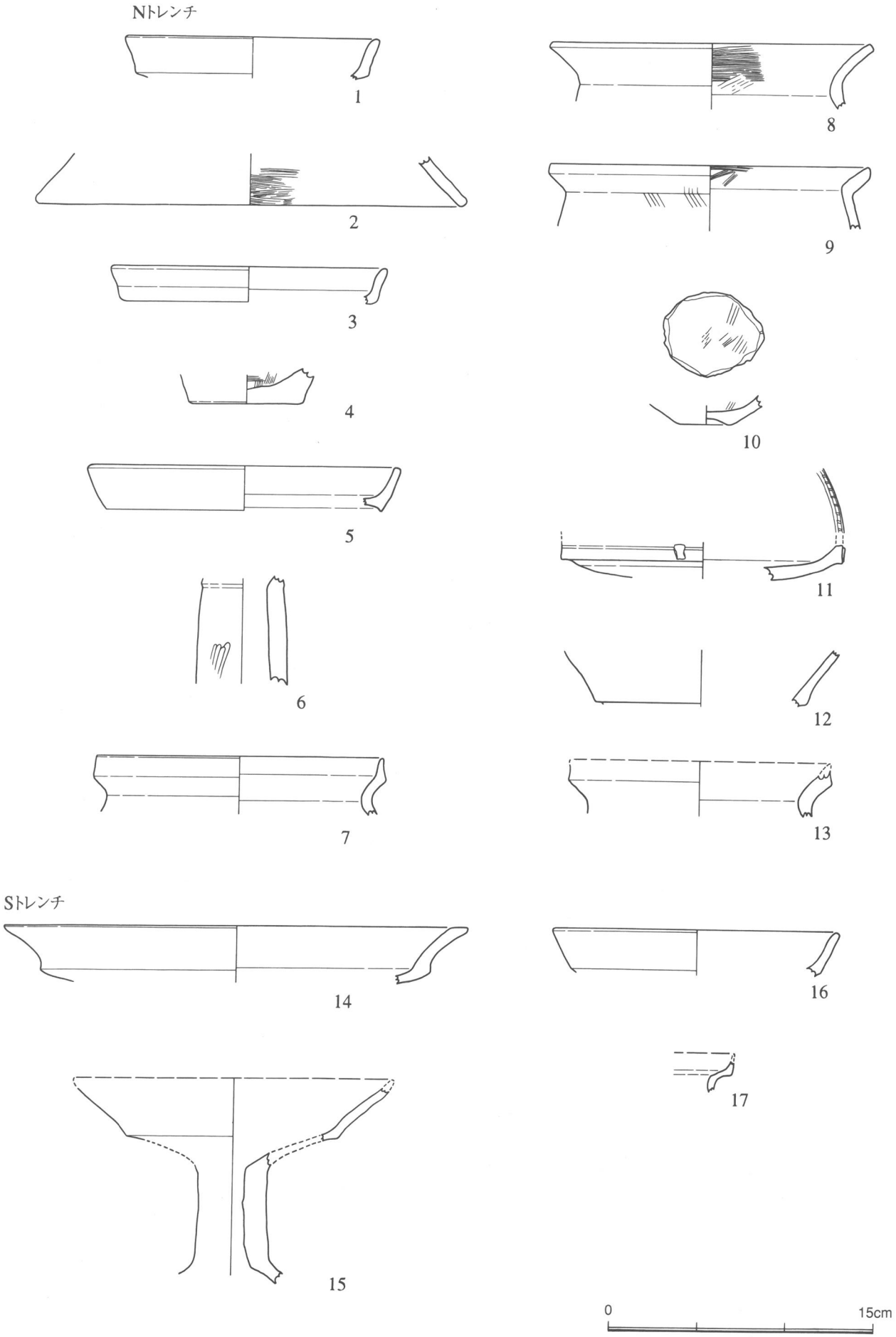
**第29図**　トレンチ断面図（13）（1/40）



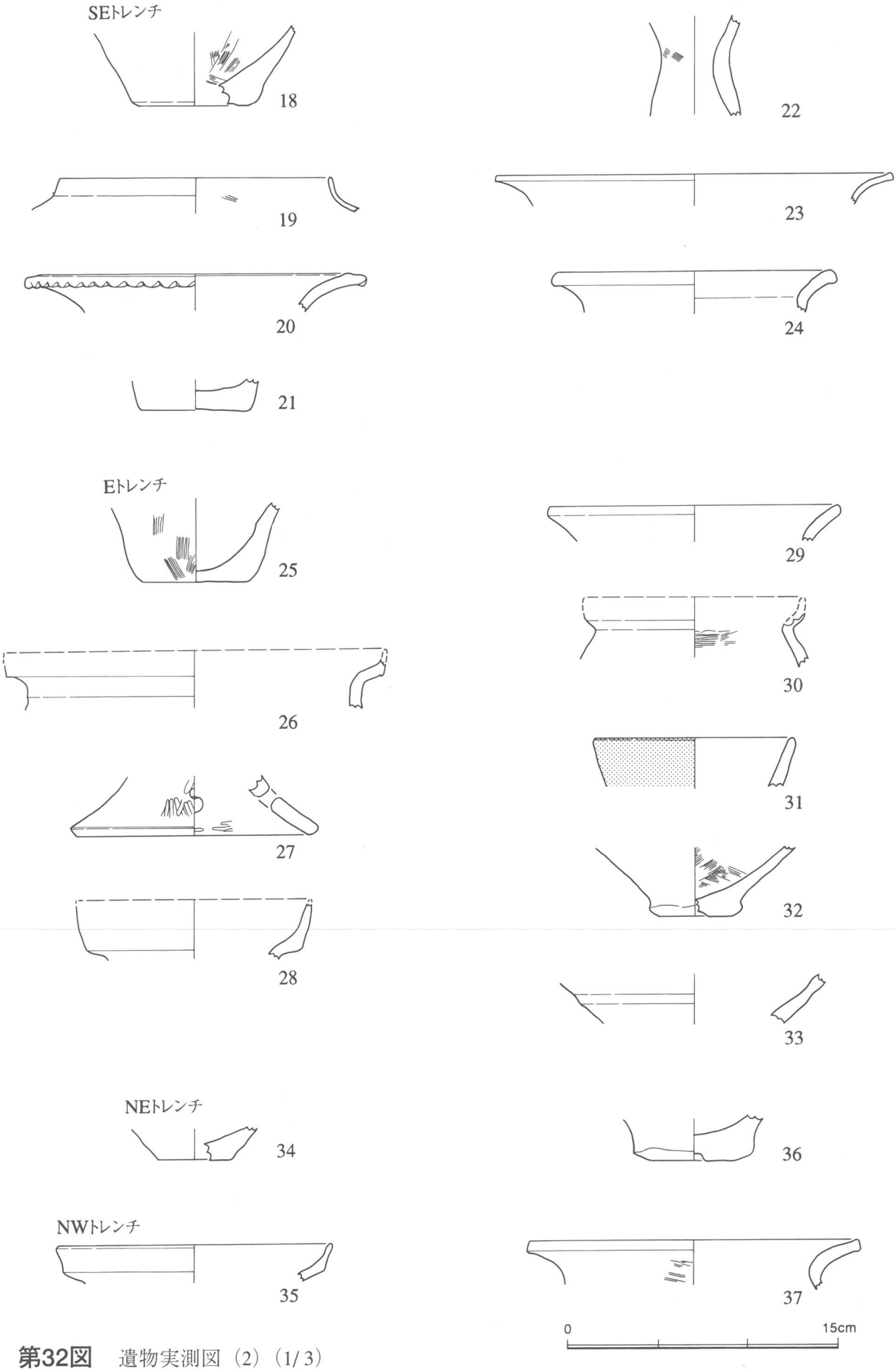

**第30図**　トレンチ断面図（14）（1/40）

後方部西側土砂採取跡法面（北面・南から）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 表土 | 1 | 7．5YR 4／4 | 褐色土 |
| | 2 | 10　YR 6／4 | にぶい黄橙色砂質土 |
| | 3 | 10　YR 4／6 | 褐色土 |
| 腐植層 | 4 | 7．5YR 3／2 | 黒褐色土 |
| 腐植層 | 5 | 7．5YR 2／1 | 黒色土 |
| 腐植層 | 6 | 7．5YR 4／3 | 褐色土 |
| 覆土 | 7 | 7．5YR 5／6 | 明褐色粘質土 |
| 覆土 | 8 | 7．5YR 4／4 | 褐色粘質土 |
| 覆土 | 9 | 7．5YR 4／6 | 褐色土 |
| 覆土 | 10 | 7．5YR 4／3 | 褐色粘質土 |
| 覆土 | 11 | 7．5YR 4／6 | 褐色粘質土 |
| 覆土 | 12 | 7．5YR 5／6 | 明褐色砂質土 |
| | 13 | 10　YR 4／6 | 褐色砂質土 |
| | 14 | 7．5YR 4／6 | 褐色砂質土 |
| | 15 | 10　YR 4／4 | 褐色土 |
| 地山 | 16 | 2．5Y　7／3 | 浅黄色砂質土 |

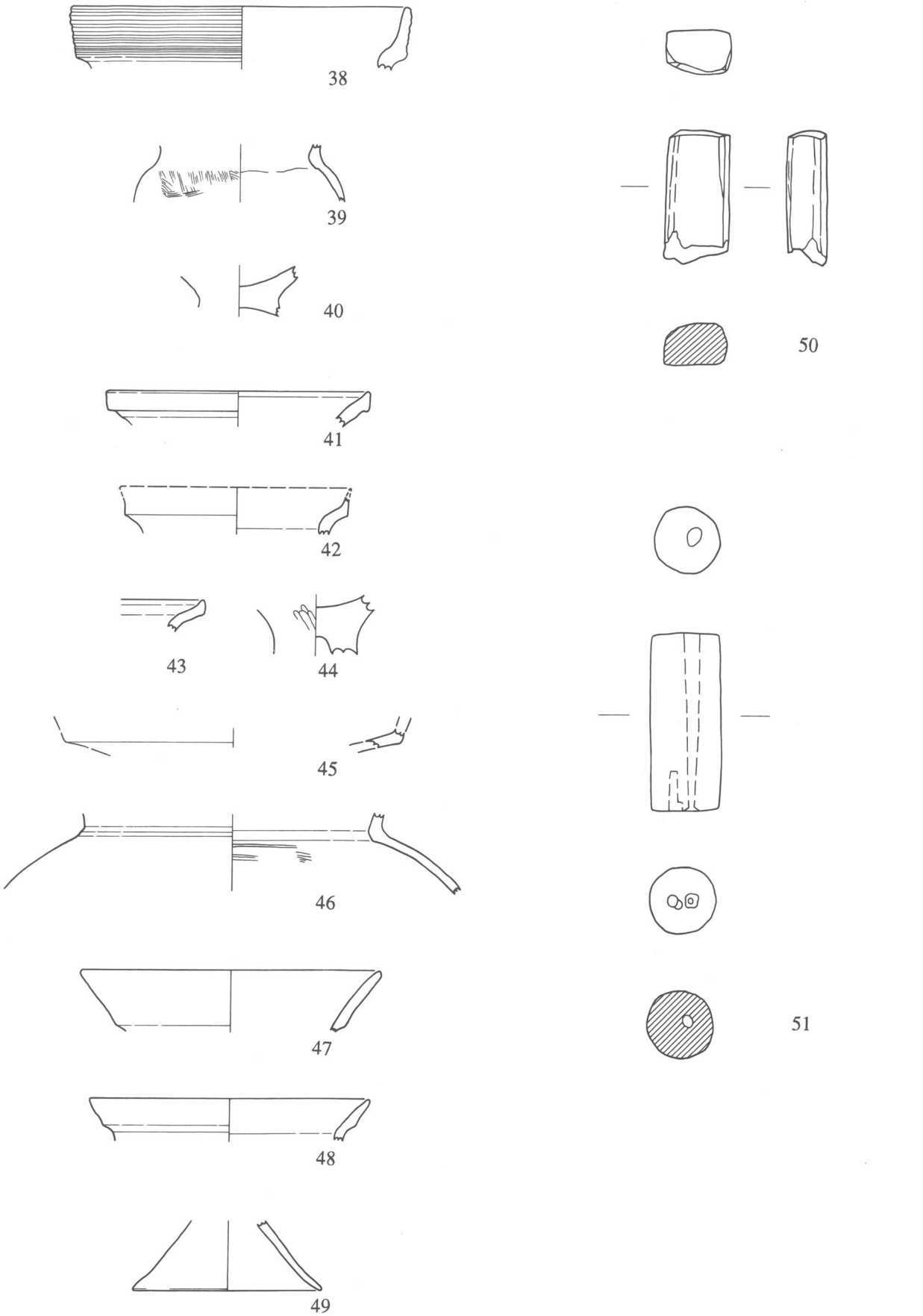



**第31図**　遺物実測図（1）（1/3）



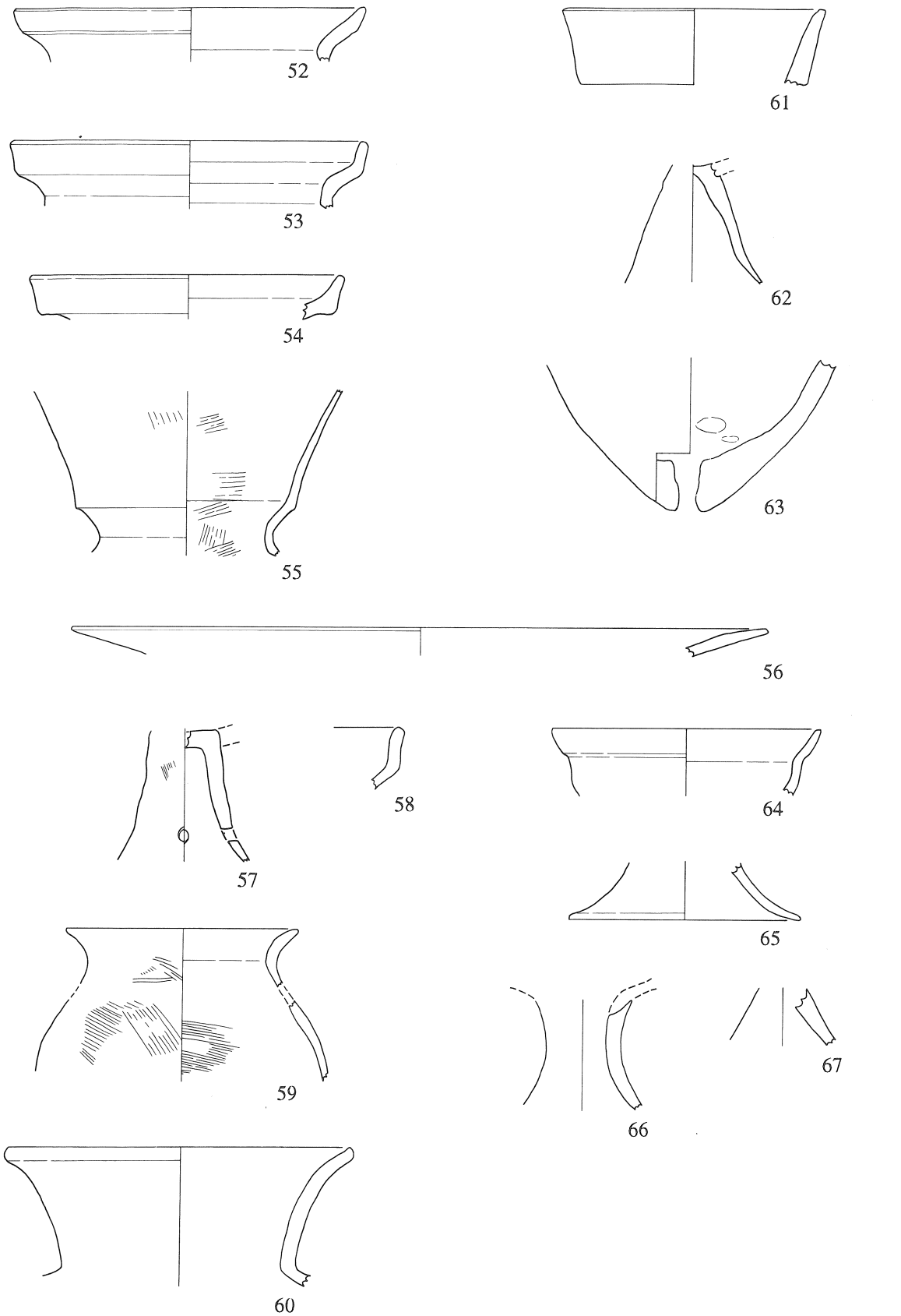

**第32図**　遺物実測図（2）（1/3）

E3トレンチ

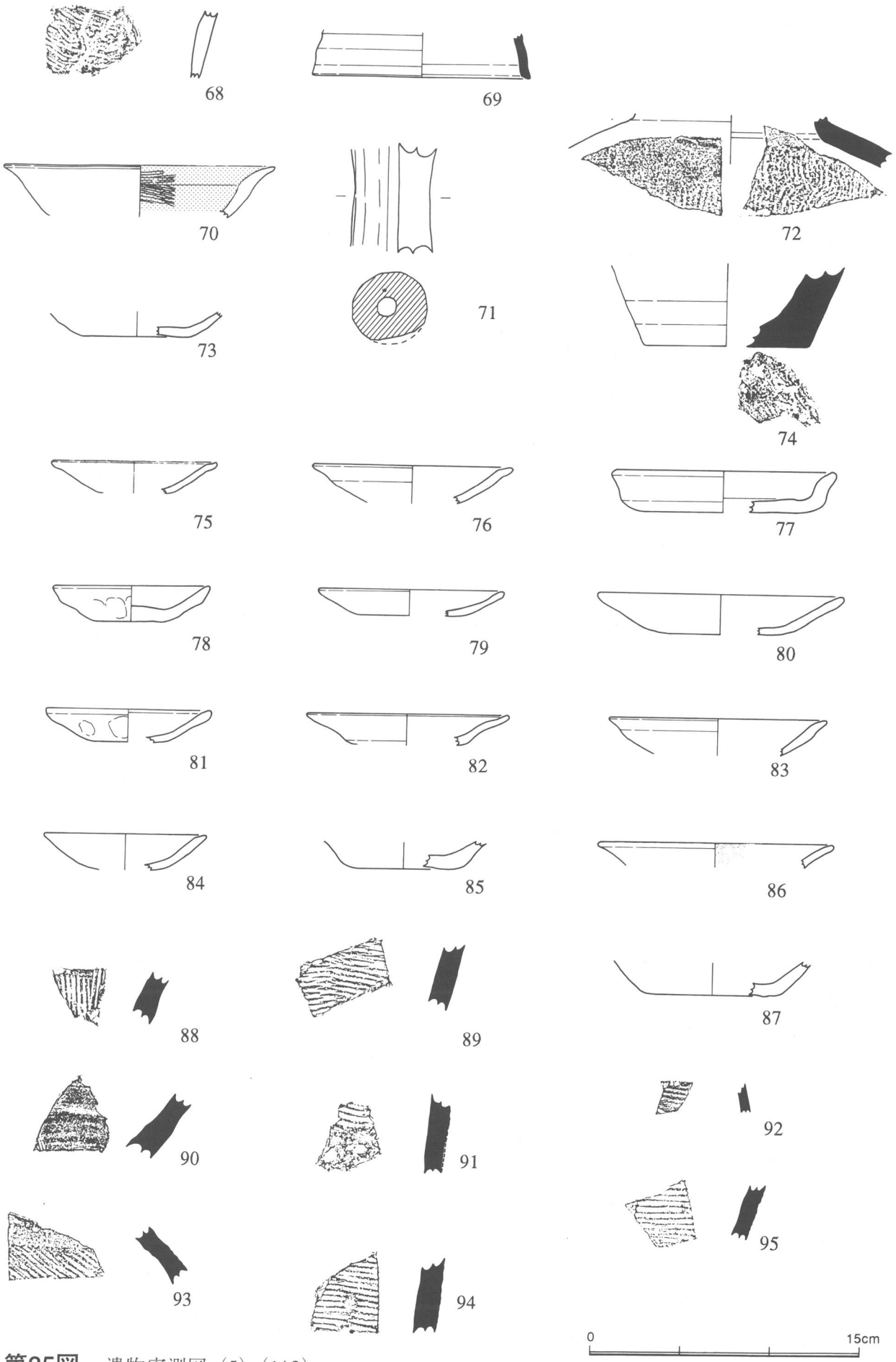



**第33図**　遺物実測図（3）（1/3、50・51は1/1）

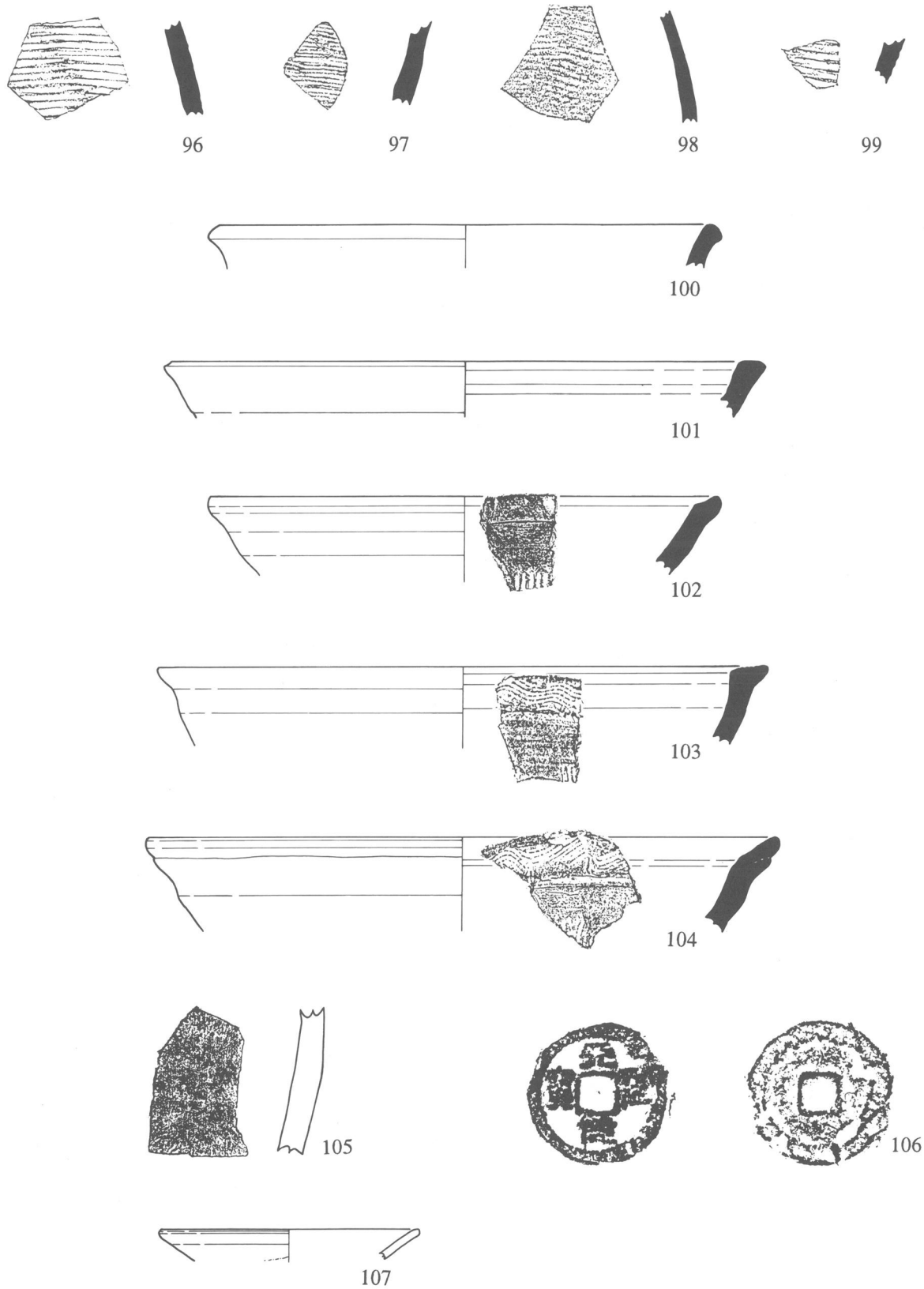
Wトレンチ

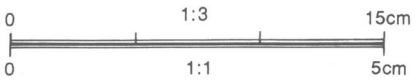



**第34図**　遺物実測図（4）（1/3）




**第35図**　遺物実測図（5）（1/3）




**第36図**　遺物実測図（6）（1/3、106は1/1）

# 遺物観察表

| 番号 | トレンチ | 土器番号 | 距離 | 角度 | 標高 | 層位 | 種類 | 器種 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 法量 | 残存率 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | N | 128 | 16.743 | 2 57 20 | 28.801 | 34 | 弥生土器 | 甕 | やや密（海綿骨針含む） | 良好 | 外面10ＹR2/1黒色、内面7.5YR6/6橙色 | 口径14cm | 8% | 法仏 | |
| 2 | N | 126 | 16.696 | 0 41 00 | 28.856 | 34 | 弥生土器 | 高杯or器台 | やや密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 2.5YR6/6橙色 | 底径24cm | 4% | 法仏 | 内面ハケメ |
| 3 | N | 31 | 4.066 | 1 00 40 | 25.018 | 21 | 弥生土器 | 甕 | 密 | 良好 | 7.5YR6/6橙色 | 口径15cm | 6% | 法仏 | |
| 4 | N | 24 | 4.398 | 12 51 40 | 25.080 | 21 | 弥生土器 | 甕 | やや密 | 良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色 | 底径6cm | | 法仏 | 内面ハケメ |
| 5 | N | 125 | 16.823 | 0 40 20 | 28.965 | 34 | 弥生土器 | 器台 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 7.5YRにぶい黄橙色 | 口径17cm | 5% | 月影Ⅱ | |
| 6 | N | 113 | 15.756 | 2 00 20 | 28.179 | 39 | 弥生土器 | 器台 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 外面10ＹR6/4にぶい黄橙色、内面10YR3/2黒褐色 | | | 月影Ⅰ | |
| 7 | N | 52 | 9.548 | 1 15 20 | 25.128 | 22 | 弥生土器 | 甕 | やや粗 | 不良 | 7.5YR8/6浅黄橙色 | 口径18cm | 8% | 月影Ⅱ | |
| 8 | N | 101 | 15.353 | 2 22 20 | 28.201 | 28 | 弥生土器 | 甕 | やや密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 外面10ＹR6/4にぶい黄橙色、内面10YR2/1黒色 | 口径18cm | 7% | 月影Ⅱ | 内面ハケメ |
| 9 | N | 26 | 4.491 | 11 57 00 | 25.042 | 21 | 弥生土器 | 甕 | 密 | 良好 | 10YR6/9にぶい黄橙色 | 口径18cm | 8% | 月影Ⅱ | 内外面ハケメ |
| 10 | N | 144 | 15.901 | 2 31 20 | 28.100 | 39 | 弥生土器 | 甕 | 密 | やや不良 | 外面7.5ＹR4/2灰褐色、内面10YR7/9にぶい黄橙色 | 底径2.8cm | | 月影Ⅱ | 内面ハケメ |
| 11 | N | 48 | 9.210 | 6 57 40 | 25.146 | 22 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | | | 月影Ⅱ | |
| 12 | N | 147 | 16.401 | 2 36 40 | 28.174 | 39 | 弥生土器 | 高杯or器台 | 密 | やや不良 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | | | 月影Ⅱ | |
| 13 | N | 57 | 5.907 | 8 06 40 | 24.705 | 25 | 弥生土器 | 壺 | 密 | やや良好 | 7.5YR7/6橙色 | | | ? | |
| 14 | S | 50 | 21.984 | 4 13 00 | 28.291 | 3 | 弥生土器 | 高杯 | やや密 | やや良好 | 10YR8/4にぶい浅黄橙色 | 口径26cm | 5% | 法仏 | 内外面若干マツメ |
| 15 | S | 94 | 14.819 | 7 02 10 | 22.042 | 30 | 弥生土器 | 器台 | 密（1mm砂含む） | やや不良 | 7.5YR6/6橙色 | | | 月影Ⅰ | |
| | | 82 | 14.211 | 7 20 00 | 23.289 | | | | | | | | | | |
| 16 | S | 49 | 20.525 | 2 27 40 | 27.648 | 3 | 弥生土器 | 甕 | 密（1mm砂含む） | 良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色 | 口径16cm | 3% | 月影Ⅱ | |
| 17 | S | 45 | 20.498 | 0 56 00 | 27.746 | 3 | 弥生土器 | 甕 | 密 | 良好 | 7.5YR6/6橙色 | | | ? | |
| 18 | SE | 93 | 10.848 | 5 45 00 | 23.086 | 8 | 弥生土器 | 甕 | 密（1～3mm砂含む） | 良好 | 外面10ＹR6/4にぶい黄橙色、内面Y3/1黒褐色 | 底径6cm | | 法仏 | 内面ハケメ |
| 19 | SE | 21 | 3.685 | 31 13 00 | 24.382 | 38 | 弥生土器 | 壺 | やや密（海綿骨針若干含む） | やや良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径15cm | 11% | 法仏 | 内面ハケメか |
| 20 | SE | 181 | 3.313 | 32 51 00 | 24.424 | 31 | 弥生土器 | 壺 | 密 | やや良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色、内面2.5Y6/1黄灰色 | 口径18cm | 30% | 法仏 | |
| 21 | SE | 92 | 6.072 | 0 00 00 | 23.322 | 9 | 弥生土器 | 甕or壺 | やや粗（海綿骨針若干含む） | 不良 | 外面7.5ＹR2/1黒色、内面7.5YR8/6浅黄橙色 | 底径6cm | 35% | 法仏 | マツメ激しい |
| 22 | SE | 199 | 9.068 | 10 05 20 | 22.068 | 41 | 弥生土器 | 器台 | 密 | 良好 | 7.5YR6/6橙色 | | | 月影Ⅰ | |
| 23 | SE | 21 | 3.685 | 31 13 00 | 24.382 | 38 | 弥生土器 | 甕 | 密（海綿骨針若干含む） | やや良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径22cm | 4% | 月影Ⅱ | |
| 24 | SE | 111 | 1.982 | 32 38 00 | 24.577 | 38 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 外面10ＹR4/1褐灰色、内面7.5YR5/6明褐色 | 口径15cm | 7% | 月影Ⅱ | |
| 25 | E | 53 | 16.514 | 65 11 20 | 24.948 | 28 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 10YRにぶい黄橙色 | 底径6cm | | 法仏 | 内面ハケメ |
| 26 | E | 65 | 15.439 | 68 58 20 | 25.239 | 9 | 弥生土器 | 甕 | 密 | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | | | 月影Ⅰ | |
| 27 | E | 15 | 16.799 | 4 40 00 | 26.088 | 37 | 弥生土器 | 高杯or器台 | 密 | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | 底径13cm | | 月影Ⅰ | 外面ヘラミガキ |
| 28 | E | 64 | 15.414 | 69 44 40 | 25.258 | 9 | 弥生土器 | 甕 | やや粗 | 不良 | 2.5Y8/3淡黄色 | | | 月影Ⅱ | |
| 29 | E | 29 | 2.233 | 4 51 00 | 24.003 | 37 | 弥生土器 | 甕 | 密 | やや良好 | 10YR7/2にぶい黄橙色 | 口径16cm | 10% | 月影Ⅱ | |
| 30 | E | 11 | 17.940 | 3 37 20 | 26.579 | 3 | 弥生土器 | 甕or手あぶり | 密 | 良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色 | 口径12cm | 5% | 月影Ⅱ | 内外面ハケメ |
| 31 | E | 82 | 16.304 | 65 50 40 | 24.861 | 21 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径11cm | 14% | 月影Ⅱ | 外面赤彩 |
| 32 | E | 98 | 14.832 | 66 45 00 | 24.988 | 23 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 底径4cm | | 月影Ⅱ | 内面ハケメ |
| 33 | E | 49 | 15.622 | 68 31 40 | 25.219 | 9 | 弥生土器 | 高杯or器台 | やや粗 | 不良 | 7.5YR6/6橙色 | | | ? | |
| 34 | NE | 33 | 5.386 | -19 26 40 | 24.883 | 9 | 弥生土器 | 甕 | やや密（1mm砂含む） | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 底径4cm | | 月影Ⅰ | |
| 35 | NE | 23 | 4.266 | 0 36 20 | 24.896 | 9 | 弥生土器 | 壺 | やや粗 | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 底径4.4cm | | 月影Ⅱ | |
| 36 | NW | 13 | 12.577 | 0 21 40 | 25.848 | 7 | 弥生土器 | 甕 | やや密（1mm砂含む） | 不良 | 5YR5/8明赤褐色 | 口径15cm | 6% | 月影Ⅰ | |
| 37 | NW | 11 | 12.215 | 5 51 00 | 25.918 | 7 | 弥生土器 | 甕 | 密（1～2mm砂含む） | やや不良 | 7.5YR8/6浅黄橙色 | 口径18cm | 8% | 月影Ⅱ | 外面ハケメ |
| 38 | E3 | 17 | 6.543 | 9 06 40 | 24.988 | 5 | 弥生土器 | 甕 | 密（1～2mm砂含む） | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 口径18cm | 10% | 月影Ⅰ | |
| 39 | E3 | 256 | 8.216 | 9 20 40 | 24.309 | 6 | 弥生土器 | 壺 | 密（1～2mm砂含む） | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | | | 月影Ⅰ | 外面ハケメ |
| 40 | E3 | 249 | 7.811 | 12 46 00 | 24.386 | 6 | 弥生土器 | 低脚杯か | 密（1～2mm砂含む） | やや不良 | 7.5YR6/3橙色 | | | 月影Ⅰ | |
| 41 | E3 | 110 | 8.543 | 9 41 00 | 24.534 | 6 | 弥生土器 | 甕 | やや密（海綿骨針含む） | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 口径14cm | 6% | 月影Ⅱ | |
| 42 | E3 | 334 | 9.126 | 3 45 00 | 24.211 | 13 | 弥生土器 | 甕 | 密 | 良好 | 5YR6/6橙色 | | | 月影Ⅱ | |
| 43 | E3 | 137 | 8.484 | 9 38 40 | 24.484 | 6 | 弥生土器 | 甕 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR7/6橙色 | | | 月影Ⅱ | |
| 44 | E3 | 202 | 8.233 | 3 09 40 | 24.375 | 6 | 弥生土器 | 高杯 | 密 | 良好 | 7.5YR6/6橙色 | | | 月影Ⅱ | 外面ヘラミガキ |

| 番号 | トレンチ | 土器番号 | 距離 | 角度 | 標高 | 層位 | 種類 | 器種 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 法量 | 残存率 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | E3 | 198 | 8.208 | 9 18 20 | 24.394 | 6 | 弥生土器 | 高坏or器台 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR6/4にぶい黄橙色 | | | ? | |
| 46 | E3 | 367 | 9.364 | 6 18 20 | 24.449 | 12 | 土師器 | 甕 | 密（0.5～3 砂含 む） | 良好 | 外面5Y7/2灰白色、内面7.5YR5/1灰色 | | | 古府クレビ | 内面ハケメ |
| 47 | E3 | 324 | 9.378 | 10 47 00 | 24.283 | 14 | 土師器 | 壺 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | 口径16cm | 10% | 古府クレビ | |
| 48 | E3 | 132 | 8.204 | 13 11 40 | 24.456 | 6 | 土師器 | 壺 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 口径15cm | 2% | 古府クレビ | |
| 49 | E3 | 316 | 8.958 | 10 58 40 | 24.280 | 14 | 土師器 | 高坏or器台 | 密 | やや良好 | 10YR7/3にぶい黄橙色 | 底径10cm | | 古府クレビ | |
| 50 | E3 | 103 | 8.490 | 4 48 00 | 24.617 | 6 | 石製品 | | | | 5GY8/1灰白色 | 長さ2.35cm | | | |
| 51 | 表採 | | | | | | 石製品 | 管玉 | ヘキ玉 | | 5G3/1暗緑灰色 | 幅1.20cm 厚さ0.76cm 長さ3.2cm 径1.3cm | | | |
| 52 | W | 58 | 16.021 | −0 22 20 | 24.369 | 16 | 弥生土器 | 甕 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 7.5YR6/6橙色 | 口径18cm | 11% | 法仏 | |
| 53 | W | 85 | 14.720 | −6 21 00 | 24.418 | 10 | 弥生土器 | 甕 | やや密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR5/2灰褐色 | 口径18cm | 4% | 月影I | |
| 54 | W | 60 | 15.934 | −2 54 40 | 24.382 | 16 | 弥生土器 | 甕 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径16cm | 10% | 月影I | |
| 55 | W | 92 | 17.453 | −0 19 20 | 24.347 | 13 | 弥生土器 | 壺 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 10YR6/1褐灰色 | | | 月影I | |
| 56 | W | 67 | 18.491 | −5 01 40 | 24.442 | 13 | 弥生土器 | 高坏 | 密 | 良好 | 外面7.5YR8/4浅黄橙色、内面7.5YR8/2灰白色 | 口径36cm | 7% | 月影I | 外面ミガキか |
| 57 | W | 37 | 18.576 | −6 10 00 | 24.500 | 13 | 弥生土器 | 高坏 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 7.5YR7/6橙色 | | | 月影I | 外面ハケメ |
| 58 | W | 86 | 14.745 | −6 46 00 | 24.417 | 10 | 弥生土器 | 甕 | やや密（海綿骨針含む） | やや良好 | 7.5YR4/4褐色 | | | 月影II | |
| 59 | W | 50 | 11.289 | −2 36 40 | 24.643 | 17 | 弥生土器 | 甕 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 外面10YR7/3にぶい黄橙色、内面10YR2/1黒色 | 口径12cm | | 月影II | 内外面ハケメ |
| 60 | W | 119 | 25.503 | −1 39 00 | 24.402 | 6 | 弥生土器 | 壺 | 密 | 良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径18cm | | 月影II | |
| 61 | W | 38 | 19.367 | −5 02 00 | 24.573 | 13 | 弥生土器 | 壺 | 密（海綿骨針わずか） | 良好 | 10R5/6赤色 | 口径13cm | 4% | 月影II | ややマツメ |
| 62 | W | 70 | 8.524 | −0 49 20 | 24.888 | 18 | 弥生土器 | 高坏 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR6/8橙色 | | | 月影II | マツメ |
| 63 | W | 53 | 11.803 | −4 16 20 | 24.553 | 19 | 弥生土器 | 有孔鉢 | 密 | 良好 | 7.5YR6/4にぶい黄橙色 | | | 月影II | 外面黒斑 |
| 64 | W | 111 | 24.066 | −1 15 20 | 24.361 | 6 | 弥生土器 | 鉢 | 密 | やや良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | 口径14cm | 8% | 月影II | |
| 65 | W | 116 | 24.558 | −2 31 00 | 24.464 | 6 | 土師器 | 高坏or器台 | 密 | 良好 | 7.5YR6/8橙色 | 口径12cm | 8% | 古府クレビ | |
| 66 | W | 52 | 11.835 | −2 45 00 | 24.541 | 19 | 弥生土器 | 器台 | 密 | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | | | ? | |
| 67 | W | 62 | 16.707 | −0 40 00 | 24.393 | 11 | 弥生土器 | 高坏or器台 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 7.5YR7/1明褐灰色 | | | ? | |
| 68 | SE | 34 | 2.570 | 41 29 00 | 24.642 | 38 | 縄文土器 | | やや密（2mm砂含む） | 良好 | 7.5YR4/6赤褐色 | | | 晩期か | |
| 69 | NE | 7 | 7.312 | 6 46 40 | 25.910 | 1 | 須恵器 | 杯蓋 | 密 | 良好 | 10BG4/1暗青灰色 | 口径12cm | 3% | 6世紀前葉 | |
| 70 | S | 6 | 7.486 | 10 55 40 | 22.958 | 15 | 土師器 | 椀（黒色） | 密 | 良好 | 外面7.5YR7/6橙色、内面5YR1.7/1黒色 | 口径12cm | 8% | 6世紀前葉 | 内面ヘラミガキ |
| 71 | N | 3 | 4.365 | 24 46 40 | 26.412 | 1 | 土師器 | 高杯 | 密 | やや良好 | 10YR8/4浅黄橙色 | | | 奈良か | 外面ケズリ |
| 72 | S | 5 | 5.499 | 10 21 20 | 22.880 | 15 | 須恵器 | 横瓶 | 密 | 良好 | N5/　灰色 | | | 奈良 | |
| 73 | S | 28 | 6.017 | 5 22 40 | 22.946 | 15 | 土師器 | 皿 | 密 | やや良好 | 10YR6/3橙色 | 底径6cm | | 平安か | マツメ |
| 74 | NW | 15 | 15.982 | 3 21 00 | 26.876 | 1 | 珠洲 | 壺 | やや粗 | 良好 | 10GY5/1緑灰色 | 底径9cm | | 中世 | |
| 75 | E2 | 10 | 3.586 | −22 23 20 | 24.234 | 33 | 土師器 | 小皿 | 密 | 良好 | 5YR6/6橙色 | 口径9cm | 25% | 中世（15世紀後半） | 灯明皿 |
| 76 | N | 9 | 4.015 | 2 16 20 | 26.042 | 2 | 土師器 | 小皿 | 密 | 良好 | 10YR6/3にぶい黄橙色 | 口径11cm | 17% | 中世（15世紀後半） | |
| 77 | N | 11 | 8.006 | 5 23 00 | 25.940 | 2 | 土師器 | 小皿 | 密 | やや不良 | 10YR7/6明黄褐色 | 口径12cm 高さ2.3cm | 21% | 中世（15世紀後半～16世紀前半） | |
| 78 | E2 | 13 | 1.223 | −15 41 00 | 24.116 | 33 | 土師器 | 小皿 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色 | 口径8.5cm 高さ2.0cm 底径3.8cm | 31% | 中世 | |

| 番号 | トレンチ | 土器番号 | 距離 | 角度 | 標高 | 層位 | 種類 | 器種 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 法量 | 残存率 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 79 | E2 | 14 | 1.959 | −16 30 00 | 24.153 | 33 | 土師器 | 小皿 | 密 | やや不良 | 10YR6/4にぶい黄橙色 | 口径10cm 高さ1.5cm | 23% | 中世 | |
| 80 | N | 2 | 3.909 | 2 14 40 | 26.454 | 1 | 土師器 | 小皿 | やや密（海綿骨針若干含む） | やや良好 | 7.5YR6/4にぶい黄橙色 | 口径13.4cm 高さ2.2cm 底径7cm | 1% | 中世（15世紀後半） | |
| 81 | N | 5 | 7.586 | 12 48 00 | 26.297 | 1 | 土師器 | 小皿 | やや粗 | 良好 | 2.5YR6/6橙色 | 口径9cm 高さ1.8cm | 27% | 中世（15世紀後半～16世紀前半） | |
| 82 | N | 7 | 4.449 | 2 43 40 | 26.229 | 2 | 土師器 | 小皿 | 密 | やや良好 | 7.5YR7/6橙色 | 口径11cm | 9% | 中世 | |
| 83 | N | 6 | 4.113 | 2 25 00 | 26.259 | 1 | 土師器 | 小皿 | 密 | やや不良 | 5YR6/6橙色 | 口径12cm | 8% | 中世（15世紀後半） | |
| 84 | E | 26 | 2.334 | 16 17 20 | 27.303 | 1 | 土師器 | 小皿 | やや密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 7.5YR6/4にぶい橙色 | 口径9cm | 14% | 中世 | |
| 85 | SW | 5 | 3.944 | 23 49 20 | 23.574 | 2 | 土師器 | 小皿 | 密 | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色 | 底径5cm | | 中世 | |
| 86 | E2 | 9 | 2.714 | −42 25 20 | 24.303 | 33 | 土師器 | 小皿 | 密 | 良好 | 5YR5/4にぶい赤褐色、内面すす付着 | 口径13cm | 8% | 中世 | |
| 87 | N | | | | | | 土師器 | 小皿 | やや密（海綿骨針含む） | 良好 | 10YR7/3にぶい黄橙色 | 底径7cm | | 中世 | |
| 88 | W | 31 | 27.834 | −3 01 20 | 25.124 | 2 | 珠洲 | すり鉢 | 密 | 良好 | N3/ 暗灰色 | | | 中世 | |
| 89 | NE | 5 | 5.296 | 8 41 40 | 25.725 | 3 | 珠洲 | 甕 | 密 | 良好 | 10BG5/1青灰色 | | | 中世 | |
| 90 | E2 | 6 | 4.778 | −19 54 20 | 24.410 | 33 | 珠洲 | 壺orすり鉢 | 密 | 良好 | N5/ 灰色 | | | 中世 | |
| 91 | W | 表採 | | | | | 珠洲 | 甕 | 密 | 良好 | 10BG4/1暗青灰色 | | | 中世 | |
| 92 | SW | 1 | 5.604 | 10 49 40 | 23.702 | 1 | 珠洲 | 壺 | 密 | 良好 | 5GY6/1ｵﾘｰﾌﾞ灰色 | | | 中世 | |
| 93 | W | 29 | 21.988 | −1 04 40 | 24.855 | 3 | 珠洲 | 壺 | 密（海綿骨針含む） | 良好 | 10Y5/1灰色 | | | 中世 | |
| 94 | NE | 20 | 7.392 | −0 55 00 | 25.518 | 3 | 珠洲 | 甕 | 密 | 良好 | 2.5GY6/1ｵﾘｰﾌﾞ灰色 | | | 中世 | |
| 95 | N | 12 | 5.527 | 10 51 00 | 25.897 | 2 | 珠洲 | 壺 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | N4/ 灰色 | | | 中世 | |
| 96 | N | 10 | 10.617 | 3 55 20 | 25.992 | 2 | 珠洲 | 壺 | 密 | 良好 | 2.5GY4/1暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色 | | | 中世 | |
| 97 | N | 4 | 2.826 | 26 40 40 | 26.313 | 1 | 珠洲 | 壺 | やや密 | 良好 | 5BG5/1青灰色 | | | 中世 | |
| 98 | W | 35 | 17.309 | −2 32 00 | 24.580 | 3 | 珠洲 | 壺 | 密 | 良好 | 10Y5/1灰色 | | | 中世 | |
| 99 | E2 | 5 | 4.229 | −5 18 00 | 24.342 | 33 | 珠洲 | 壺 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | 2.5GY5/1ｵﾘｰﾌﾞ灰色 | | | 中世 | |
| 100 | N | 8 | 10.169 | 5 27 40 | 26.147 | 2 | 珠洲 | 壺 | 密 | 良好 | N4/ 灰色 | 口径25cm | 6% | 中世 | |
| 101 | E2 | 8 | 5.590 | −15 28 40 | 24.454 | 33 | 珠洲 | すり鉢 | 密 | 良好 | N6/ 灰色 | 口径30cm | 6% | 中世（Ⅳ～Ⅴ期） | |
| 102 | NE | 4 | 4.273 | 16 10 20 | 25.721 | 3 | 珠洲 | すり鉢 | やや密（海綿骨針含む） | 良好 | 10GY4/1暗緑灰色 | 口径26cm | 4% | 中世（Ⅴ期） | |
| 103 | W | 8 | 27.768 | −0 59 00 | 25.310 | 1 | 珠洲 | すり鉢 | 密（海綿骨針若干含む） | 良好 | N2/ 黒色 | 口径31cm | 4% | 中世（Ⅴ期） | |
| 104 | NE | 6 | 6.603 | 16 28 20 | 25.758 | 3 | 珠洲 | すり鉢 | やや粗（海綿骨針若干含む） | 良好 | 10Y4/1灰色 | 口径32cm | 5% | 中世（Ⅵ～Ⅶ期） | |
| 105 | NW | 6 | 16.113 | 1 38 00 | 27.093 | 1 | 越前 | 甕 | 密 | 良好 | 外面5YR3/4暗赤褐色、内面7.5YR5/3にぶい褐色 | | | 中世 | |
| 106 | SW | 2 | 9.631 | 17 59 00 | 23.602 | 1 | 銅銭 | 「天聖元寳」 | | | | | | 中世 | |
| 107 | NW | 7 | 15.952 | 1 54 20 | 26.931 | 1 | 越中瀬戸 | 皿 | 密 | 良好 | 10YR7/4にぶい黄橙色,釉5YR3/4暗赤褐色 | 口径13cm | 7% | 近世 | |

# 第４章　まとめ

## １　古墳の形状と規模

柳田布尾山古墳は前方後方墳であり、測量調査、及び第１次・第２次発掘調査の結果得た主要な数値は以下のとおりである。

全長１０７．５ｍ　　後方部長５７ｍ
後方部幅５３ｍ　　くびれ部幅３０ｍ
前方部長５０．５ｍ　　前方部幅４９ｍ
後方部高さ１０ｍ　　前方部高さ６ｍ

ただし、後方部の幅や長さについては未確定の部分があるため、これらの数値は周濠の形状とともに今後の調査によって修正していきたい。

古墳は前方部長が後方部よりやや短く、前方部が撥型に開くタイプのものである。前方部はくびれ部に向かってなだらかに高さを落とし、左右ほぼ均等な形をとる。後方部に大規模な盗掘の痕があること、周濠がおそらく中世に埋められていること、後方部両裾近くが老人ホーム建設と土砂採取により失われていることを除いて、ほぼ完全な形で遺存しているといえる。このことは、古墳築造時の企画設計を復原する上で、有効な情報を提供してくれるといえよう。

## ２　古墳の立地について

古墳が築造された丘陵は、二上山丘陵から北に向かってのびる支丘からさらに東に向かって派出する小支丘の中央部分にあたる。

この小支丘は土砂採取により、かなり様相が変化しているため、それ以前の地図も使いながら、古墳の立地を検討したい。

小支丘は北側に「諏訪谷内」と呼ばれる深さ450ｍほどの谷が入り込み、谷のほぼ中央にため池が造られている。第２章で示したように、このため池は近世後期の絵図面にみえ、池東側の谷の両裾には家が数軒建っていた。一方、南側は東南に開け、ちょうど古墳の西端あたりから深さ200ｍほどの浅い谷が入り込む。

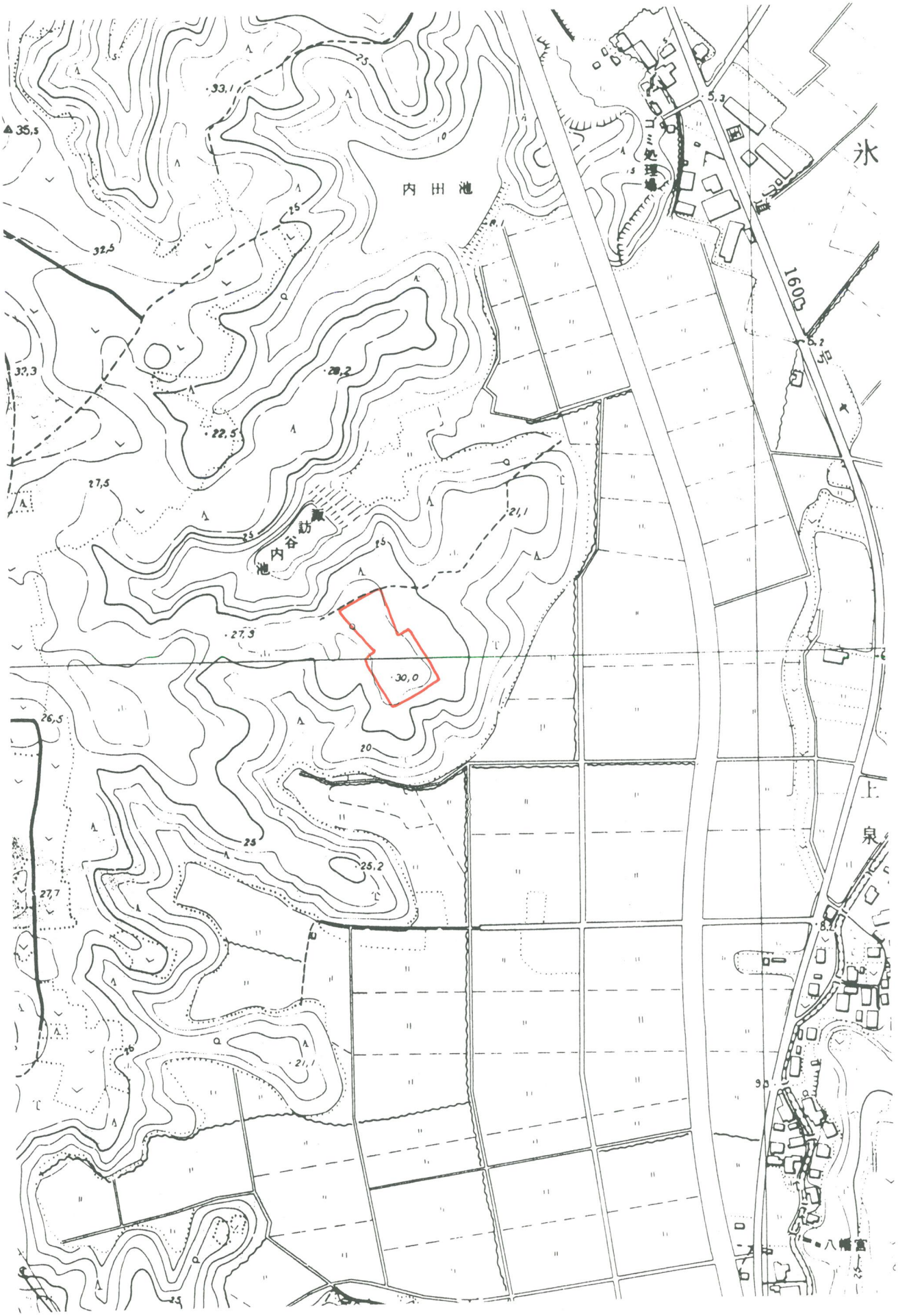
丘陵上部は標高26ｍ前後のほぼ平坦な地形であり、西側では幅が約50ｍであるのに対し、古墳の築かれた地点では、幅が約150ｍに広がっている。丘陵はさらに幅を50ｍにもどして先端に至っている。

従って、古墳の築造されたスペースは、南東・北西ライン長150ｍ、南西・北東ライン長100ｍの平坦地であり、さらにそのスペースの中の南東よりに築かれたといえる。

古墳発見以後、この古墳がその側面を下の平野や富山湾に向けていることを強調してきたが、旧地形を復元した場合、それほど眺望は良くない。すなわち北側は、ほぼ同レベルの丘陵が広がっており、谷をはさんだ東側にあたる上泉地区には別の丘陵が南から延びてきている。また古墳自身、小支丘の中央に位置するため、北東部分がふさがれる形になる。従って古墳から海・平野方向をみる場合、眺望がきくのは、わずかに東から東北東方向、現在の西條中学校周辺に向く方角のみに限られるのである。

このことから、上に示した古墳築造スペースの中で、古墳が南東寄りに築かれた理由のひとつは、海・平野の方に古墳を見え易くするためだったと考えたい。

しかしながら、海側に眺望がきくことだけを望めば、古墳近辺では上泉地区や園地区の丘陵先端などの方がよほど開けている。古墳がこの位置・この向きに築かれた理由として、他の要因も考えられないであろうか。




**第37図**　柳田布尾山古墳周辺の旧地形

Ｎトレンチ・Ｓトレンチの調査から、古墳築造前の地形は標高27～28ｍのほぼ水平な地形であり、築造にあたっては前方後方形に地山を削り出し、その上に土を盛り上げて墳丘を造りだしたことが判明した。西井龍儀氏の試算によれば、古墳体積20,400ｍ³に対して盛土量は8,900ｍ³（43.6％）であるという。

さて、古墳築造スペースをみた場合、ほぼ水平な地形であるため、古墳を180度逆に築いても、工事量はさほど変わらないはずである。その中で前方部を北西側に、後方部を南東側においた理由として、二上山を意識したことを考えたい。発掘調査により確認した陸橋をわたり、前方部稜線をのぼったところで後方部に目を向けると、そのほぼ真後ろに二上山がみえるからである。

二上山は高岡市と氷見市の境にそびえる山であり、神の山として仰いだ大伴家持の歌が万葉集に収められている。その名が示すように東峰（274ｍ）と西峰（259ｍ）の二つのピークから成る山であるが、一般には大師ケ岳（254ｍ）・鉢伏山（211ｍ）・小竹山（254ｍ）といった周囲の峰々を含めた山塊を指す場合が多い。これまでに富山考古学会などの調査により、広義の二上山の周辺には、鳥越Ｃ１号、ダイラ２号、国分山Ａ１号、国分山Ａ２号、東海老坂ムカイ山１号、東上野Ｉ１号、桜谷１号、桜谷２号といった出現期古墳が立地することが明らかになっている〔富山考古学会1999〕。

柳田布尾山古墳のセンターラインは、真北から33°西に振っており、小竹山東斜面に向かっている。この方向は広義の二上山のほぼ中心を指し示している。また、調査によって少なくとも後方部後面には周濠がないことが明らかになったが、このことも二上山と古墳との精神的なつながりを物語るようである。

以上、柳田布尾山古墳は、富山湾と二上山の両者を臨むのに適した場所を選んで築かれたことを示した。このことは古墳被葬者の性格を考える上で重要な意味をもつものと考えたい。

## 3　古墳築造時期

出土した遺物を検討した結果、弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅をもつことが判明した。

このうち弥生後期から終末期の、法仏式・月影Ｉ・Ⅱ式の資料は、古墳とは直接関係しない資料であろう。これらの資料はいずれも破片資料であり、古墳盛土と周溝内への流土中に混在して出土した。古墳築造以前の資料が、古墳築造の時に盛土内に混入したものと考える。なお、これらの資料は、赤彩など装飾性の高い資料がほとんどないこと、甕が多く特殊な器形の資料がないことなどから、古墳以前の当該期、この地に集落が存在していたと推定したい。

古墳近くの砂丘上には法仏式期の柳田遺跡〔富山県立氷見高校歴史クラブ1958・1964〕があるが、集落は法仏式期から月影Ｉ・Ⅱ式期にかけて古墳のある丘陵上に移動したのであろうか。

また、２号墳の時期は確定していないが、古墳との間の周濠の存在からこれに先行する可能性がある。とすれば、２号墳は月影Ⅱ式期に築かれた墳丘墓と推測できよう。

古墳時代前期古府クルビ式とした資料はわずかに５点である。うち４点はＥ３トレンチの周濠の流土から、残りの１点はＷトレンチの周濠の流土からの出土である。前期の資料は今のところこれらしかなく、古墳の築造時期は古府クルビ式期の可能性が高い。特にＥ３トレンチの位置は、陸橋のすぐ横であり、その地点に集中することは注意を要する。

しかしながらこの５点の土器破片の器種は甕、壷、高杯又は器台であり、赤彩などの装飾は施されていない。また、出土の状況も他の弥生土器と区別しにくい。従って、古墳の時期を古府クルビ式とするのはあくまでも現段階における推定であり、時期の確定は今後新たな資料の出土をまって、改めて行うのが妥当であろう。

有
明
海
清水市街新
地蔵町
清水
清水
清水

# おわりに

柳田布尾山古墳の２カ年にわたる調査の成果をふまえ、それを取り巻く時の流れと人の動きを、若干の推測を交えてまとめておこう。

弥生時代後期の法仏式期、富山湾と十二町潟に挟まれた砂丘上に集落を営んだ集団は、徐々に布尾山に移り、弥生時代終末期の月影Ⅰ・Ⅱ式期には砂丘から丘陵上に移動した。そしてこの集団は弥生時代の終わりには墳丘墓を築いたとみられ、階層分化が進んでいたようである。白江式期には集落と墓地は何処かへ移転し、おそらく古府クルビ式期に柳田布尾山古墳が築かれた。

柳田布尾山古墳は富山湾と二上山を意識して、場所・向きが選定された。富山湾を臨んだことは、海の幸に加えて海上交易、すなわち被葬者が海を通して広い地域と交流していたことを示していよう。二上山を仰いだことは、すでにこの時期に二上山に対して宗教的な関心が寄せられていたためであろうか、それとも小首長の墓がその周りに営まれていたためであろうか、それとも山の向こうの高岡・射水地域を意識したためであろうか。また、当時は現在よりもやや海退していたとされ、古墳直下に広がる平野は、農地に十分適した環境であっただろう。

このように立地からだけでも、柳田布尾山古墳は、海・山・平野といった複数の要素を取り込んでいることがうかがえる。裏返せば、そうした多くの要素をまとめることができたからこそ、これだけ大きな古墳を築くことができたといえよう。

古墳の大きさ・立地から、被葬者は氷見地域を直接の地盤とし、のちの越中・能登にあたる地域に大きな影響を持つ人物であったのではないか。もちろんこれだけの古墳を築くためには、畿内政権と深い関わりを持たねば成らず、その一方で前方後方墳という形は、被葬者が在地出身であったことを示していよう。

高橋浩二氏は、能登・越中といった布留系甕を受容しない地域に、かえって畿内と強く結びついた墳形や副葬品をもつ大型の古墳があることを明らかにし、弥生時代以来の王の権威が頂点に達していたこの地域を取り込むことが、畿内の古墳時代体制の確立に必要であったとした〔高橋1995a〕。

柳田布尾山古墳の存在は、こうした社会状況を如実に物語るものといえ、能登半島付け根東側という氷見の地理的条件をみた場合、畿内政権の日本海側北部への版図拡大の中継点として取り込むべき、重要な場所であったと推定できる。

ただ、西井龍儀氏の新たな踏査により、氷見地域では古墳の発見が相次いでいる。また、該期の集落の解明もほとんど進んでいない。残された課題は多いが、これらの解明が進めば、国家形成という日本列島史のなかでも重要な時期に、氷見地域が果たした役割が、より一層明確になることであろう。

布尾山にはその後古墳が築かれることがなく、多少人の出入りはあるものの、柳田布尾山古墳は次第に人々の記憶から薄れていく。８世紀中頃の十二町潟に船を浮かべ遊んだ大伴家持は、目前の山中に、故郷平城京周辺に点在するような大きな古墳が眠っているとは、夢にも思わなかったであろう。

古墳の周辺に再び変化が訪れるのは中世、特に室町時代であり、多少埋没していたものの、古墳の周囲に残っていた周濠が埋め立てられたのはこの頃のことと考える。能登穴水の「長家文書」によれば、天正６年（1578）に氷見柳田で神保氏張・長連龍と堀江弥八郎が合戦したことが記されており、あるいはこうした戦の場になったのであろうか。

そして遅くとも近世後期までには、諏訪谷内のため池下に小さな集落が営まれ、その背後の布尾山に諏訪社が祀られる。また、いずれかの時点において、古墳には大きな盗掘坑が開けられた。集落と神社は明治初め頃

には柳田本村に移転し、古墳は榊の生い茂る山となった。

昭和の終わりになって、国道バイパスに近いことから布尾山周辺に開発の波が押し寄せ、古墳すぐ東側に老人ホームが建設され、南側には市道が通された。平成に入ってからは、宅地造成に伴う土砂採取が近くに及んだ。

こうして平成10年６月に、西井龍儀氏が布尾山に立ち入り〔西井他2000〕、古墳は再び私たちの前に登場したのである。

来年度は引き続き、周濠の全形の確認、古墳のさらに詳しい形態、埋葬施設の残存状況などの調査を実施する予定である。また、古墳の使用尺度の検討や、築造課程の復原については、あらたなデータを元に、詳しく検討したい。

柳田布尾山古墳は、その周囲の地形が大きく変化しているが、古墳西側については過去からの環境が残されている。試掘調査では遺構・遺物ともに確認されなかったが、第４章で検討したように、古墳築造時において当時の人々がその築造場所・向きをいかに定めたかを知る上で、重要な意味をもつ空間であることが明らかになった。古墳を保存する場合、この西側の空間も含めるべきであり、その上で将来の活用を図る必要があろう。

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1986　『漆町遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター　1995　『谷内・杉谷遺跡群』
石川考古学研究会　1986　『シンポジウム「月影式」土器について　報告編・資料編』
岡本淳一郎・三島道子・町田賢一・上田尚美　1999　「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』第２号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学Ⅱ（石川考古学研究会々誌第32号）』　石川考古学研究会
金沢市教育委員会　1996　『西念・南新保遺跡Ⅳ』　金沢市文化財紀要119
上市町教育委員会　1982　『北陸自動車道遺跡調査報告　上市町土器・石器編』
上市町教育委員会　1984　『北陸自動車道遺跡調査報告　上市町木製品・総括編』
上市町教育委員会　1998　『富山県上市町砂林開北遺跡発掘調査概報』
岸本雅敏　1992　「越中」『前方後円墳集成』中部編　山川出版社
岸本雅敏　1995　「越中」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
高橋浩二　1995ａ　「北陸における古墳出現期の社会構造」『考古学雑誌』第80巻第３号
高橋浩二　1995ｂ　「越中における古墳出現期の様相」『大境』第17号　富山考古学会
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1999　『富山県指定史跡勅使塚古墳発掘調査レポート』
富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1958　『柳田遺跡調査報告書』
富山県立氷見高等学校歴史クラブ　1964　『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』
富山考古学会　1999　『富山平野の出現期古墳』
滑川市　1979　『滑川市史　考古資料編』
西井龍儀他　2000　「特集　氷見市柳田布尾山古墳をめぐって」『大境』第20・21合併号　富山考古学会
婦中町教育委員会　1998　『富山県婦中町南部Ⅰ遺跡発掘調査報告』
八尾町教育委員会　1997　『翠尾Ⅰ遺跡　発掘調査報告書１』八尾町埋蔵文化財調査報告第11集
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1999　『象鼻山１号古墳　第３次発掘調査の成果』養老町埋蔵文化財調査報告第３冊

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | やないだぬのおやまこふん |
| 書名 | 柳田布尾山古墳 |
| 副書名 | 第1次·第2次発掘調査の成果 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 氷見市埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第29冊 |
| 編著者名 | 大野究、鈴木瑞麿、小谷超 |
| 編集機関 | 氷見市教育委員会 |
| 所在地 | 〒935−0016　富山県氷見市本町4番9番　TEL 0766(74)8215 |
| 発行年月日 | 2000年3月31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯　東緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 柳田<br>布尾山<br>古墳 | 富山県<br>氷見市<br>柳田 | 16205295 | 36°　136°<br>49′　59′<br>15″　40″ | 19981215<br>↓<br>19990330<br>19990528<br>↓<br>19990928 | 455m² | 範囲確認 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 柳田布尾山古墳 | 古墳 | 弥生<br>古墳 | 墳丘墓か<br>前方後方墳<br>〔周濠·陸橋〕 | 弥生土器<br>土師器 | 日本海側最大の<br>前方後方墳 |

# 付　章

## とやま　ときめき　歴史フォーラム
## 柳田布尾山古墳　そのロマンと不思議

平成10年に発見された日本海側最大の前方後方墳、柳田布尾山古墳。およそ1,700年前に築造されたこの古墳は、海上交易などの経済力を背景に強大な勢力を誇った豪族の墓と推定されます。昨年11月におこなわれたフォーラムでは、古墳時代のくらしやロマンについてなど、国内第一線の研究者たちが、柳田布尾山古墳のなぞにせまりました。

◇フォーラム開催日時：平成11年11月21日（日）午後1：00～4：30　場所：氷見市民会館
主催：富山県教育委員会・氷見市・氷見市教育委員会・北日本新聞社　後援：NHK富山放送局

### 第1部　「トーク」
### 古墳時代のくらしとロマン　いつ解き明かされる、越の王者の存在

大桃美代子さん（タレント）
和田晴吾氏（立命館大学教授）
司会・斉藤寿朗氏（NHK富山放送局アナウンサー）

### 第2部　「パネルディスカッション」
### 柳田布尾山古墳の意味するもの　国内古墳研究者からの「視点」

コーディネーター

**宇野隆夫氏**
（国際日本文化研究センター教授）

パネリスト

**和田晴吾氏**
（立命館大学教授）

**吉村公男氏**
（奈良県河合町教育委員会・国指定史跡ナガレ山古墳発掘調査担当）

**中屋克彦氏**
（石川県教育委員会文化財課・国指定史跡雨の宮古墳発掘調査担当）

**大野　究**
（氷見市教育委員会・柳田布尾山古墳発掘調査担当）

「第1部　古墳時代のくらしとロマン」トーク

満員のフォーラム会場

## ≪とやまときめき歴史フォーラム柳田布尾山古墳・そのロマンと不思議
## 第二部 柳田布尾山古墳の意味するもの≫

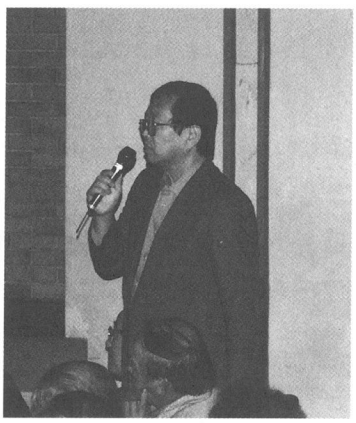
**司会**　（斉藤寿朗アナウンサー）ただいまより第2部のパネルディスカッションを開始いたします。「柳田布尾山古墳の意味するもの、国内古墳研究者からの視点」と題しまして、第1部でのお話も含めまして柳田布尾山古墳についての理解をより深めていただきたいと思います。

5人の皆様をご紹介いたします。まず、パネルディスカッションのコーディネーター、国際日本文化研究センター教授の宇野隆夫さんです。続いてパネリストの皆さんです。まず第1部でも沢山話をいただきました、立命館大学教授の和田晴吾さんです。お隣、吉村公男さんです。吉村さんは奈良県河合町の教育委員会で国指定史跡、ナガレ山古墳の発掘調査にたずさわられました。そのお隣、中屋克彦さんです。中屋さんは石川県教育委員会文化財課にお勤めで、国指定史跡、雨の宮古墳群の発掘調査にたずさわられました。そのお隣、大野究さんです。氷見市教育委員会生涯学習課で柳田布尾山古墳の発掘調査にたずさわってらっしゃいます。それでは皆さんよろしくお願い致します。

**宇野**　皆さん、こんにちは。今日は本当に大勢集まっていただきまして、ありがとうございます。第1部では興味深い話、古墳時代の社会の色々なことについて大変分かりやすく勉強させていただきました。第2部でも柳田布尾山古墳の性格を、できるかぎり浮かび上がらせていきたいと思います。

あの巨大な柳田布尾山古墳も1日にしてでき上がったわけではありません。でき上がるにはプロセスというものがあります。このシンポジウムも本当に柳田布尾山古墳クラス規模のシンポジウムと思います。それはこの古墳の発見以来、富山考古学会、地元の氷見市教育委員会、富山県、また富山大学、それから何よりも多くの市民、県民の方々の支援を頂いたプロセスで今日に至ったわけであります。

まず最初にこのプロセスにおいて柱となる仕事をしていただきました、富山考古学会の西井龍儀さんからこの古墳の発見、それから今日に至るまでいかに情報を集め、準備を進めてきたかということについてご紹介していただきたいと思います。よろしくお願いします。



**西井**　西井でございます。柳田布尾山古墳の発見につきましては、今まで報道されておりますように、氷見市の特別養護老人ホーム「すわ苑」の辺りはすぐ近くまで造成工事で赤土が見えておりました。私どもは今、氷見市の市史編纂にとりかかっておりますが、実は最初に入りましたのは赤土の中に旧石器が入っていないかどうか、氷見市ではまだ旧石器時代の遺跡が未発見であります。そういったことに関心を持って近づいたのが発端でございます。

それで山に上がりましたら、台地は割と平坦な所でありますが、そこの上に小山みたいな所がある。最初は、現在2号墳としております古墳との間

が大きな堀切のように見えましたので、中世の城館、城郭の一部じゃないか、と始めは見ておったわけでありますが、実際上がってみますと巨大な前方後方墳であることが分かりました。そこで、富山考古学会で墳丘の概略測量を平板でとり全長107m余りというのが分かりました。それ以来いろんな報道をされて、日本海側の前方後方墳としては一番大きいということが分かりました。

富山考古学会でも昨年の発表以来、どうしてああいった大きい前方後方墳が造られたのか、その周辺の前方後方墳だけじゃなくて富山平野における出現期の古墳について色々と今までの分かったもの、それからまた新たに調査で分かったものを混ぜ合わせまして、先週富山市で、今年がちょうど富山考古学会が50周年の記念の年でもありましたので、記念シンポジウムとしてそういった成果を発表したところでございます。

今日は全国からそれぞれ著名な古墳の調査をしていらっしゃる方々をお招きして、布尾山古墳について幅を広げていただけるということで、大変喜んでおります。どうかよろしくお願いします。

**宇野**　ありがとうございました。今ご紹介がありましたように、富山県の古墳文化の中で柳田布尾山古墳を考えようということで、ずっと研究が進んできております。本日は和田さんに加えて、柳田布尾山古墳の調査にあたられました大野さん、それから能登の古墳文化に詳しい中屋さん、大和の古墳文化の先端的な仕事をなさっておられます吉村さんに集まっていただきまして、もう一歩踏み込んで考えてまいりたいと思います。

今日議論したいテーマは3つを予定致しております。1つはあの巨大な古墳、今造れと言われたらなかなか困ると思うのですけれど、どのようにしてあの古墳を造り上げているのか。2番目は、もちろんあそこへここの地域を治めた方を葬っているわけでありますが、あれだけ立派な場を造ったわけですから、そこでどのようなお祭りがなされたのかのイメージを作りたいということ。それから3番目は、あれだけ立派な古墳ですので、これから色々な面で活用していきたいということです。多分、調査にかかった経費の何倍も何十倍も活用していく可能性のある古墳だろうと思います。それを今後どのように生かしていくかという上で、既にそういう経験をお持ちの中屋さん、吉村さんの体験をお話し願いたいと考えております。時間が限られておりますので、これだけ盛り沢山の内容を詰めてということはなかなか難しいのですが、できる限り深めて柳田布尾山古墳の理解に役立てたいと思います。質問につきましては最後に予定致しておりますので、まずその3つについての討論をスタートしたいと思います。ではよろしくお願い致します。

最初に古墳をどのように造ったかということですが、どのような道具で、そのように土を積んだかということだけではなく、あれだけの巨大なものを造るには、そのスタートの段階から完成の段階まで色々なプロセスがあると思います。まず最初に、そういう古墳造りのプロセスですね。これも1つのものではないんですが、基本的にどうであるのかということを、和田さんのほうからご説明願いたいと思います。よろしくお願い致します。

**和田**　古墳はどのように造られたのかということですが、これは古墳を見ながら、皆さん方にも具体的にその現場に立ったつもりで、ご一緒に考えていただければと思います。最初に、ごく一般的に、こういう手順が考えられるというところで話をさせていただいて、それからそれぞれの皆さんのご報告をいただくことにしたいと思います。そこで、まず最初に何処に古墳を造るのかということを決定する。多分、それは当時としては古墳を造る場合の大きな検討課題の一つだっただろうと思います。あの有名な仁徳天皇もですね、自分のお墓を何処に造るかということで、百舌鳥野の方に出かけていったという話が『日本書紀』に出てまいりますが、場所を決める、場所を選定するというところから始まるだろうと思います。それから樹木を伐採して、表土を取り除いていく。そういう整地の作業が次にあったんだろうと思います。この時には、自然にある山を、どれだ

け古墳の墳丘の中にですね、古墳の高まりの中に取りこんでいくのかというふうなことは既に決定されていて、それにあわせて古墳の整地が行なわれたのではないかと思います。

次に行なわれますのは、古墳の墳丘の盛り土を積む作業、それから埋葬施設を造る作業、そして遺体を埋納する、という作業が次に行われますけども、この3つの作業は、墳丘を造ってしまってから、改めて埋葬施設を造って遺体を納めるというふうな場合もございますし、そうでない場合もございます。かなり複雑でして、今日のお話の中で掘込墓坑というような言葉が出てきますが、墓坑というのは墓穴なんですけども、掘り込みというのはまず最初に墳丘の全体をきっちり造ってしまってから、あらためててっぺんからポコッと墓穴を掘って、その中に遺体を埋葬するという手順になります。もう一つ構築墓坑というお言葉が出てきますが、それはですね、墳丘を造っていく途中で真中の部分を空けておいて、周りに先に土を積んでしまうのですね。そうしたら真中がへこみますので、そこがちょうど墓穴になる。そうした中に遺体を納めて埋納するという手順になります。これはどういう所が違うかというと、古墳全体の形を造ってしまっておいてから、後に埋葬用に墓穴を掘って埋めるという場合とですね、古墳を造っていく手順の途中で墓穴も造って埋葬するという場合とでは、あとで議論になりますけども、生きてる間に墳丘が造られたかどうかというふうなこととも関係しまして、その差はかなり大きなものになると思います。そういう所も一つポイントになるかと思います。

次に盛り土の仕方にも色々ございまして、その盛り土の仕方がどうだったのか、それから地山との割合がどうだったのかということも話題になると思います。それに柳田布尾山古墳は埴輪や葺石はございませんけども、一般的には埋葬した後で埴輪や葺石を葺いたのか、それとも埋葬する時にはもう既に埴輪や葺石がきちっと備わっていて、その中で祭祀が行われ、遺体が埋納されたのか、そういったこともまだ十分よく分かっていません。ですから、古墳を造る手順についてもまだまだ検討する必要があるわけなんです。しかも古墳を実際に掘っていましたら思いがけない所から土器が出てきたり、何か焚火の痕のような木炭が出てきたりしますので、いろんな所で儀礼が行なわれているわけですね。そういった古墳を造っていく手順と、その場その場で行なわれた儀礼、そういったものが全体として分かって、始めて古墳はどういうふうにして造られたのかということが言えるかと思います。また、当時の人たちがその作業にどういうかたちで参加したのかということも、これはなかなか難しいのですが、議論の対象になるんじゃないかと思っております。以上です。

**宇野**　どうもありがとうございます。あれだけの立派なものを造るのは大変なことだということを感じていただけたらと思います。それでは順をおいまして、実際にどういうふうに造っていたのかということを説明していただきます。まず、大野さんの方から氷見市の柳田布尾山古墳につきまして、どのように造っているかということの発表をお願い致します。

**大野**　それではスライドをお願いします。今日、午前中現地を見ていただいた方もいらっしゃると思いますが、これが柳田布尾山古墳の全景、雪があるときに撮った写真です。(写真1)　こんもりとしているところが古墳の側面でちょうど平野側、富山湾側から見た古墳の様子です。向かって左側の少し高い方が後方部、右手のちょっとなだらかな所が前方部にあたります。次、これは山側の方なんですが、実は土取りされた所の断面に溝が見えておりました。(写真2)　このことから発掘調査をする前から、この古墳の周りには周濠と呼ぶ空堀に黒い土が溜まってその下に黄色い土がありますが、これが周濠ということで予測しておりました。こちらが前方部の周濠の様子です。(写真3)　左側の壁が古墳を縦に割ったセンターラインにあたります。ここを掘りましたら土器の破片が出土しました。手前が墳丘側ですが、反対側にもちょっと影になっておりますが、土器が出てお

ります。こういうふうに幅8m、深さ2mちょっとの周濠が確認できました。これは今度は、後方部の2号墳との境目にあたる調査区です。(写真4)　ここでも1号墳としております大きい古墳、柳田布尾山古墳とこちら2号墳になりますが、この間にやっぱり周濠が通っていることが分かりました。それから2号墳自体も古墳かどうかはっきりしなかったんですが、ちょうどここに、こう筋のようになって土を盛っていることが分かりますが、これも古墳であることが分かりました。ただ2号墳につきましては形、円墳か方墳か、丸いか四角いかについてはまだ確認しておりません。それでこのような周濠は柳田布尾山古墳の場合、古墳全体を取り巻いているのではなくて、一応今までの調査で後方部の後ろ、まあ前方部を前にしますと裏側には周濠が無いということが分かっております。それから残りの3方につきましても、調査する調査区ごとにですね周濠の幅や深さがまちまちです。狭い所ですと3m位しかありません。広い所ですともっとずっと広い幅の20m近い幅になるんですが、そういうことで、周濠全体の形についてはこれから調査していかなければいけないと考えております。これは後方部の一番後ろ側ですね。(写真5)　これにちょっと小さい溝があるのは、これはどうも古墳が造られた後で掘られた溝と考えております。実は柳田布尾山古墳は後方部の中央に大きな盗掘坑があります。この盗掘坑は、昨日和田さんはこんなでかい盗掘坑も珍しいということで、盗掘坑の大きさでは日本で一番位だというお話でしたが、その盗掘坑を掘った土をここに押し出しているんですが、それを取り除いてやっと元の古墳表面が出てきたというところです。こういう盗掘坑で出た土については全部ふるいにかけたんですが、今のところ土器の破片しか出ておりません。これが、その盗掘坑の様子です。(写真6)　今日ご覧いただいた方がいらっしゃると思いますが、人の大きさと比べても非常に大きいことがお分かりいただけると思います。かなり大勢の人数で日数をかけてしたのではないかと。しかし、いつ盗掘をしたかということは今回の調査ではわかりませんでした。古墳ができてしばらく経ってなのか、それとも100年位前なのかはまだ分かっておりません。また盗掘坑の斜面で粘土の層が出てきております。古墳の埋葬施設の場合に木棺の周りを粘土で覆う粘土槨というのがあるんですが、ひょっとしたらそういったものが残っている可能性は残されております。それから影が入っておりますが、前方部の墳丘を掘り込んでみたものです。(写真7)　赤っぽい土がここに出ております。これがいわゆる地山、自然の山です。それからその上に黒っぽい土があって、あとちょっとサンドイッチのように黄色い土とか黒い土とかが重なっているんですが、この地山のこの黒い土を旧表土と考えその上が盛り土と考えています。柳田布尾山古墳の場合は古墳の全てを盛り土したのではなくて、大体標高27～8m位の所から下を削り出しまして、その削った土を上に盛り上げて造っているということが分かっております。それからこちらが平野側のくびれ部。(写真8)　前方部と後方部のちょうどつながる所ですが、ここはちょっと造り方が変わっておりまして、これが後方部のラインなんですが、ここは地山を削って作り出しているんですが、前方部についても地山を削って掘り込んでいるんですね。それで掘り込んで、あらためて土を順番にここにこういうふうに盛っていると。これはどういう理由かは分かりませんが、あるいはこの反対側のくびれ部は地山を削っているだけ。他の場所と同じような造り方をしているということで気になる所です。それからこれがですね、古墳の前方部の平野側のコーナーで出ました、陸橋の所ですね。(写真9)　前方部の前面の周濠がここでストップ、終わってしまいます。ちょっとこの写真では分かりにくいんですが、こちら側の調査区でまた周濠が出てきております。従いまして、ここだけ周濠の掘り残し部分がある。ここは橋、ブリッジのように残っており、ここから古墳に出入りした。ここから古墳の前方部の稜線を登って古墳に出入りしたのではないかと考えております。それで逆の方ですね、山側の前方部のコーナーなんですが、こちらは幅3mと幅は狭いんですけれども、ここをちゃんと切っているわけですね。(写真10)　従いまして、柳田布尾山古墳はどうも平野側の方に出入り口があったのではないかと、そうしてみますと、先ほどいった平野側のくびれ部も造り方がちょっと変わ

っていた。一回地山を掘り込んで、また盛り直しているというのが、これをどういうふうに解釈するのか難しいんですが、それも平野側を何か意識した証拠かなというふうな感じもしております。

以上簡単に紹介しましたが、柳田布尾山古墳は側面を富山湾、それから下の平野の方に向けております。それで、当然そういうことを意識して古墳の場所を決めていたと思うんですが、古墳の方向をちょっと考えてみますと、私は調査で何度も現地に行っておりまして、前方部の一番高い所から後方部、つまり前から後ろの方を見ますと、ちょど後方部の後ろに二上山が見えるんです。これは二上山を意識してるのかなあという、そんな思いがしまして、ちょうどそちら側二上山と古墳の間の方に、先ほど言いました周濠がない、溝がないというのも何か二上山を意識しているんじゃないかと。それから富山考古学会が二上山の周辺で前方後方墳を幾つか見つけておりまして、そういう二上山の周りに前方後方墳が多いというのと、柳田布尾山古墳が前方後方墳であるという、そういう二上山の方を向いているというのはひょっとしたら何か関係があるのかなというそんな思いを感じております。

**宇野**　ありがとうございました。今のお話では昔古墳を造る頃の地面の上に、土を盛り上げていったということ、それから上から二上山でありますとか、海の方でありますとか、眺望というものがどうも重要ではなかったかということであります。少し記憶に留めておいていただきたいと思います。

続きまして中屋さんの方から、能登の方、能登には非常に富山県と関わりの深い古墳文化がつくられているところでございます。よろしくお願い致します。

**中屋**　私は、能登の鹿西町という所で雨の宮古墳群の発掘調査を致しました。こちらの柳田布尾山古墳と同じ前方後方墳で大きさは64m程の、こちらに比べれば小さい古墳なんですが、埋葬施設の中まで調査致しました。先ほど大野さんが言われたように布尾山古墳には粘土が少し残っていて、粘土槨があったのではないかということでしたが、雨の宮古墳群の1号墳は、その粘土槨が埋葬施設でありました。ですから、今からお見せするスライドは、同じようなものがもしかすると柳田布尾山古墳にあったのか、それともまだ残っているのかというのを思い浮かべながら見ていただければよろしいかと思います。

これが雨の宮古墳群の全景です。(写真11)　平成3年の写真でして、古墳の整備がされる前のものです。右側の方にありますのが1号墳の前方後方墳になります。左の方にありますのが前方後円墳です。1号墳の方が64mで、2号墳の方が65.5mということで、よく似た大きさの古墳が2つございます。写真の上の方が邑知地溝帯と言いまして、幅2ｋｍ程の平野部になっております。この雨の宮古墳群は山の中にある古墳群ですけれども、1号墳の後方部がこちらの山の一番高い所にあたりまして、188mの標高がある所です。ですから先ほど和田さんがおっしゃられた、場所を選ぶというところで、一番山の高い所を選んで造られている古墳です。それでこちらともちょっと関係してくるんですが、前方部の所にお宮さんが建っておりまして、天日陰比咩神社という雨乞いのお宮さんです。地域としては能登半島の志賀町という所からこちらの氷見市までの祈雨の神社であったということでして、こちらともつながりの深いお宮さんであります。そこから名前をとりまして雨の宮古墳群というふうに言っております。次の写真は整備に先立ちまして、表土を取ったところです。墳丘は写真下の方が前方部になりまして、奥側が後方部になります。2段に墳丘が造られておりまして、2段築成になっております。葺石が全面に葺かれておりまして、頭の大きさ位から拳位の大きさの石が使われております。これは眉丈山という山の谷筋から採ってきたものだろうと思います。石の数は、ざっと算定したところ数万個、十数万という数字の計算もありましたが、それ位の数が使われているだろうということです。ここに行きますと板状に割れた石が見られまして、葺石で使われている石とは別の石がこの古墳に使われております。その石は先ほ

ど言いました志賀町という所、この古墳から10ｋｍ位離れた所からわざわざ海岸線に露頭しているものを採ってきているようです。そういうふうに石を採って来れる範囲というものも恐らくこの古墳の被葬者の勢力の及んでいる所だったと考えております。次の写真は先ほど言いました粘土槨という埋葬施設です。これは一番最後の状態です。この中に長い棺が入ります。粘土でその棺を全部くるんでパックするタイプのものです。ですから写真では、上が空いていますけれどもこれは長い間土の中にあって、中の棺が腐って空間ができたものですから、天井が落ちているという状態です。ですから埋葬された時には、これはもう完全にくるまれている状態です。写真では大きさは分かりにくいんですが、粘土の範囲の長さが7.2m、幅が2mあります。 中に入れられていた棺の長さが6.2m、幅が80ｃｍほどありまして、この中には一人の方だけが埋葬されていました。副葬品も一緒に入れられている状態です。布尾山古墳とはちょっと違いましてこの埋葬施設は一番墳丘の高い所にあるのですが、この周りの土は全て元々の山の土、いわゆる地山であります。ですからほとんど盛り土の無い地山を削り出しただけで形を造って、ほんの少し足りない所を、盛り土をして墳丘の形を整えているという造り方の古墳です。次の写真が足りなかった所の盛り土の状況です。(写真12)　ちょっと影になって見にくいんですがよく目を凝らして見ていただきますと、横方向に少し黒い筋が入っているのが幾つか分かるかと思います。この写真で出ている所を図におこしたのが配付資料の「雨の宮1号墳　石川県鹿西町」と書かれた図です。少しかすれて黒く塗ってある所が黒い土でして、色が塗ってない所が黄色い土で、質の違う土を幾つか突き固めながら交互に積んで盛り土を流れにくくする工夫をしている所です。その図の右側の方に真っ黒く塗って、下に杭のような形に、三角になっている部分があると思うのですが、これが斜面に杭を打って土留めを造ってからその内側を盛土する方法をとっています。他の古墳ですと、周りの部分に先に土を盛って土手を造って、内側を埋めていくような盛土をしている所があるんですけれども、ここではこういう簡単な杭の跡でやっていることが分かります。次の写真は発掘調査の一番見頃の時期でして、副葬品が全部出ている状況の写真です。(写真13)　先ほど言いましたように中に6m20ｃｍ位の棺が入りまして、中には副葬品、威信財と先ほど和田さんがおっしゃっていましたが、石で作られた腕輪のような形をした物が入っています。写真手前の方には鉄の刀類、奥の方に甲とか銅で作られた鏃が入っております。遺体はこの真中にあったと思われますが、骨は全く残っておりません。この写真にはちょっと見えておりませんけども、このちょうど遺体の顔の横辺りの所に鏡が出ております。次の写真がその出てきたものの一部です。(写真14)　刀は80数ｃｍあります。短い剣と全部銅で作られた鏃です。全部で52本出ております。これが石で作られた腕輪形の石製品と言っているものになります。上の方が車輪石と言っているもので、下の方が石釧と呼んでいる緑色凝灰岩いわゆる碧玉という石です。北陸の方で作られていたと言われています。それから、これが直径17ｃｍの銅の鏡です。

これから柳田布尾山古墳がどういうふうに整備されていくか分からないんですが、雨の宮1号墳の造られた当時の姿に戻すという方針で葺石を全面的に復元致しまして、まばゆい白い山に変わっております。(写真15)今行っていただければ綺麗な状態でしっかり管理もされておりますので、当時の状態が分かるようになっております。埋葬施設は表示されているだけですけれども、一応何処にどういう物があったかというのが分かるようになっています。2号墳の前方後円墳の方はあまり手を付けませんで、後世に穴が掘られていた所は埋めて、なるべく千数百年経った姿が分かるように、1号墳と対比して見られるように整備をしております。1号墳と2号墳どちらも60数mの古墳ですから、遠足で来ていただければちょうどいいような感じの所でございます。

雨の宮1号墳に関連しまして、少し能登の方のことも話をしろと宇野さんから言われておりますが、能登の方で発掘調査をされている古墳で、状況が分かっている古墳は非常に少ない状態であります。七尾の方でやはり前方後方墳の国分尼塚という古墳群がありまして、そちらの状況が若干分かっておりますが、その辺は後で

和田さんの方からお話があると思います。もう1つ鹿西町のお隣の鳥屋町という所で、これも50数mの前方後方墳なんですが、今年発掘調査が一部されまして、やはり墳丘は地山を削り出している所が多かったようです。それは墳丘をどこに造るかということに大きく関わってくるんだろうと思うんですが、基本としては墳丘を削り出して足りない所に盛り土をしているという古墳が能登の方では多いようではあります。鹿西町の反対側にあります鹿島町、ちょうど氷見の裏側になりますけれども、小田中親王塚と小田中亀塚という宮内庁の所管になっている陵墓参考地があるんですが、そちらの方は山の上ではありませんのでほとんどが盛り土で造られている古墳ではないかと考えています。その辺の確証は無いのですが、そういうふうに考えております。大体、能登はそういう状況です。

**宇野**　ありがとうございました。隣県の前方後方墳であっても造り方が違い、土盛りをするものと、土を削りだして造るものという違いがあることをお分かりかと思います。続きまして、やはり古墳文化が花開きました大和の、その中の重要な地域の古墳でありますナガレ山古墳の整備をされました吉村さん、お願い致します。

**吉村**　それではナガレ山古墳の説明をさせていただきますが、まずナガレ山古墳の場所をイメージしていただきたいと思います。奈良県でも河合町と言いますとなかなかイメージがすぐにわかない場所です。この中でも法隆寺に行かれた方が沢山いらっしゃると思いますが、その法隆寺のあります斑鳩町の南隣りにあるのが河合町です。ですから奈良盆地の西の方というような感じで一応考えていただければと思います。その中で整備しましたナガレ山古墳の説明をさせていただきます。

ナガレ山古墳は規模的には大体こちらの柳田布尾山古墳と同じくらい、全長が105mの古墳です。しかしナガレ山古墳は前方後円墳という形で、形がまず違います。それから造られた年代も今までの2例とは少し遅れるような感じで5世紀の前半の古墳だということで、少し時間的なところも違うということをまず知っていただければと思います。それではスライドを交えながら説明させていただきます。

ナガレ山古墳の場合は、これは整備が終わった後の航空写真（写真16）なんですけれども、今から20年前くらいにこの写真でいうと右側の墳丘で土砂採集がされ、破壊されました。それでその後、国の指定史跡になり、残されてきたわけなんですが、10年程前から周りが奈良県立の大きな公園になるということで、その中に崖むき出しの様子の古墳を残しておくというのも忍び無いということになり、一部破壊されたのを逆に幸いにということで、古墳が造られた当初の様子を復元して実感できるような古墳にしようということになったわけです。全体としては、破壊された方は整備するんですけれども、残された方はできるだけそのままにしておきたいということで、この古墳のセンターで見ると左右非対称の形での整備という、ちょっと珍しい整備をしております。先ほどの雨の宮古墳群が、1号墳と2号墳で違う整備をしていたのを1つの古墳で表現したというような整備になっています。

ナガレ山古墳の場合は、整備した側を中心に発掘調査を行なっておりますけれども、葺石が葺かれ埴輪列が廻っているということが分かっております。ただし、できるだけ残された部分は手をつけないということで、後円部の方についてはほとんど調査してませんので、一番上の埴輪列は確認されていないため植栽で表現しています。

それから前方部の方に、ここにちょっと見えにくいのですが今日お配りしています資料の中に、カラーのリーフレットを一緒に入れさせていただきましたので、それも見ていただければいいんですが、前方部の上の中心より少し東に寄った所に粘土槨という木棺を粘土でくるんだものが見つかっております。こちらの場合は組み合わせた箱形の木棺を粘土でくるんでいるという形になりまして、未盗掘でしたけれども棺の中から全く遺物が出ないという状況でした。それだけ前方部にあるということにも意味があるんだと思いますが、そういう

ものがあるということを一応表示しております。

後円部については、こちらの布尾山古墳と同じように大きな盗掘が及んでおりまして、全くその棺の痕跡などは残っておりませんでした。

これは発掘調査の時の状況ですが（写真17）、今日の後でまた出てくるテーマになるんですが、このナガレ山古墳の場合非常に面白い遺構が検出されております。写真の上が後円部ですね、この丸く見えていますのが円筒埴輪の基底の部分です。円筒埴輪というのはナガレ山古墳の場合、大体高さが80ｃｍくらいある土管のような形の埴輪ですが、そのうち下部の大体15ｃｍくらい埋め込んでいます。埋め込んだ部分だけが崩れずに残りまして、上の方は長い年月の間に、1600年くらいの間にバラバラになってしまいます。発掘調査をしますと、上のバラバラになった破片がいっぱい散らばって出土しますが今取り除いたような状態で写した写真なんですが、その埋め込んだ部分はこういう形できれいに残っております。この古墳の場合は、後円部と前方部の接点、くびれ部とよんでいる辺りですね、ここに古墳の裾を取り巻く埴輪列を切るような形で2列の埴輪列が見つかっています。またその部分だけ少し高くなっています。そういうところから、どうもこれは墳丘の上へ上がっていくための道、通路を区画したものじゃないかということで、非常に珍しい遺構ということが発掘当時は言われておりました。それともう1つは、2列の埴輪列の内のこちら側が1本分ここが空いていまして、どうもこちらからくびれ部の方へ入ってこの赤い土の高まりですね、ここにちょうど野球のグラウンドのピッチャーズマウンドくらいの大きさのちょっと小高い所がありまして、その周りに石がいっぱい敷き詰めてあるのですが、そういう場所で滑石製の模造品というものを使ったお祭りをどうもしていたようです。それから土取りで破壊された部分というのがこういう部分ですね。ですからこの通路は本来はもっと長く続いておったと思われるんですけれども、その全貌というものは分かりません。

これは東側から、側面から見た状態ですけれども、これが通路部分の列の埴輪列ですね。墳丘の裾を取り巻く埴輪列がありまして、ここが中段のテラスを巡る埴輪列です。（写真18）ちょうどこの通路に対応するように、この部分には埴輪列がありません。ですからここを通路として使っていたということが言えるんだろうと思います。

それから通路の部分の所で少し、どういう造り方をしているのかということで断ち割りを入れております。（写真19）これが地山です。古墳の裾の部分に一度大きな溝を掘っています。溝を掘って、それから赤い粘土を敷き詰めて盛り上げていって、その上に埴輪を並べていくというやり方をしています。上の斜面にはどうかということになりますが、たまたまナガレ山の場合は土取りで壊されていたのでその断面も観察することができたんですが、地山をいったん平らに削るんではなくて、ひとまわり小さな前方後円形に削るというような感じで造りまして、斜面の部分を中心に土を入れ替えるというような工事をしているようです。特にここは通路になる部分ですので、その盛り土を非常に何回も手間をかけて丁寧にやっております。この通路の埴輪についてはどうも盛り土をしながら一緒に据え付けていった可能性があるみたいですね。後から穴を掘って据えたのではなくて、どうも盛り土の過程でこういう埴輪を据え付けていくようです。

それから、これは上の中段のテラスの埴輪列の様子ですが（写真20）、手前が前方部にずっと続いていく埴輪列ですね。ちょうど通路の部分が途切れております。それで通路から通路じゃない方に向かって溝を掘って、石を詰めて暗渠のような形で排水している溝があります。そういうのを造ってからいったんテラスに土を入れて埋めます。アゼの上に埴輪が1本残っていますが、ここまでは盛り土の中をずっと布掘りという掘り方で溝を掘って埴輪を据え付けているんですが、ここから先については、どうもいろんな通路として使った行為が終わってから埴輪を置くだけで閉じるみたいです。実際にはこの辺りにも円筒埴輪があったみたいで、元位置はとどめていなかったんですけれども、円筒埴輪の基底部の破片がこの辺りに散乱しておりましたので、2段目

の通路部分については通路を使う行為が終わってから円筒埴輪を置いて、通路を閉じるということをやっているようです。

その発掘調査に基づいて、大体こういう感じになるんだろうということで復元したんですが（写真21）、この段階はもちろん現代の見学者の便宜のために設けたものです。古墳時代の遺構として、この部分についてはどういう登り方をしてたかというところまでは調査できておりません。本来この埴輪列がもっと前に続いていくということは確かだと思います。それから北側の列で1本開いておって、くびれ部へ降りてこの辺りでお祭りをする。それから通路を上に登っていって色々お祭りをしたりとか埋葬に関することをするんだと思うんですけども、そういうことが終わってからこの部分に円筒埴輪を置いて通路を閉じるということをやっているみたいです。

それからこれは滑石製の槍鉋（やりがんな）と呼ばれる模造品（写真22）で実用品ではありません。鉄製品の槍鉋を模した、お祭りに使う雛型ですけども、これがくびれ部の裾の部分から出ています。石の目からいくと無理に割ったような形で出ておりますので、どうもお祭りが終わる時に投げつけて破砕するというようなことをやっております。これ以外に刀子とか、斧の形をした物も出ています。

それから話の方がまた別の所に飛ぶわけですが、これが小さな、中央のもので5ｃｍくらいですね。土で作った物なんですけども、土製品と呼んでおります。前方部の粘土槨を埋めた土の中から出た物です。（写真23）　お餅状の物とか団子状の物、玉みたいな物ですね。それからどうもこれは（写真中央右上）蓮の実のような感じもするんですが、こういう物もあります。あとこれは（写真右上）片側だけをつまんでいる、ちょうど餃子みたいな物です。恐らく加工食品とか、天然に採れる食品を表した物だと思うんですけども、こういう物を使った行為が前方部の上で行なわれていたということが言えると思います。こういう土製品と一緒に高坏とか篦目の土器が一緒に出ておりますので、高坏の上にこういう物をのせてお供えをしていたんじゃないかと思います。

前方部の粘土槨の棺内には副葬品は無かったんですが、これは粘土槨の粘土の中に埋め込まれていた鉄製品です。（写真24）　一番下で大体長さが30ｃｍくらいですので、実用の刀というよりはお祭り用の雛型のような物だろうと思われます。

また話の方はちょっと戻りますが、ナガレ山古墳の裾周りの造り方を示す写真です。（写真25）　ここまでが地山ですね。この左側の部分の写真が無いんですが、地山がこう上がっております。ここに墳丘の裾の埴輪が一部見えてます。ですからちょうど埴輪列が来る下の辺りを溝状にえぐり込んで、それからいったん粘土を貼って土を盛り上げて、もう一度ここに溝状のものがあって埴輪を据え付けるということをやっています。ですから元々自然にある山を、地形を、裾周りを削り込んで、それを基に恐らくこっちの残っている、斜面になる側の方の山の部分をある程度形を整えて、それから裾周りと葺石を葺く斜面の部分の土を入れ替えながら造るということをするんじゃないかなというふうに考えております。

それからこれは、また整備での話のスライドなんですが（写真26）、ナガレ山古墳では先ほど沢山埴輪が並んでいましたが、整備で675本の埴輪を並べておりますが、その内の181本は河合町の町民の手によって、粘土の帯を作って、それを積み上げて作って焼いた埴輪を並べてます。内側にそれぞれの作った方のサインをしていただいて、実際の古墳に並べておりまして、こういう形の整備をとっております。（写真27）　この中でちょっと濃い色の埴輪があるんですが、これらが全て手作りの埴輪になります。ナガレ山古墳については以上でいろんなテーマについて一気にお話させてもらいました。

あと古墳の造り方ということで、若干最近奈良県内でも奈良盆地の東の方で非常に古い古墳で大きな古墳が沢山集まっている大和古墳群というのがあるんですが、その辺りの調査がここ4年位で非常に進みました。その中で例えば下池山古墳という全長120ｍの前方後方墳があるんですが、その埋葬施設の部分の調査等から、

墓坑を、先ほど和田さんの方からお話がありました、「構築墓坑」というような形でつくっているんじゃないかとか、あと黒塚古墳、これは去年ですか沢山の鏡が出て話題になりましたが、別に鏡が出たことだけがすごいんじゃなくて、その石室を作る際の作業道がはっきり調査で分かってきたという成果も最近大和の古墳ではあがっております。以上のようなところで紹介を終わらせていただきます。

**宇野**　ありがとうございました。さすがに色々複雑に造り上げています。それから後ほど検討いたします祭りにつながる話もありましたので、それも記憶に留めておいていただきたいと思います。次に和田さん、尼塚ほかについてお願いできますか。

**和田**　お手元の資料の左下の方に兵庫県の権現山51号墳という、これも50m余りの前方後方墳ですけども、そこの古墳の造り方が図に出ております。自然の山がこの格子目のレンガを積んだような模様になっておりますが、そこを綺麗に削った後に、大体古墳の主軸に平行するような格好で、3段に土を積んでおりまして、その4段目の後方部の、要するに右側の所ですけども、そこの所は薄い灰色に塗られました土をですね、真中を空けて積むような格好で造っておりまして、その中に石室を造っていると、こういう格好のやつが構築墓坑というふうに思っていただいていいかと思います。構築墓坑という、それの具体的なもう少し大きな図が、右上の石川県の国分尼塚1号墳というので、そこの中心の部分だけ、これは絵にしておりますけども、真中を空けてですね、周りに梨のつぶつぶがついているような土を積みまして、真中をちょっともう1段掘りくぼめて、その中に棺桶を埋葬していっているという手順を示しておりますが、こういうふうなお墓の造り方もあるんだと。この場合は、古墳の墳丘全体とお墓の墓穴を掘って埋葬するのが一連の手続きで行われているというようなことがよく分かっていただけるかと思います。

**宇野**　ありがとうございます。非常に分かりやすい例です。最後に、私が調査致しました、1ページ、その同じページの右上の所に、象鼻山1号墳があります。年代は3世紀後半と考えております。邪馬台国と戦争した、狗奴国という国の王族の墓と考えているものでございます。私の方から簡単に説明致しますと、これは山頂に造る古墳ですが、山頂の高い所を全部削っております。一度平らにして、それからこの古墳の盛り土の半分位を造りまして、古墳の形が決まったところでお棺を置いてお葬式をして、それから古墳を完成させています。先程の話にありました構築墓坑であり、兵庫県権現山古墳などと同じものであります。なぜわざわざ高い所を削って、それから盛り土をするのかということなんですが、この山の一番高い所はあまり見晴らしが良くないのです。これは濃尾平野の古墳なのですが、場所を少し動かせば濃尾平野全体が一望の下に見えることが、築造場所を選んだり土木技術を選択したりする時の1つの要因ではないかと考えております。

　このように非常に多様な造り方をしているということですが、古墳の大きさと、土を盛った量がどれだけなのかということが、また違う問題だというのをご理解していただけたかと思います。柳田布尾山古墳については、どれだけの盛り土をしたのかということを西井龍儀さんが計算なさっています。これは非常に貴重な例ですので、その結果についてお話をいただきたいと思います。

**西井**　布尾山古墳は幾らか崩れているかと思いますので正確なボリュームというのはまたこれから検討してもらわないといかんのですけれど、古墳全体のボリュームからすると約2万立方メートル強あります。2万400程ありました。その内で盛り土として造っている所が約9千立方メートル程あります。半分以下になります。で

すけども実際の古墳の高さからしますと、先ほど大野さんの方から、地山は、造る前の地山は標高27m位の所という具合に報告されておりますけれども大体水平なんですね。その高さが古墳の裾から約2m50ｃｍ位でしょうか、3m未満ですね。後方部の高さが約10mありますから残りの部分が盛っていると。ですから4分の3程ですかね。後方部の高さとしまして、その位の割合が盛っていることになろうかと思います。ですから大変な量を盛っているということでありますが、先ほどから報告にありました、古墳の周りに幅を違えて、広い所、浅い所、深い所と色々ありますが、そういった土量をある程度必要な所は広くとったり、そのとった所そのものが防壁を画するという目的も多少あるかもしれませんけども、それだけの範囲からバランスよく土を採って盛ったという具合に言えるのではないかと思います。

**宇野**　どうもありがとうございます。これは大変貴重なご研究なのですが、中屋さんと吉村さんの方はいかがでしょうか。こういう情報が全国的に見てどうなのかということを、一言ずつお願いできたらと思うんですが。

**中屋**　雨の宮古墳群の方はこういうふうな細かいところまでは実は計算しておりません。一説には古墳全体で8千立方メートル位という説もあるそうですが、先ほど申しましたようにほとんどは削り出しで造っている古墳でありまして、ここで柳田布尾山古墳のような盛り土の量とか、その割合とかいうのは全く及びもつかない土量であるだろうと、私の方は思っております。

吉村　奈良や大阪の大きな古墳の場合は、今まで体積の計算なんかはよく事例としてあるんですけども、どれだけを実際に盛って造ったかということは、なかなか、なかなかというかほとんど今まで手付かずの状態です。特に奈良や大阪の場合、まず陵墓なんかも多いので立ち入れないということも結構影響しているかと思いますが、そういう意味からも非常に貴重な計算の資料ということになるんじゃないかなということで、また参考にさせていただければと思います。

**宇野**　ありがとうございます。私が調査致しました岐阜県の象鼻山1号山は大体2千立方メートル程の盛り土でございます。邪馬台国と戦争した強国と考えている例に比べて、いかに柳田布尾山古墳がすごいのかということを考えていただけたらと思います。今見ていただきましたように古墳の築造法には多様なやり方があり、その中でも柳田布尾山古墳はすごいものだというふうにご理解願えたらと思います。和田さんの方から今色々ありました多様な技術を少し整理していただくようお願い致します。

**和田**　分かりました。時間があまりありませんので簡単にやらせていただきますと、先ほど古墳の格や力というのが形と規模だというふうに申しましたけども、実際それを造るとなりましたら、もうその古墳全体のほとんどを山を削り出す方に重点があって僅かしか盛り土をしていないという古墳もありましたら、象鼻山のようにわざわざ古墳を造る所を整地までしてから古墳全体をまた盛り土で造っているという所、あるいは柳田のようにですね3分の2位は盛り土であとは地山だと、いろんな造り方があります。その古墳を造るのにどれだけの人が動員されてどれくらい行動力を要したのかということを今後検討して行くためには、山を削り出して造った所と土を盛った所をはっきり区別して考えていく必要があると思います。昔はですね、古墳造りには一人でも多くの人を動員して、政治的なデモンストレーションの場のような形で盛り上げようというふうな動きがあったんではないかと、思っておりますが、その時には非常にこう大事なことなんじゃないかと、思っております。

それからこの面で、今後の布尾山古墳の調査で期待したいことはですね、こういうふうな格好で造ります古墳が、見ていただきましたらほとんど崩れていません。あの古墳は盗掘した人が大きく古墳を変形させておりますが、自然のままではほとんど千何百年間も経っているのに形が変わっていない。ということは先ほどスライドを見ていただいておりますように、黄色の土とかですね、それと恐らく地面の粘土質の土ですけども、それと黒い土、これは昔の旧表土ですか。表面に溜まった黒い土、そういうのをうまい具合に重ね合わせていくことによって雨風をしのいで、しかも千何百年も形をほとんど崩さないような積み方をしているわけですね。実際、何故それがそういうふうになるのかというのをきちっと科学的に分析した例というのはほとんど無いわけです。ごく稀にそういうのがありましたら、そういう土に上手にですね木の灰なんかを加えまして、一種の石灰のような物を混ぜると同じような効果を発揮してそれを崩れないようにしているとか、いろんな昔の人の知恵がその中に詰まっているはずなんですね。そういったものを土木工学的に検討していただくような調査ができれば、更にいいんじゃないかなというふうに期待しております。以上です。

**宇野**　どうもありがとうございます。将来の展望も含めてお話をいただきました。それでは時間も残り僅かとなりましたが、古墳でどういうふうな祭りをしたかに移りたいと思います。そのイメージを作らないと、単なる丘とどう違うのかということになってまいりますので大変難しい課題ですが、和田さん、どういう視点で古墳の祭りを復元できるのかということをお願い致します。

**和田**　連続して話させていただきますと、古墳は単なるお墓ではないというお話を第1部の方でさせていただきまして、しかもそのお墓ではないというのはですね、その古墳という場で首長の死にまつわるいろんな儀礼が行なわれたんではないかというふうなことも推測されます。しかし実際、何が行なわれたかというのはなかなかはっきりしてこないわけなんです。私達としましては古墳の築造過程を先ほど一番検討させていただいたんですが、そういったことを細かく推測し、復元してですね、それぞれの場で遺構とか副葬品とかがどういう役割を果たしてきたかということも含めて、きっちり古墳の場でこういうことが行われていた。それをまず復元して、その背景に何があったかのかということを具体的に問うていく必要があろうかと思います。そういったことを考える上の第一番目としてですね、大体前方後円墳や前方後方墳は何処から出入りしたのか、古墳を造る時の出入り口と儀礼の時に入っていく出入り口とか、いろんな種類の出入り口があろうかと思いますが、何処から入って行って、そして何処を通って後円部のてっぺんまで行ったのか。その間には何をしたのかというふうなことが具体的に分からないと、当時の人達の本当の思いというのは伝わってこないんじゃないか。まあ言ってみましたら古墳の動線、動線というのは人の動きですね。動線をはっきりさせて、その場その場における遺構とか遺物、そこにぶち当たる具体的な施設。あるいはそこで使った道具ですね、それを明らかにしていく必要があるんじゃやないかと。そういう意味で、奈良のナガレ山古墳のものは1つのヒントになりますし、今度布尾山古墳で見つかりました前方部の端の陸橋もですね、今からご披露いただくことになるかと思いますが十分検討していただいて、何処を通って人が入って何をしたのかという話を詰めていただければなあと思います。

**宇野**　ありがとうございます。それでは今話が出ました柳田布尾山古墳から発信をいただきたいと思います。

**大野**　はい。まず柳田の場合は先程ふれましたように平野側の前方部のコーナーで墓道が見つかっているということ。その墓道は古墳の前方部の稜線が一番登りやすい所だと思いますが、そこを登って古墳の前方部の上

に登っていたということが想定されます。それからあと1つ。これは道ではないんですが柳田布尾山のくびれ部、この測量図を見ていただければいいと思いますが、墓道がある側の、上側のくびれ部の所でちょっと等高線が、くびれ部の所でちょっと緩やかになっている所があるんですね。ちょっとここは1段高い。先ほどのスライドの時にくびれ部がちょっと複雑な土の盛り方、複雑と言いますか一回地山を掘り込んで、前方部が改めて盛り土をし直しているということをお話しましたが、ここにちょっと四角い段状のものがある。これが発掘調査をしますと、やはり地山がこの部分高いんですね、だからこの部分をやはり残していた。そういうことで何かこの空間が今の段階では非常に同じ平野側ということで、気になる部分であります。ただあまりここから遺物が出ておりませんのでちょっとまだ評価はできておりません。

**宇野**　はい、ありがとうございます。次に中屋さんお願い致します。

**中屋**　雨の宮古墳群の方では、調査した所ではそういう墓道というのははっきりと分かっておりません。ただお宮さんがあって、後方部の上で神事相撲がされてまして、大体そこへ上がっていく通路としてくびれ部の所が使われていたということはあるようです。ですからその通路がずっと千年も生きていたかどうかは分からないんですが、そういう所がまず有力な候補として考えられます。それとお祭りのときに使うような土器が、後方部の平野側の裾の所に出ておりまして、そこから墳丘の上に上がるということを考えましても、後方部と前方部のつなぎ目のくびれ部の所というのは1つの有力な所ではないかと思います。ただしそれは埋葬の時のお祭りということで、この場合は埋葬施設の中へ棺を運び込んだり遺体を運び込んだりということがありますので、墳丘に上がった後、墓坑の中へ入るのに、先ほどの写真を思い出していただきたいのですが、主軸と直交する形で埋葬施設が造られております。上の平らな面の長さが11m位しかない所に8m50ｃｍ程の長さの墓坑が掘られております。ですから両側にほとんど間がありません。墓坑の中へは、平野部側の掘り込みが浅くなっていますので、そこから物を運び込むと考えています。ちなみに平野側と反対側の方は、掘り込みが1mもありますので、ここから物の運び込みは難しいだろうと考えています。

**宇野**　ありがとうございます。吉村さんお願い致します。

**吉村**　先ほどのナガレ山古墳の場合も、通路、埴輪列で画された墓道ですね、それがついておったのが平野側になります。それでちょうど平野側のくびれ部の所で、まず下で何かお祭りをしているというのがありますね。そういうのが同じ時期にもあるんですが、後々の前方後円墳に付いてくる造出しというものとの関連も考えられると思うんですけども、それからその道を上へ上がって行きますと、ちょうどこの1枚目の資料の1と書いてあるのですね、両面コピーの、これでその上の方に黒塚古墳の作業道というものを図面に載せておりますけれども、ちょうどこの図面で言いますと左側の方が前方部になります。ですからああいうくびれ部から上がって行って、前方部の上の平坦地から今度、後円部の石室の方へ入っていくというか、作業していくような形の通路が斜道としてつけられていく。まあこういうのがナガレ山古墳でも、調査はしておりませんけれども、同様のことが考えられるんじゃないかというふうには思います。

**宇野**　ありがとうございます。それでは最後に私の方から、皆様の手元の資料の1ページの右下の所に、象鼻山1号墳、それから小矢部市谷内16号墳という2つの古墳について申し上げます。これは2つとも私が調査させ

ていただきまして、墓道が非常によく分かった例です。谷内16号墳では後円部という、そこに葬られる一番偉い人のお棺が埋葬される所に墓道が取り付いています。それから前方部ですね、前方部はお棺も埋めるのですが、特に初期の古墳では多分広場として祭りをしただろうと思います。そちらにも墓道が取り付き、2つの墓道があります。私は多分、後円部・後方部に取り付く道は亡くなった方の遺体や棺を運び込む道であり、前方部に取り付く道は、お葬式に参列する人が集まるための道として最初はできたのではないかと考えております。

そしてこれは非常に難しい問題なのですが、私の方から今簡単にまとめさせていただきます。古墳の上で何をしたかということについて一番積極的に発言されておられますのは奈良大学の水野正好先生という方です。水野先生は後円部、後方部は遺体を埋葬するだけではなく、亡くなった方の霊的な力を、後継者が受け継ぐ場所であると考えておられます。そうして新しい王になられた方が、前方部に集まられた方々に対して即位を宣言するという2つの儀礼があったであろうと推定されております。私も前方部と後円部それぞれに独立した道があるのは、それぞれに独立した祭りがあったのではないかと思います。後方部がやはり亡くなった方に関するもの、前方部はそこへ色々な人達が集まってくるという社交と言っては何ですが、そういう場であるというようなことが、浮かび上がってきていると思います。しかし古墳は300年間ずっと同じではなく、技術も、お棺の納め方も変わって行きますので、色々な事例に即してできる限りの復元をしていかなくてはいけない分野であると思います。しかし柳田布尾山古墳において何の変哲もないように見える陸橋という、通路が見つかったとことの中にも、お祭りを考えて行く大事な情報が含まれていると位置付けていただければと思います。

時間はもうあと十数分に迫ってまいりましたが、今後のこの古墳をどう活用していくのかということについて中屋さんと吉村さんの方から史跡整備の経験をお話願います。

**中屋**　雨の宮古墳群の整備を実際にやりまして、その経験をお話ししますが、雨の宮古墳群で一番難しかったのは葺石をどういうふうに見せるかという課題でした。先ほど言いましたように188mの山のてっぺんに造られておりまして、周りはもう急斜面にすぐかかっていくという所でありますので、そのまま石を見せるのか、それとも一枚薄皮饅頭のように土で本物の石を覆って、偽物の石を見せるのかという、そういう議論になりました。それで実際にその急斜面の所に土を盛ると、とてつもなく大きな盛土ができてしまうということもありましたし、実際の物が訴える力というものもあるということで、今雨の宮1号墳の葺石は古墳時代に葺かれた本物の葺石が見られるようになっております。それでも千数百年の間にかなりの石が落ちておりますので、その落ちた部分だけを補修するという形で整備を致しました。

せっかく大きなお金をかけて整備しましたので沢山の方に見ていただきたいと思っておりまして、それで町の方でもかなりご苦労されているようですけど、古墳のすぐ近くに町の事業で公園が造られておりまして、古墳と公園を合わせて、町のイベントを開くとか、仕掛けを色々考えておられるようです。また、出土品を展示するガイダンス施設を、古墳のすぐ下に造りまして、オープン1年で5千人の方が入られたということです。5千人というのはあんまり大きな数字ではないと思うんですが、実はその188mの山のてっぺんに行くためには、バスはございません。道も細い林道を通って行かなくては、今は舗装されましたけれども前は砂利道で、本当にこの奥に何があるんだろうという、そういう寂しい所を通っていかなければならなくて、しかも駐車場に着いてからは10分程度階段を上がっていただくと、そういう立地条件の非常に悪い所であります。そういう所を差し引いて考えていただければ5千人というのはまずまずかなあと。ただ何回も来ていただくためにはいろんな目新しいこともしなきゃいけないでしょうし、これからは多分5千人というのが頂点でだんだん下がっていく可能性が多分にありますので、その辺の町の人達の盛り上げ方というのが1つ課題になってくるのかなと思

います。それで日本全国で、隣の吉村さんの所でもそういう整備をされてますけれども、いろんな所で古墳の整備、活用というのをされております。それで成功している所もあれば、正直言って失敗かなという所も沢山ありますので、布尾山古墳はこれからですから、後発の強みで皆の良い所だけ取ってきて真似をしながら、なるべく氷見の特徴を出すような整備を、氷見でしかこういう整備は無いんだという、そういう整備をじっくり考えて焦らずにやっていただければと思います。

**宇野**　どうもありがとうございます。貴重な話をありがとうございました。吉村さんお願い致します。

**吉村**　ナガレ山古墳の場合は、ナガレ山古墳がたどった歴史と言うか、一部壊されたということがありましたので、できるだけ壊されなかった部分には手を付けないでおこうというのが基本にありました。ですから1つの古墳で整備の仕方が主軸左右で非対称という、ちょっと変わった整備になったわけなんです。また、その整備する契機が結局周りに公園ができるということでしたので、自分達の町にある史跡を何とかしたいということがこちらのような形ではありませんでしたので、なかなかどういうふうに皆さんに関心を持っていただくかというところが苦心したところです。それで1つの試みとして、実際に埴輪を皆で作って並べてみたらどうかということで、最初の目的は違ったんですけれども、実際に作ってみようということになりました。名前の入った、自分の作った埴輪があるということで、作った方には非常に愛着を持ってもらうことができました。それで特に奈良県ではそうなんですけれども、あって当たり前みたいなところがどうもありまして、元々の地元の方にはなかなか興味を持ってもらえないということがありましたので、そういうところで苦心しました。できてからは自分の作った埴輪があるということで、友達とか家族を連れて来て見せていただけるとか、あとは毎年小学校6年生で古墳時代の勉強をしますと、必ず町内の小学生はナガレ山古墳に連れて行って、そこで私なんかが説明して、まず古墳という物はどういう物かを知ってもらうということだけでもいいんじゃないかということで今やっております。ですからあまり片肘張ったような形で、整備する目的とか、あと活用、絶対こういうふうにしないといけないということをあまり硬く考えないで、まずこういう物があるということを知っていただけるということが大事なのかなということを感じております。そういうことでこちらの方の整備が上手くいきましたら、いろんなことを希望しながら話を終わらせてもらいます。

**宇野**　ありがとうございます。今あのように言われていますが、整備に際してはものすごく苦労なさっている中から、氷見に役立つことを選んで話していただいたに違いないと考えております。本当にありがとうございました。今頂いたご意見は、氷見の個性をどのように出していくのか、どのように周りの方々に参加していただくのか、また整備をすればその後どのように活用していくのかというような、色々な将来的な課題を肩にあまり力を入れずに息長くやれというご指摘であったと思います。どうも本当に色々ありがとうございました。

議論したいとおもっておりました課題は大体以上で終了致しました。最後に今日のパネルに参加いただきました先生方から柳田布尾山古墳に対してどのような印象を持たれておるのかということを一言ずつお願いできますでしょうか。中屋さんからお願い致します。

**中屋**　見た感想を一言で言いますと、能登の雨の宮、あれだけの副葬品を出して葺石があってという古墳を調査した当人から申しますと、107.5m、負けたと思っております。それで今日午前中に現地の方へ行きまして、皆さんの現地説明会の様子なんかを少し見ましたら、周りから吉村さんと2人取り囲まれまして質問攻めにあいました。

皆さんの熱意がすごく伝わってまいりましたので、きっといい方向へ向いて行くだろうと期待しております。

**宇野**　ありがとうございます。吉村さんお願い致します。

**吉村**　まず最初の感想ですが、よくあの状態でよく残っていたなあということですね。本当にきれいな姿で残っておりまして、確かに大きさだけでいきますと、私どもの奈良県にある古墳と比べると、奈良県では中くらいの古墳ということになるんでしょうけれども、ただ歴史的な評価というのは全く違いまして、例えばナガレ山古墳なんかは同じくらいの大きさですけども、ナガレ山はただの古墳というような感じなんですが、やはり布尾山古墳の場合はこちらの地域で一番という、全くそういう評価がされる古墳ですので羨ましいなという限りですね。それとやはり皆さんがこの古墳に寄せられる思いというのが、ナガレ山とは全く違うということで、これも本当に羨ましいという、そればかりが印象に残ったような状態です。

宇野　ありがとうございます。それでは今日一番いい目にあわれた和田さん、一言ご感想をお願いいたします。

**和田**　はい。布尾山が発見されて初めて見せていただいた時には本当に驚きました。こんなきれいな形で残っているのかというふうな感じがしました。先ほど話されましたように大きさの大小の問題をしましたら、仁徳天皇にかなう古墳は日本に無くなってしまうわけですけども、その歴史的価値ですね。それから特にそこの場で住んでおられる方にとっての歴史的な価値というものは計り知れないものがあろうかというふうに思いますので、まあ、あえて私がこんなことを言う必要は無いかもしれませんが、氷見の、地元の歴史を見直す契機にですね、この機会をしていただければというふうに思います。そういった中で布尾山を残していただいて、何とかあそこを活動の拠点にして、多くの人達がそこを活用できるような整備の方法を今後考えていただければ非常にありがたいなというふうに思いますし、先ほどの第1部でも言いましたけども、布尾山が1つだけぽこっとですね立派なものがあるわけじゃなくて、必ずそれを支えた歴史がですね、人々が実際にいるわけでありますので、そういったものを今後の氷見の考古学の1つの課題に掲げて、ぜひともそこら辺を明らかにしていっていただくことが、それがまた日本全体の歴史を考える上でも非常に重要なものになってくるだろうと思いますので、今後大いに両面で頑張っていただければというふうに思います。

**宇野**　どうもありがとうございます。これから進んでいくべき方向が見えてきているのではないかと思います。最後に会場の方々から、ぜひこの機会に、これだけの先生が集まっていただける機会はそれほどございませんので、疑問をぶつけてみたいと思われる方がございましたら数名お受けしたいと思います。

**市民**　ちょっとお尋ねします。何かで読んだのかと思いますが、大きな古墳だと言うと、例えば天皇の御陵なんかの場合には生前から造ってしまっておいて埋葬するばっかりになっていたというようなことを何かで読んだような気がしますが、そういうことはありますか、どうですか。

**宇野**　これは寿陵という問題で、古墳の築造やお祭りに関連して大変大事な問題ですが、和田さんの方から一言いただけますか。

**和田**　はい。今宇野さんがおっしゃいましたように、生きている間に首長の方が造るようなお墓を我々は寿陵、寿（コトブキ）の陵（ミササギ）というふうに呼んでおりますけども、これは元々中国の皇帝がですね、例えば秦の始皇帝なんかは皇帝に即位すると共に自分のお墓を造り出したというふうな形になっています。だから日本で造られています古墳もですね、寿陵かどうかというのは非常に大きくって、誰のためにこの古墳を造っているのかということの出発点の所からですね、自分のためになのか、あるいは死んでしまった一代前の首長のためなのかという所から違ってきます。それで仁徳天皇なんかは先ほど自分の墓を造る場所を探しにですね百舌鳥へ出かけて行ったというようなことを言いましたけども仁徳天皇とかですね、あるいは筑紫の君の磐井さんですね、とか何人かは生前から古墳を造っている人がいますので、それは古事記や日本書紀を見るとそうなっていますので、実際の古墳もどうかということが問題です。先ほどから話に出てますような、古墳を造っていく途中で墓穴を造っていくような構築墓坑と言っているようなものでしたら、あれは一連の流れ、古墳を造っていくのと遺体を埋葬して古墳を完成させていくというのは一連の流れですので、前もって造っておくわけにはいかないんですね。それで、それに対しまして同じ時期のもっと典型的なものの1つはですね、古墳を完全な形に造っておいてから、あらためててっぺんから墓穴を掘って造るやつがありまして、この場合だったら手順上は生きている間に造っておいても十分できるんですね。ただそれを確定的に証明する所がないんですが、その可能性も今十分ある。そういうふうな段階だと思います。ただし日本は皇帝だけじゃなくて、あっちこっちの首長からいっぱいの人が寿陵を生きている間に造っていた可能性も出てまいりましたけども。

**宇野**　明快に答えていただいたと思います。古墳築造をする技術を探ることから、今質問をいただきましたような大切なことも考えることができるようになってまいります。もう1、2名の方、お願いします。

**市民**　大変勉強になりました。ありがとうございました。あの先ほど粘土層、粘土で囲ってあるという、最後に見せていただいたんですけど、岩石と土で段などを造る場合に、中に水が通らないように粘土層を造っておった。傾けて造っているわけですけれども、もし水が浸透しないようにそういう粘土で囲ってあったということであれば驚きですけれども、どの古墳にもそういう粘土を使ってあったのか、それとですね、資料の1ページ目の右の下の平面図ですけれど、棺の形が、古墳の形は対称になっていますけれども、この棺の線は平行になっていなかったのかどうか。先ほど石川県の雨の宮古墳ですかね、何か棺の方向が方形に対して直角になっていたように思うんですけど、この方形の方向についても、西向きとかあるいは東向きとかそういった関係があったのか無かったのかですね、おしえてください。

**宇野**　私の方から申し上げます。棺の方向につきましては古墳の向きを意識して造る場合と、それから南北とか東西、これは地域によって違うんですけど、そういう方位に合わせて造るという場合とがございます。特にこの頃は頭を北向きに向けるというものが出てくる時代でございますので、それが中国の考え方と関係するという説が非常に有力でございます。それから粘土を使っているということは、多分お棺を水から護るということなんですが、多分水から護るということはそういう機能的なもの以外にも、その中のものを非常に大切に護るということの表現です。古墳時代ずっとそういうやり方をやっているわけではないのですが、古墳時代が始まる頃は本当に遺体を大切に護るため様々な工夫をしています。その中に粘土でお棺をくるむという行為もあり、広く行われた方法とご理解願えたらと思います。よろしいでしょうか。

**司会**　それではもう一方お願いします。

**市民**　失礼します。先ほど大野さんの方から方向性ですね、あれが例えば二上山の方を向いているという、まあそういう説ということをお聞きしたんですけども、私どうしてもあの上に上がりまして海の方を見ますと、どうも海に対して平行に建っていると。それでもう1つ陸路、中央の方からですね、富山湾の方に向かってくるとどうも古墳の方に道があったんじゃないかと。ということは向こうから、中央から来る陸路、海路の方から見せる古墳ではなかったのかというような観点が浮かびました。その辺はどうでしょう。

**宇野**　はい。色々な見方がありますが、大野さんの方から一言お願いします。

**大野**　あの、二上山を見ましたが、まずあの古墳は今おっしゃったように、平野側の方に側面、一番大きい107mという側面が分かるように造っているというのはまず第一に一番特徴がある所だと思います。それにプラスとして、前に立つと後ろに二上山が見えるというのも何か意味があるんじゃないかという、まあ両方ともですね、意味があるということだと思います。

**市民**　ありがとうございました。

**司会**　もう一人、最後にこの方までということにさせて下さい。

**市民**　こういう大きい古墳がですね、幾つもあるということは、これは明らかにこの一帯にですね古代に勢力、海に生きる海人族と言いますか、そういう大きな、巨大な一族がおったということの証拠にあるいはなるのかなということをお聞きしたいと思います。お願いします。

**宇野**　私の方から申し上げます。西井さんをはじめとする富山考古学会の調査によって、富山県の西部は非常に沢山の古墳が造られているということが分かってきております。その本当にごく一端を取り上げているわけです。本当に小矢部川の左岸を中心として沢山の古墳があります。さらに能登半島の東側、西側という、加越能という地域全体が、日本海に対してどのようにアクセスしていたのかという大きな問題をはらんでおります。今言われましたように大きな勢力があったことは確かです。その勢力の全体像を、富山県の古墳文化から見ていくという視点と、より広く隣接する地域の全体で考えていく視点でこれからも研究をどんどん進めていくことによって今のご質問に答えられると思います。

司会　すみません。じゃあ、実はこちらの方にあてようとして向こうの方がお立ちになってしまったもんですから、申し訳ありまでんがこちらの方で最後ということにさせて下さい。

**市民**　簡単なことですが、先ほど地山という言葉がずいぶん出されましたが、自然の山をそのまま古墳に使った例がありますでしょうか。

**宇野**　地山というのは考古学の用語で分かりづらいと思います。ほんの僅かしか盛り土をせずに、従来にあっ

た場所の形を整えて造っている古墳は小矢部市の谷内16号墳を始めとして、結構ございます。いろんな造り方がある中の1つのタイプとして、位置付けていく必要があるんではないかと思います。

**司会**　どうもありがとうございました。それでは最後に宇野さんの方からまとめで一言いただいて。

**宇野**　今日はパネルに参加いただきました先生方、それから会場にお集まりいただきました方々のご協力を得まして良い議論ができたと思っております。私の力の足りなさから論じ残したことは、今後様々な形で補っていきたいと思います。昨日、岐阜県の濃尾平野でやはり古墳のシンポジウムがありまして、前方後円墳と前方後方墳の出現期の問題を考えるということで参加いたしました。そこにも非常に大勢の方が集まられまして、地元の古墳に対する認識を深められています。それと同時に、太平洋側でも、日本海域で最近柳田布尾山古墳を始めとして、顕著な発見が相次いでいるということに非常に注目しております。今どのような研究状況ですかと聞かれて、明日シンポジウムをするのですと答えると、ああぜひ行きたいなという方が大勢おられました。日本の古墳文化は非常に奥深いものがあり、柳田布尾山古墳はじめ、地域に根ざした研究を積み重ねることによって、その全体の研究が深まっていくものだと思います。今日のこのパネルディスカッションにありました議論を、ぜひこれからの出発点にしていただきたいと思います。柳田布尾山古墳の調査はこれからも続きます。それからまたこれをどのように活用していくかということで様々な問題に直面していくと思います。さらに氷見を始め、富山県下の、色々な所には古墳以外にも本当に重要な遺跡が数多くあります。それぞれこれから研究を深めていきたいと思いますが、それは本当に多くの方々の協力無くしてはあり得ません。今日本当に多数お集まりいただきました方々に、今後もご支援をいただけるという方向になりましたら、今回の会の意義が大変大きなものになると思います。そういうことを願いまして、本当に今日はどうも皆様ありがとうございましたと申し上げます。これにてディスカッションを終わらせていただくことに致します。

**司会**　どうもありがとうございました。今日はとやまときめき歴史フォーラム、柳田布尾山古墳、そのロマンと不思議におこしいただきまして長時間どうもありがとうございました。

# 柳田布尾山古墳

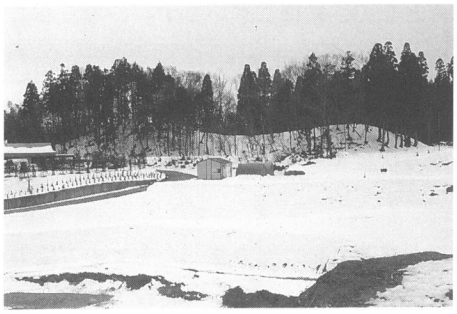


写真　1

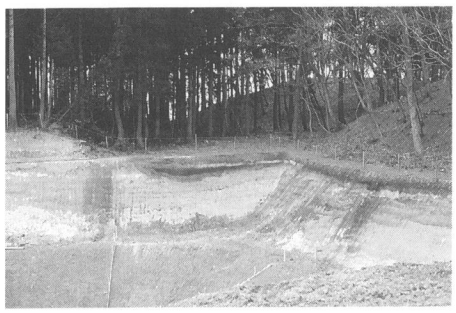


写真　2

写真　3

写真　4

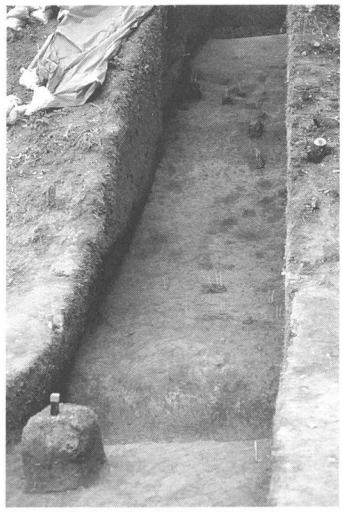


写真　5

写真　6

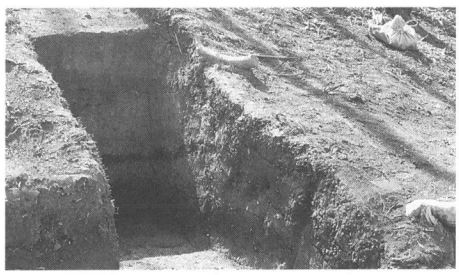


写真　7

写真　8

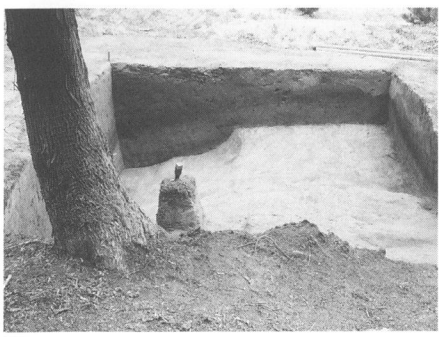


写真　9

写真　10

## 雨の宮古墳群

写真　11

写真　12

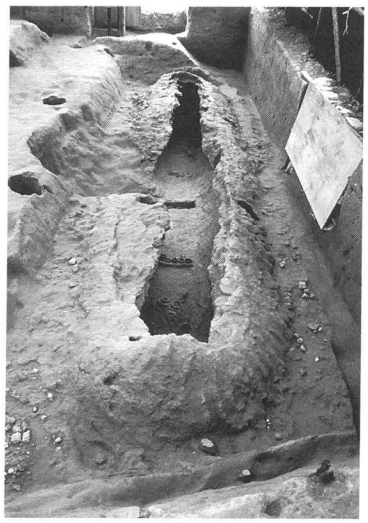


写真　13

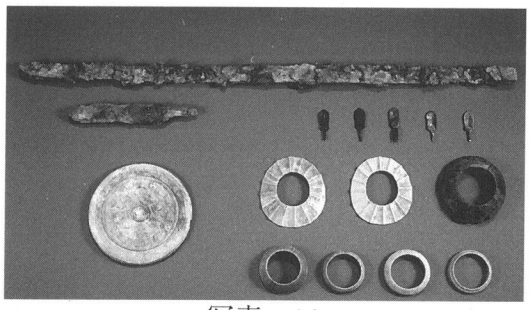


写真　14

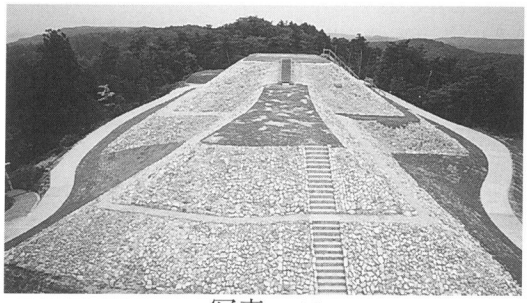


写真　15

## ナガレ山古墳

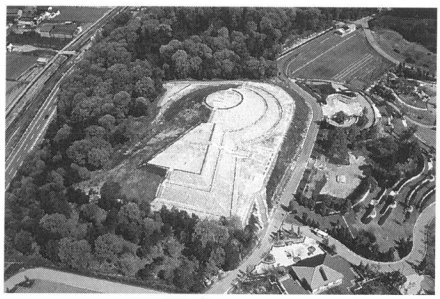


写真　16

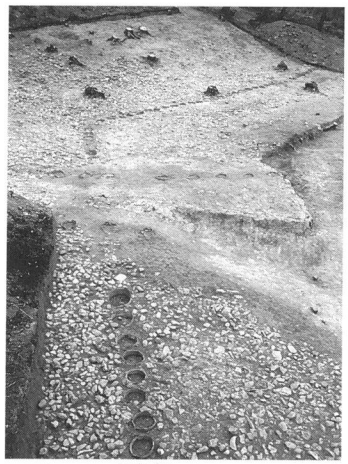


写真　17

写真　18

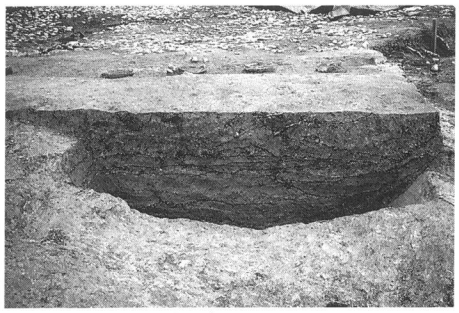


写真　19

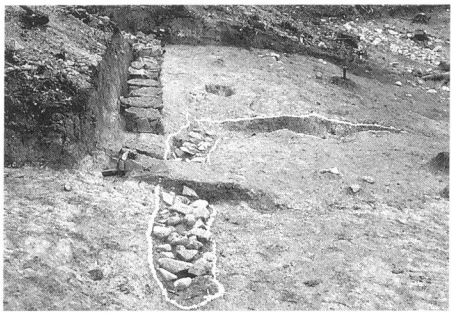


写真　20

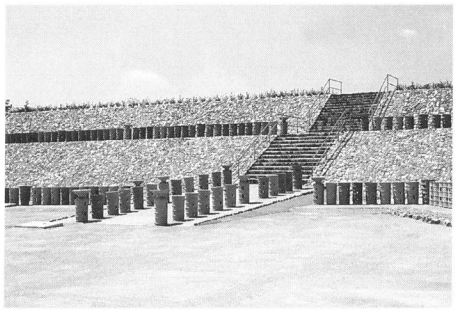


写真　21

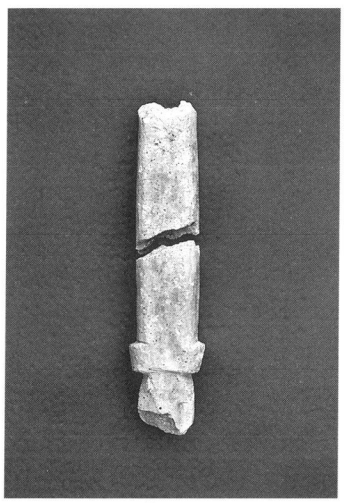


写真　22

写真　23

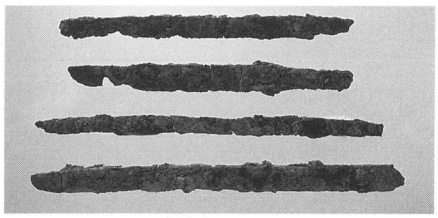


写真　24

写真　19

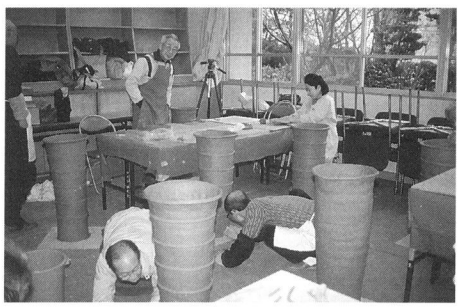


写真　26

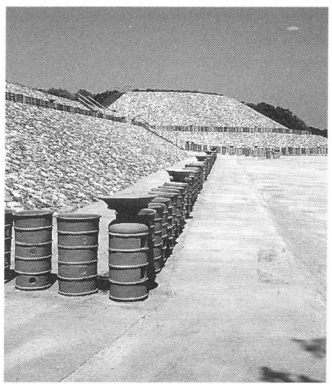
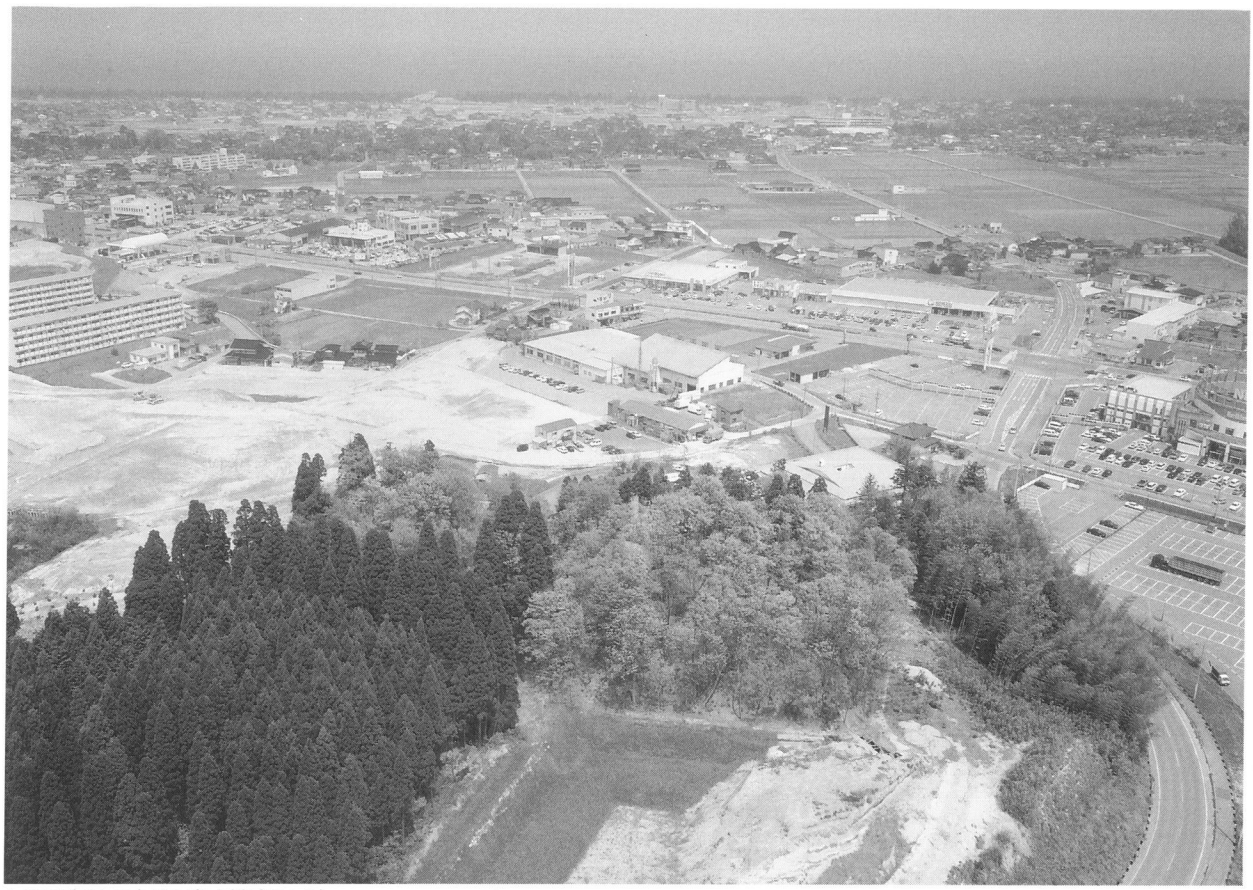
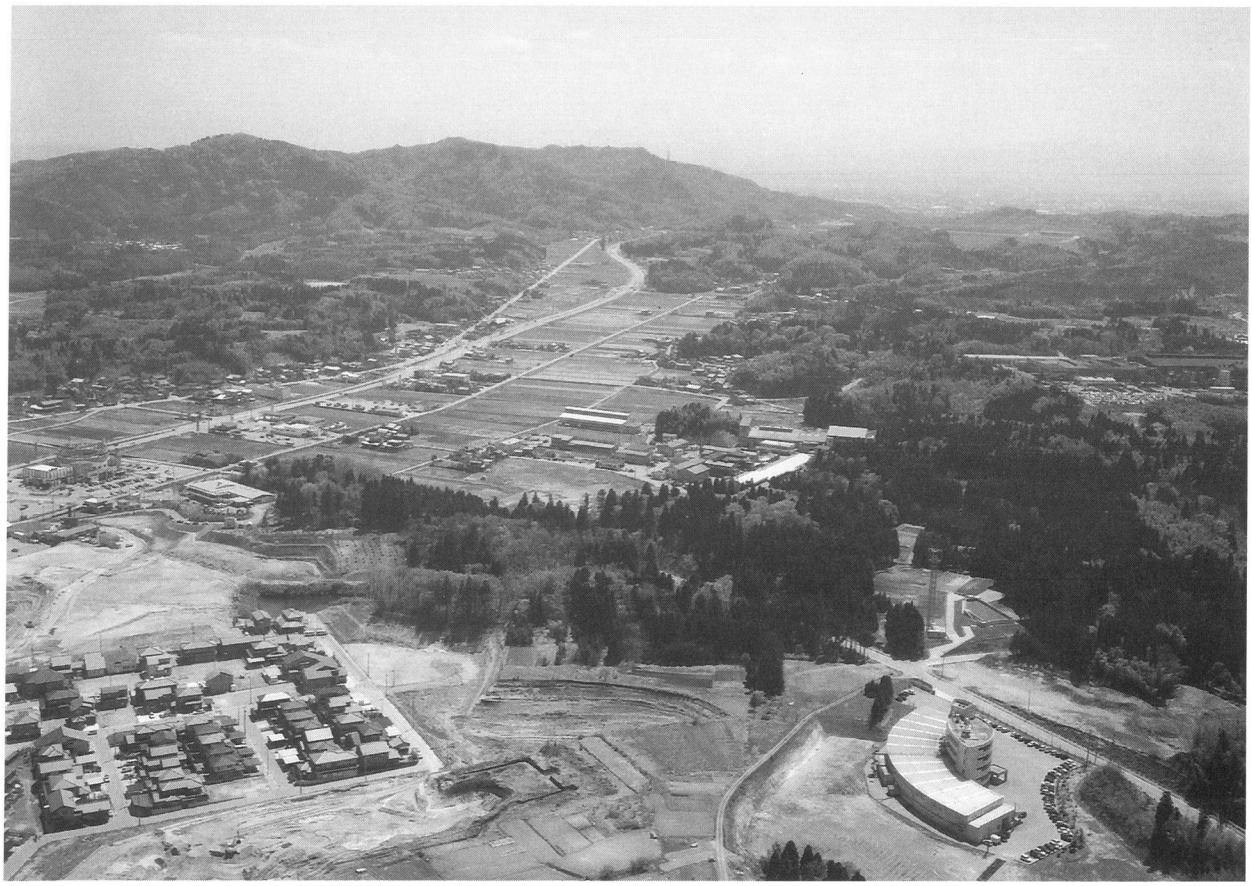


写真　27

# 図　　版



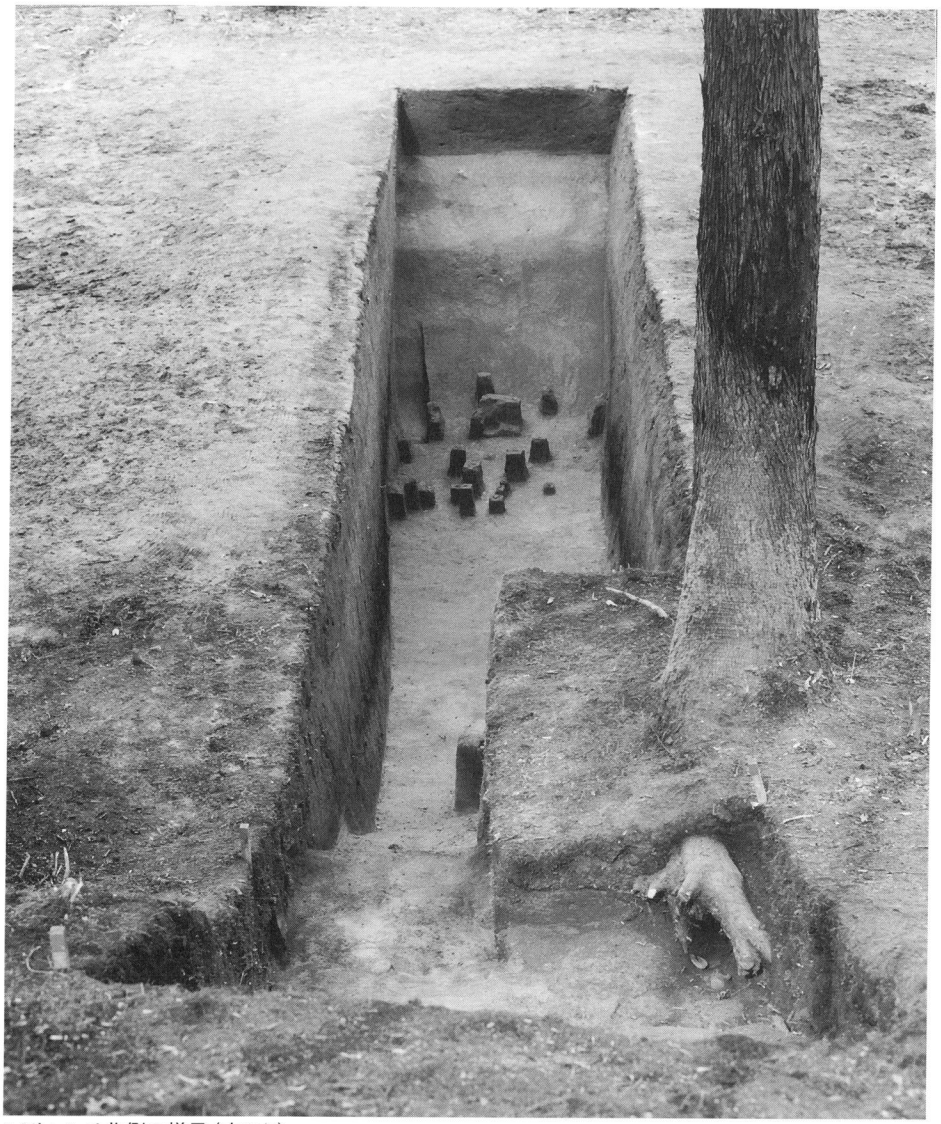
1.柳田布尾山古墳と富山湾（西から）



2.柳田布尾山古墳と二上山（北から）

1.Nトレンチ南側の様子（北から）

2.Nトレンチの土層（北から）

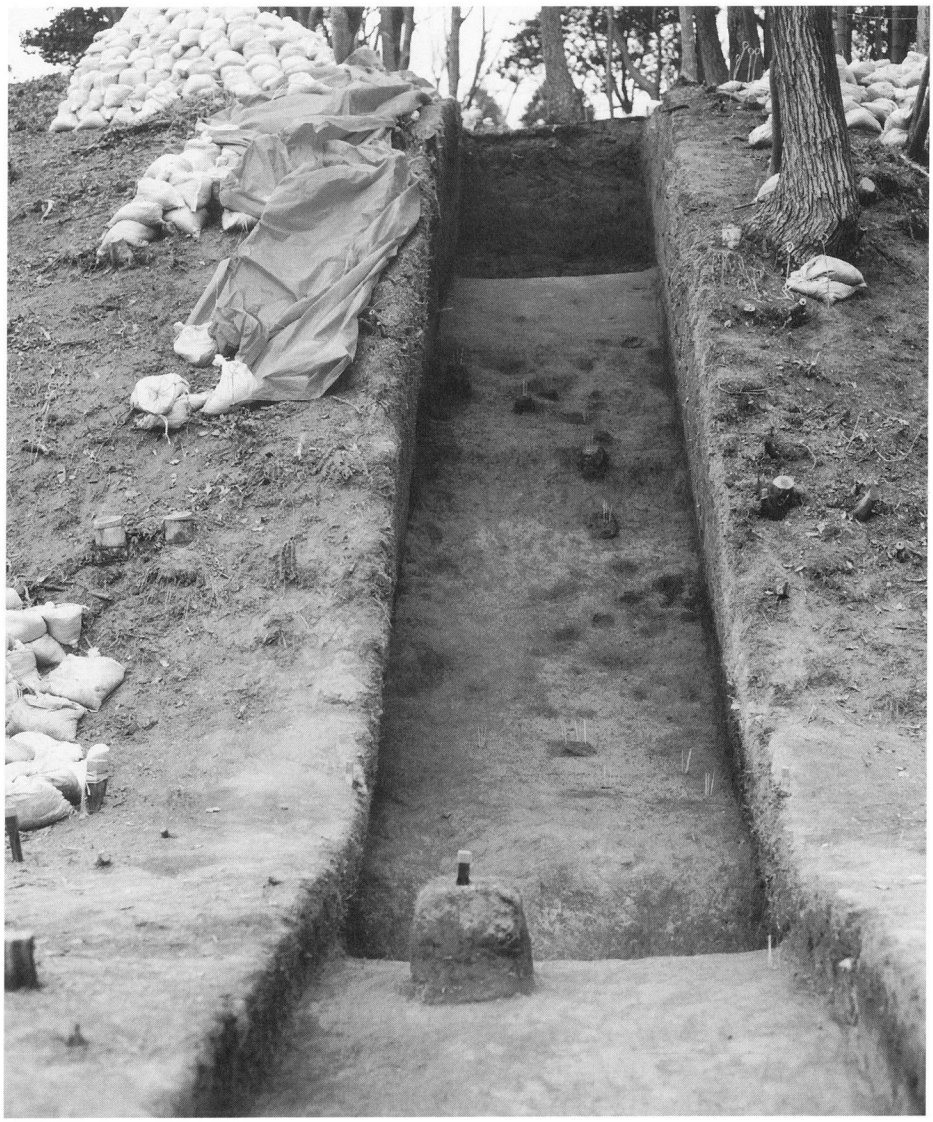


1.Nトレンチ北側の様子（南から）

2.Nトレンチ北側の遺物出土状況（東から）

1.Nトレンチ墳丘盛土の様子（北から）

1.Nトレンチ墳丘盛土の様子（北から）



1.Sトレンチ北側の様子（南から）

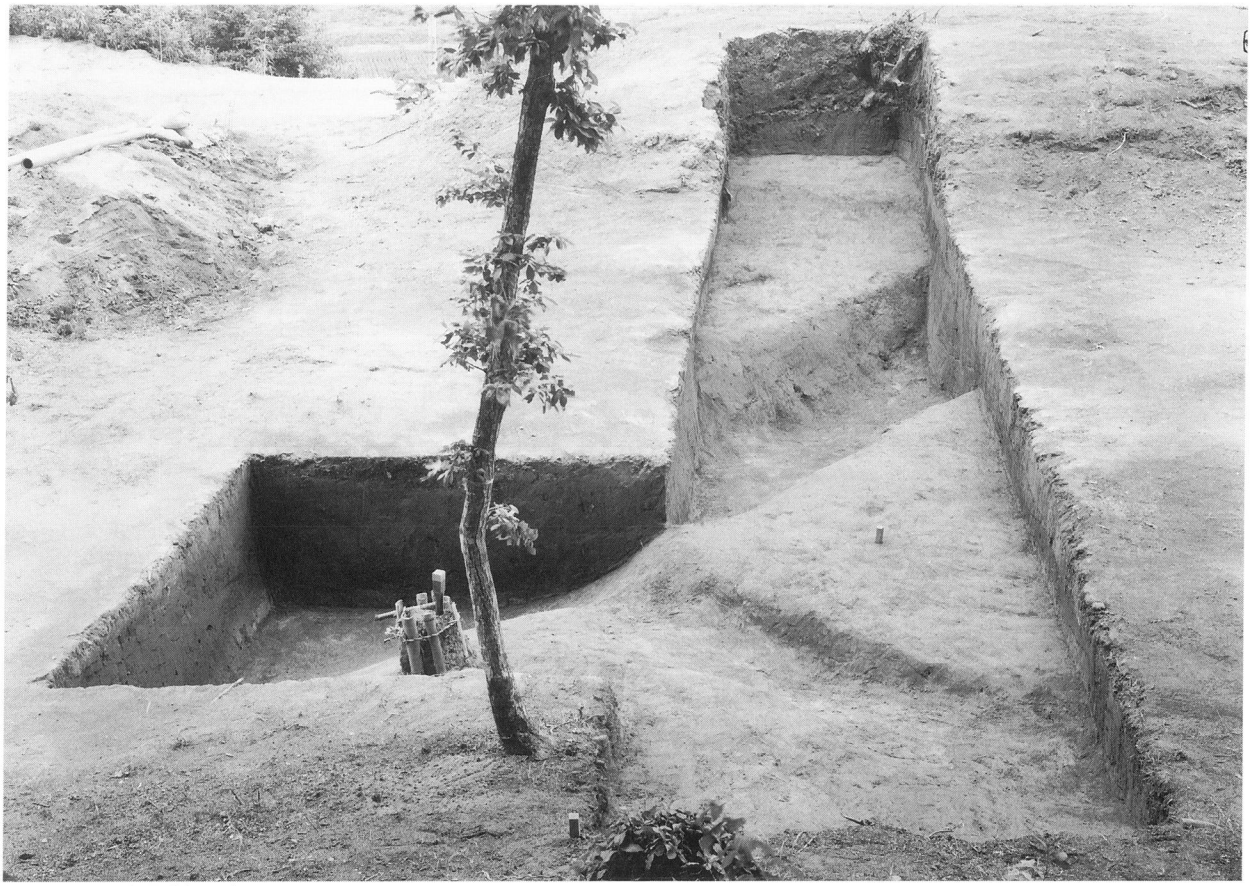
2.Sトレンチ北端の様子（南から）

1.Sトレンチ穴の土層（南から）

2.Sトレンチ溝の土層（西から）

1.Sトレンチ南側の様子（北から）

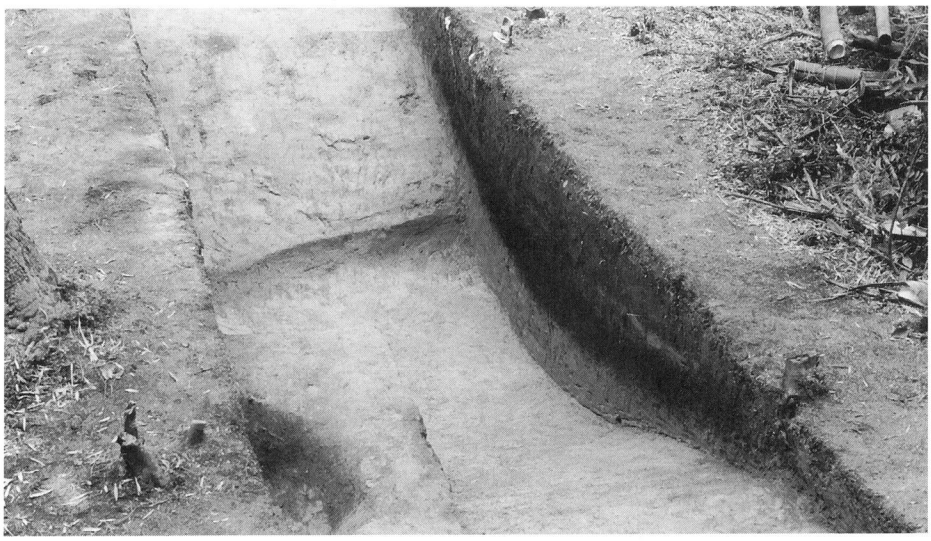
2.Sトレンチ南側落ち込みの遺物出土状況（北から）



1.SWトレンチ全景（東から）

2.SWトレンチ全景（西から）

1.SEトレンチ全景（南から）



2.SEトレンチ周濠の様子（南から）

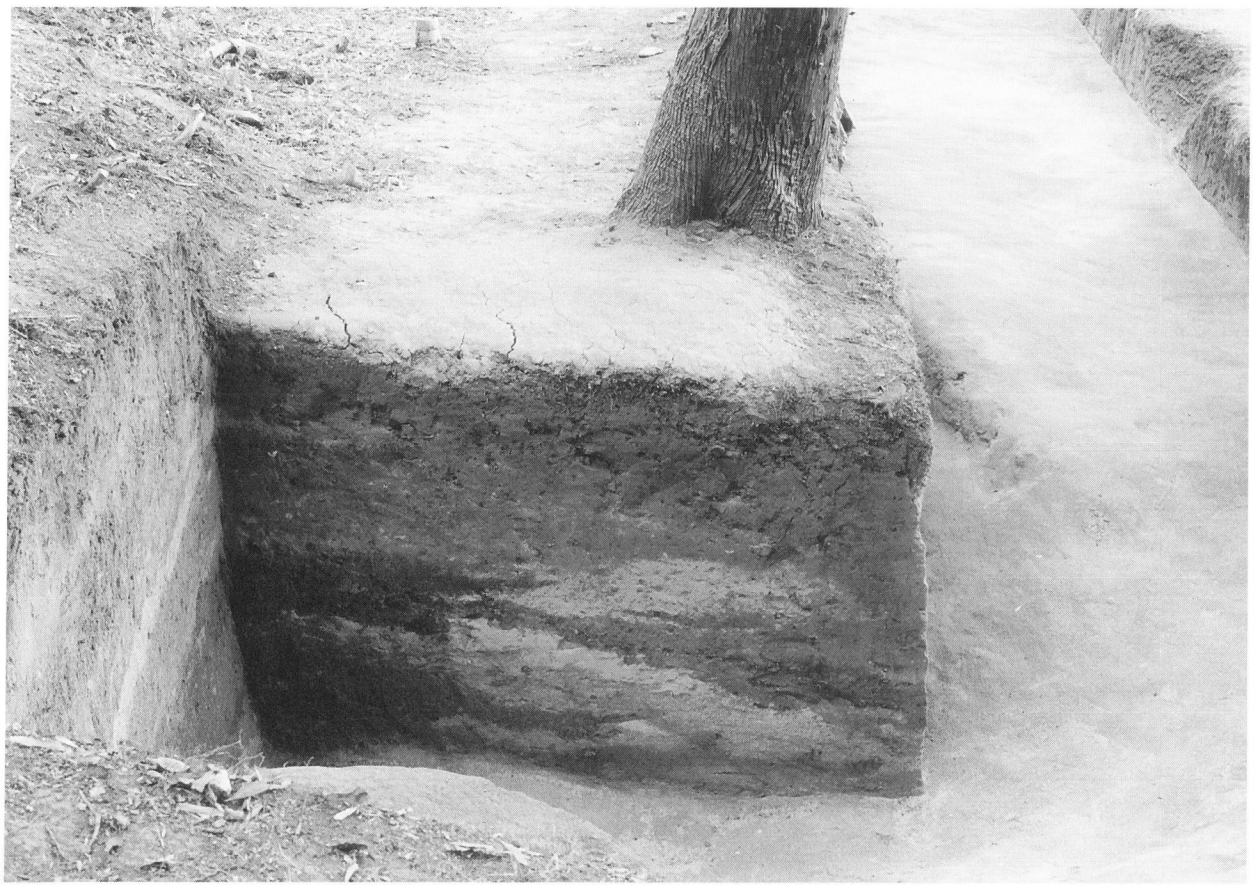
1.SEトレンチ全景（北から）

2.SEトレンチ2号墳丘下の落ち込み（東から）

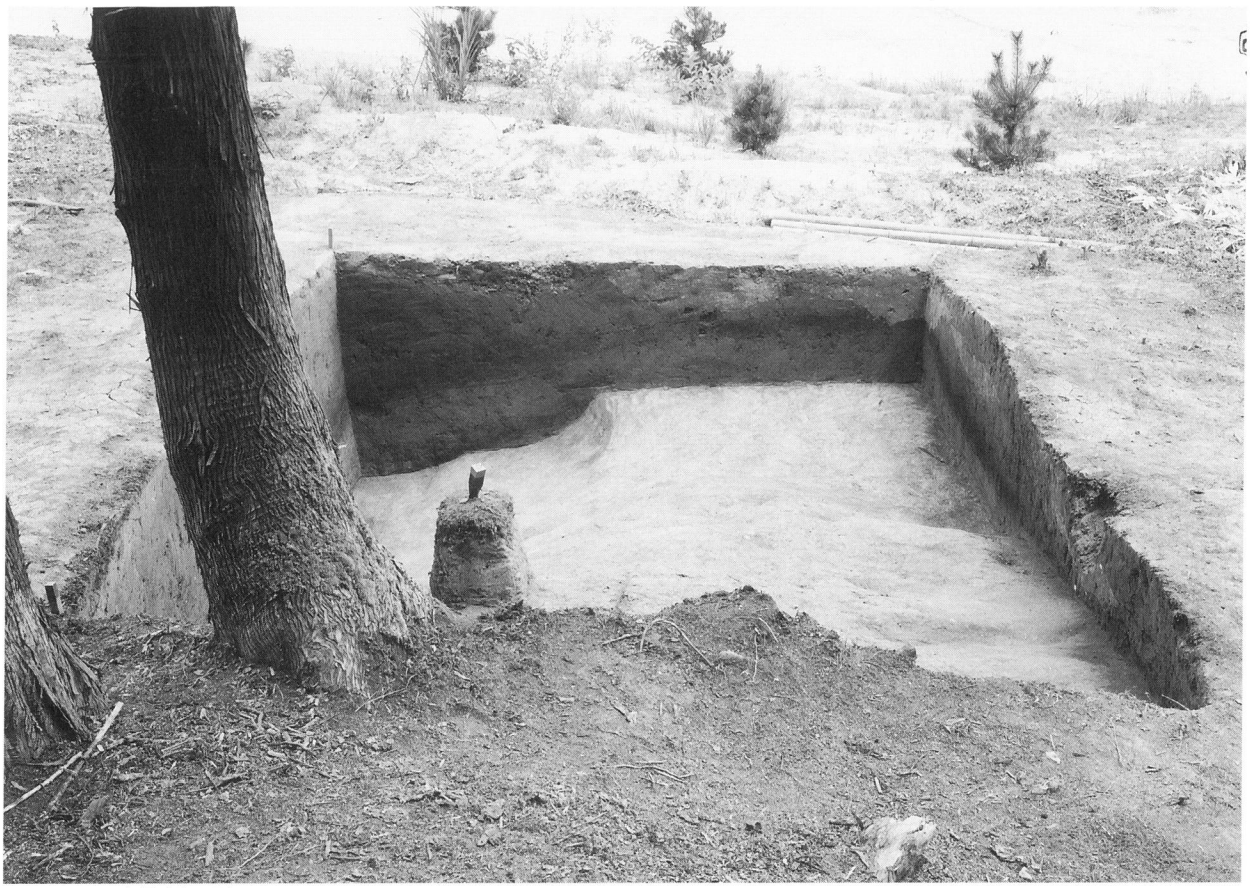
1.Eトレンチ・E2トレンチ全景（北から）

2.Eトレンチくびれ部の様子（東から）

1.Eトレンチくびれ部の土層（東から）



2.Eトレンチくびれ部の土層（南から）



1.NEトレンチ全景（南から）

2.NEトレンチと前方部コーナー（東から）

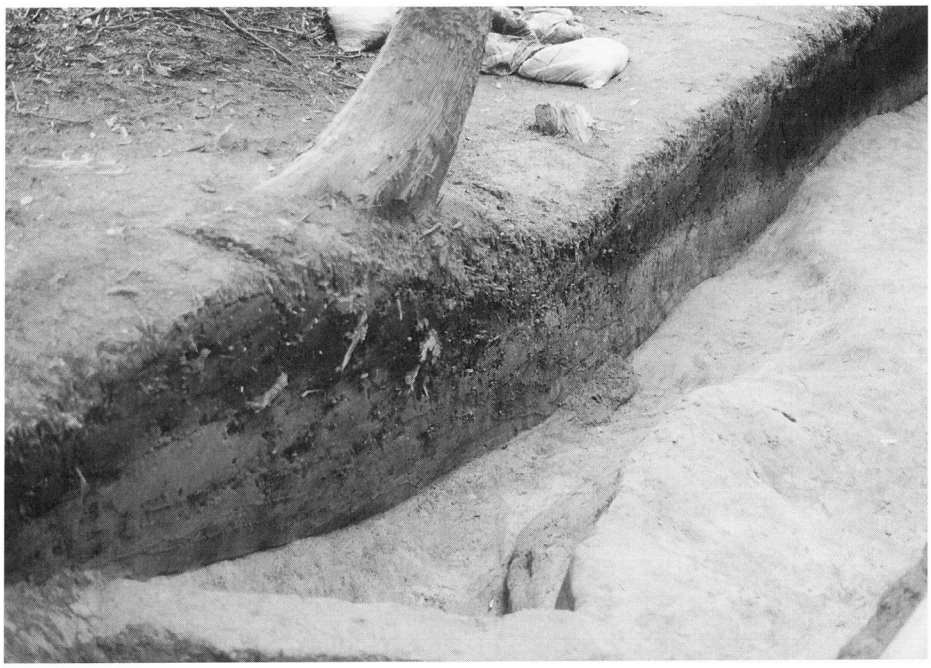
1.E3トレンチ全景（東から）

2.E3トレンチ全景（西から）

1.NWトレンチ全景（西から）

2.NWトレンチ全景（東から）

1.Wトレンチ全景（東から）



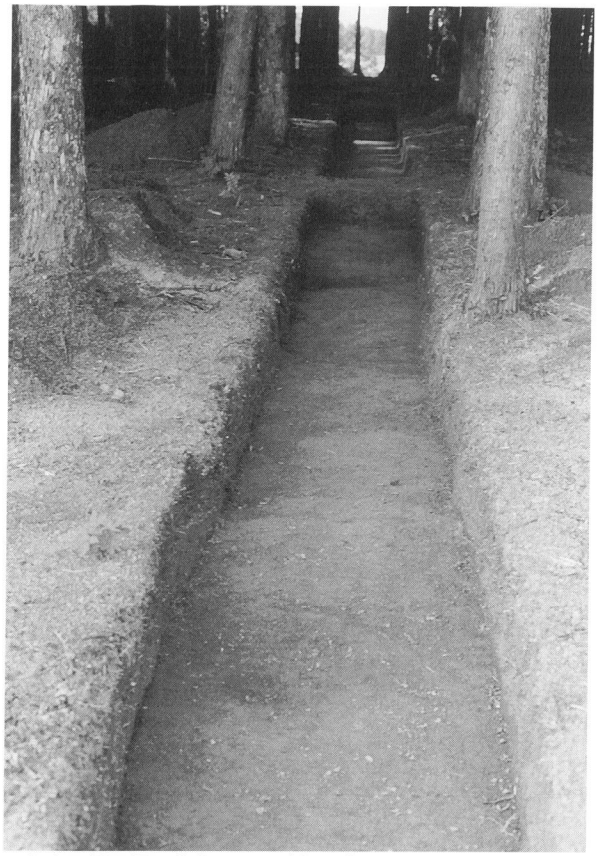
2.Wトレンチ落ち込み（北から）

1.Wトレンチ全景（西から）

2.Wトレンチくびれ部の土層（南から）

1.後方部トレンチ全景（北から）

2.後方部西側周濠の様子（南から）



1.古墳西側平坦面南北トレンチ（南から）

2.古墳西側平坦面南北トレンチ（南から）

3.古墳西側平坦面東西トレンチ（東から）

4.古墳西側平坦面東西トレンチ（東から）

1.作業風景（SWトレンチ）

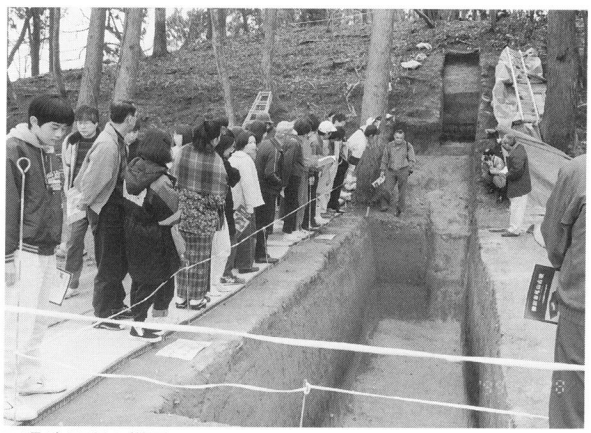
2.作業風景（後方部西側）

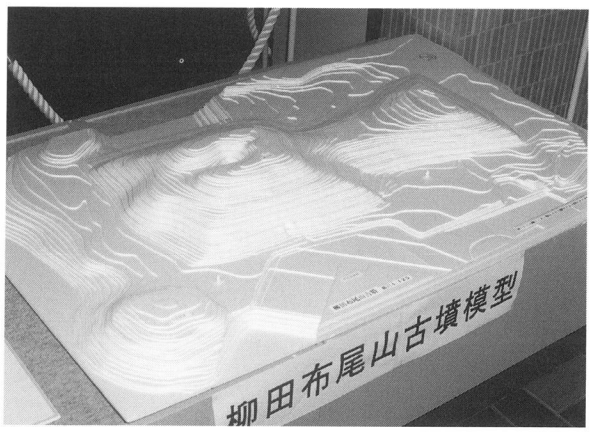
3.ふるい作業（Sトレンチ）

4.博物館実習生の屋外実習

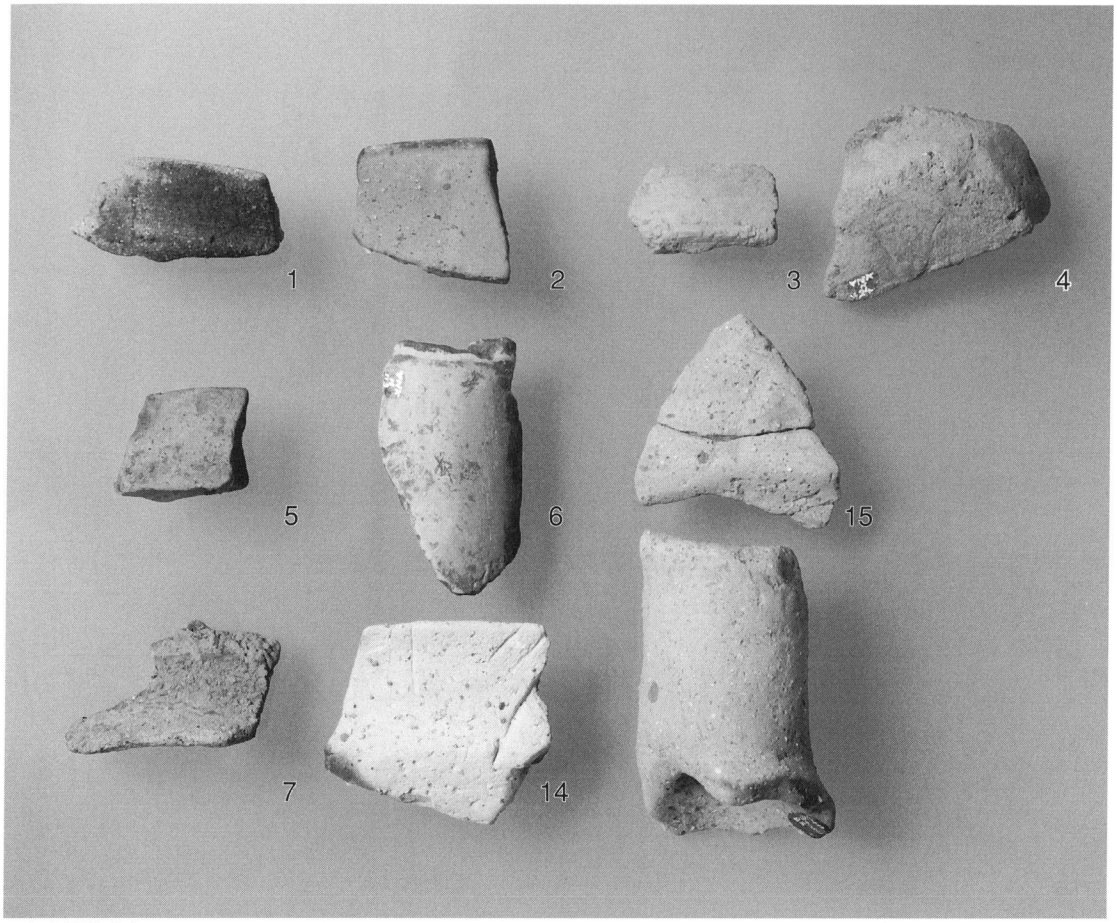
5.保存等検討委員による視察風景

6.現地公開の様子

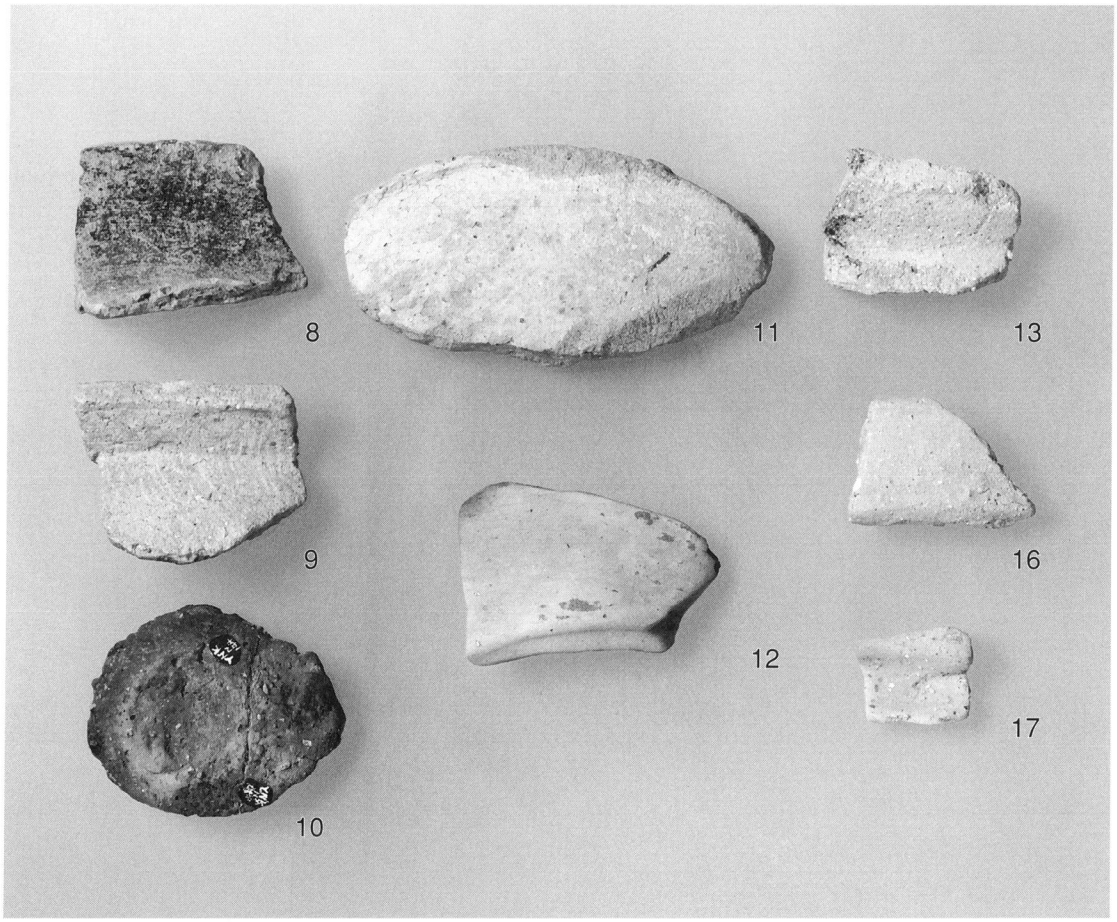

7.現地公開の様子



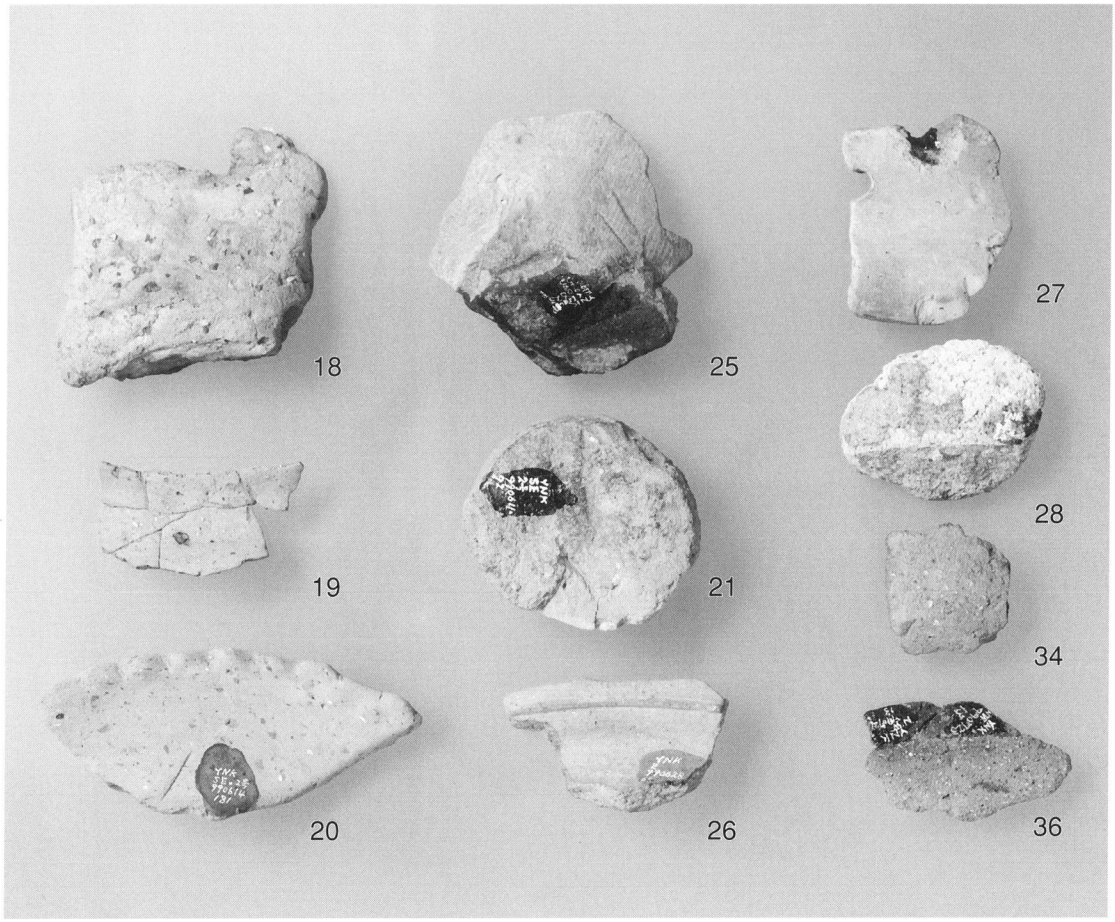
8.西井龍儀氏製作の古墳模型



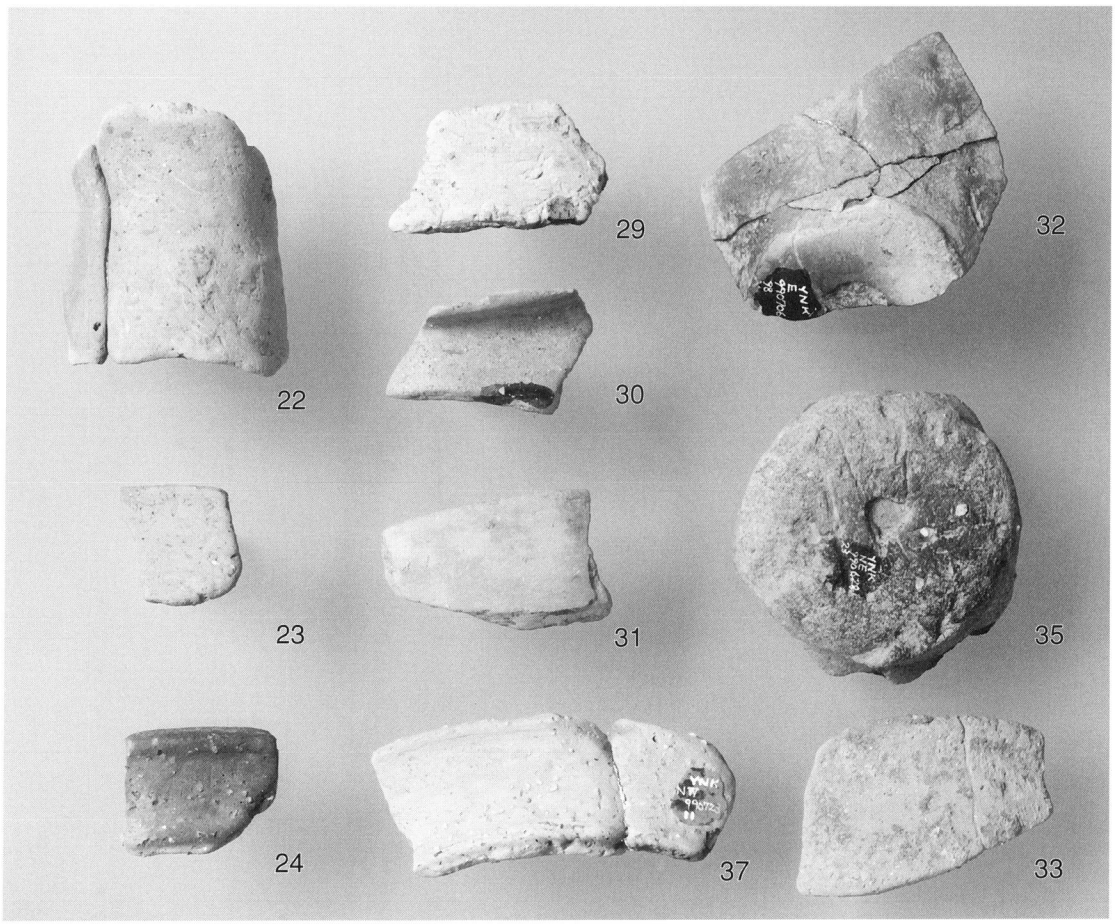

1.出土遺物（1）



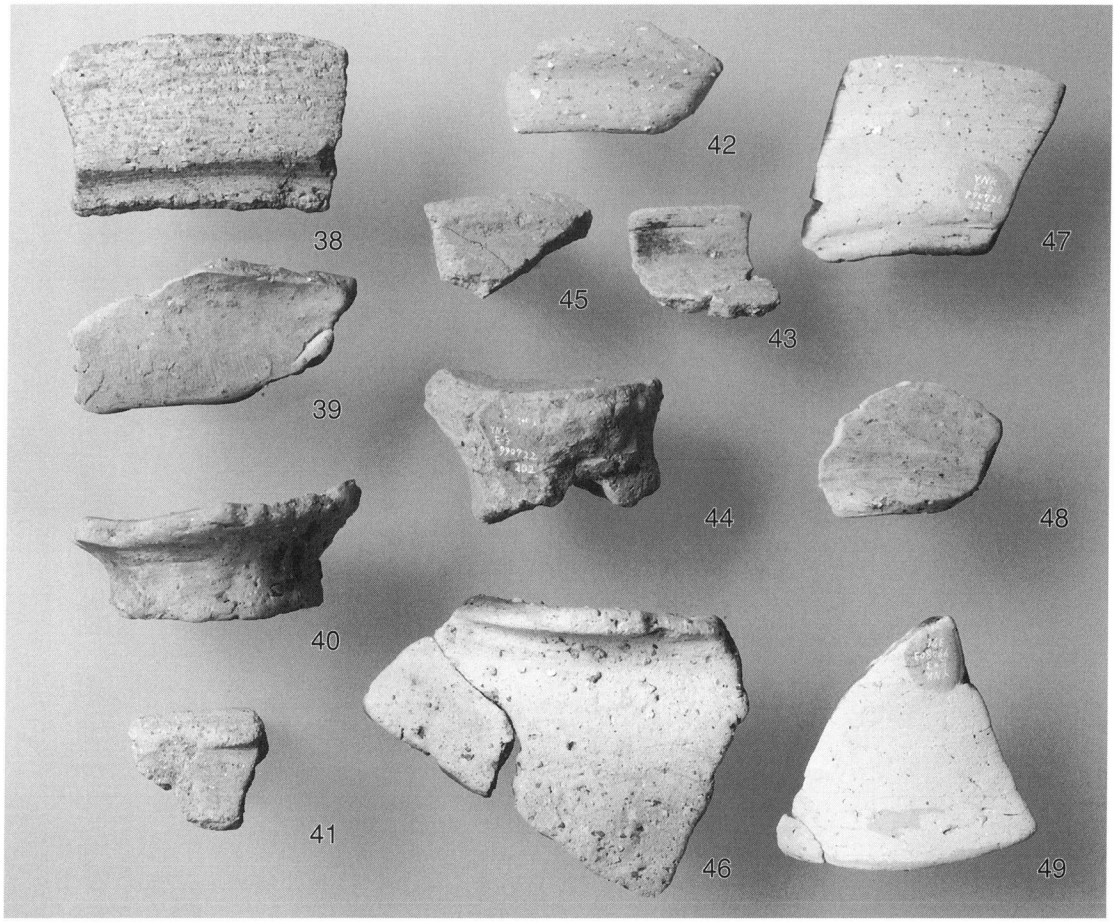

2.出土遺物（2）



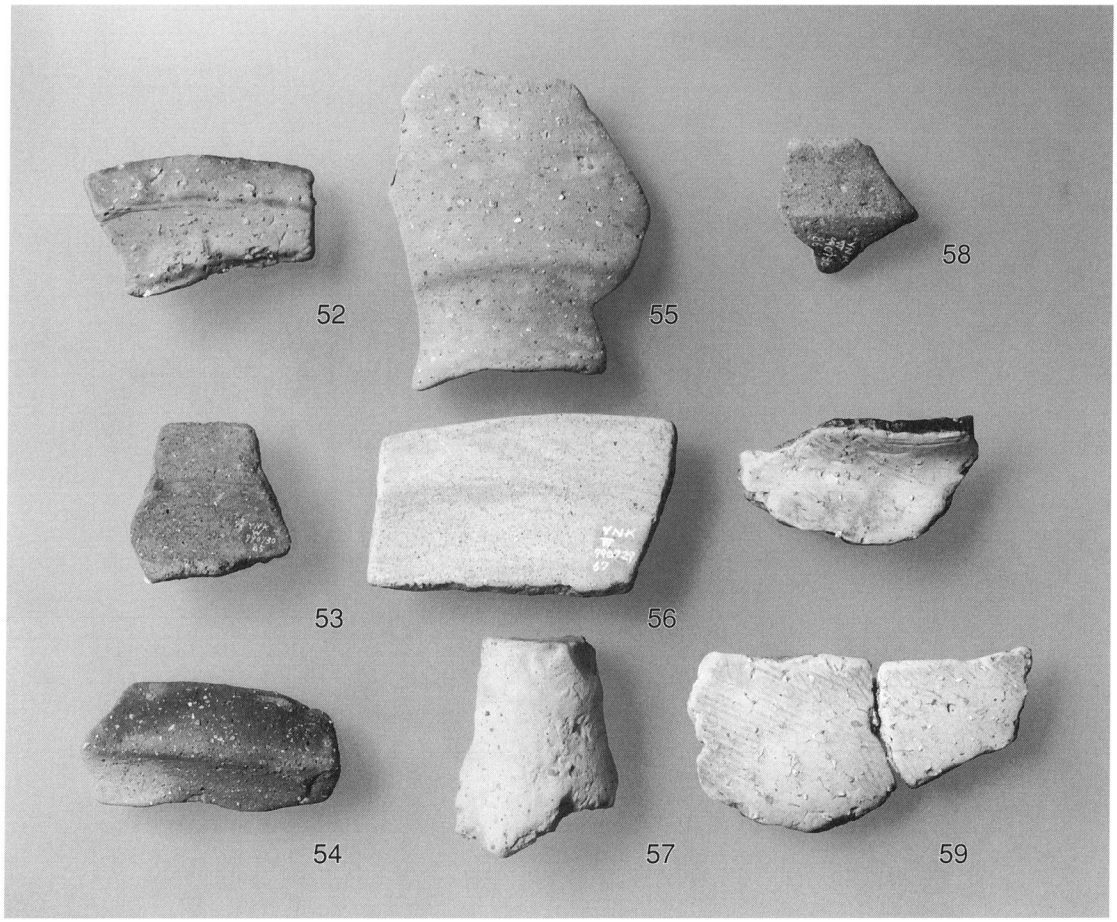

1.出土遺物（3）



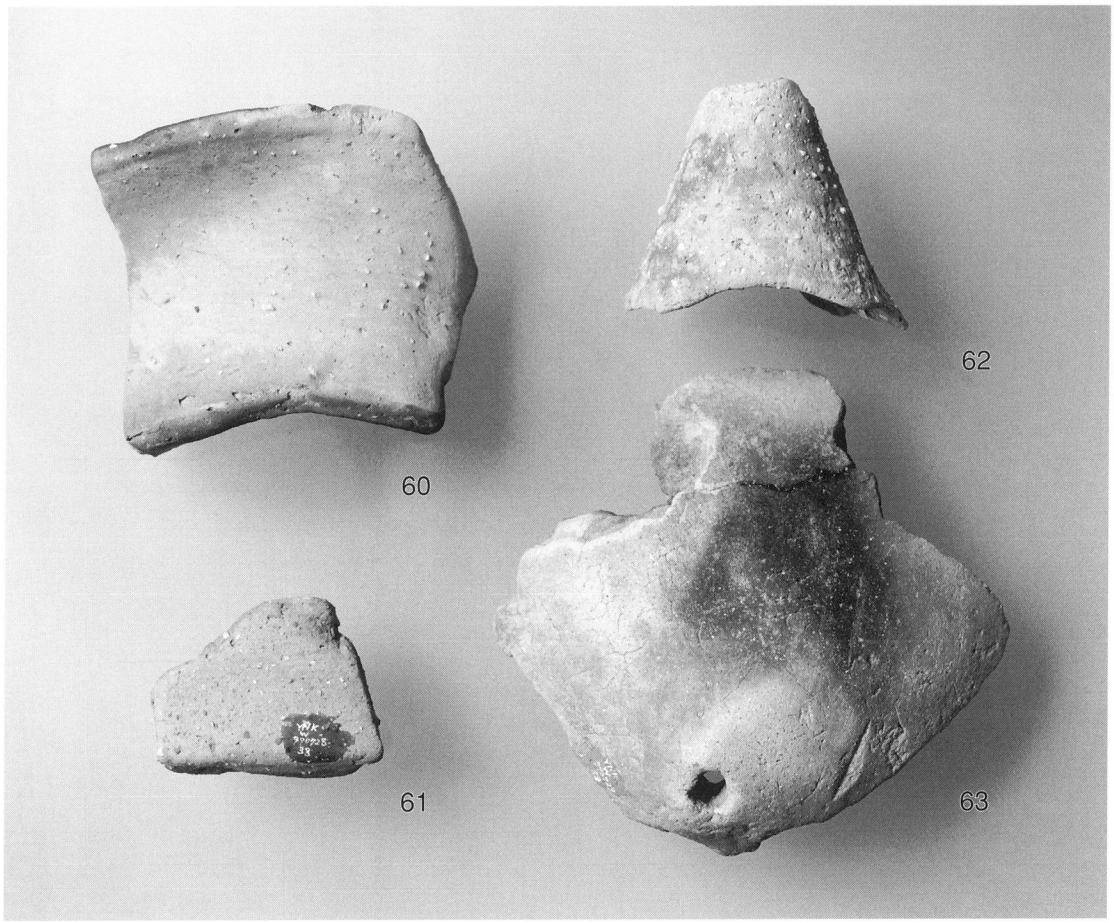

2.出土遺物（4）



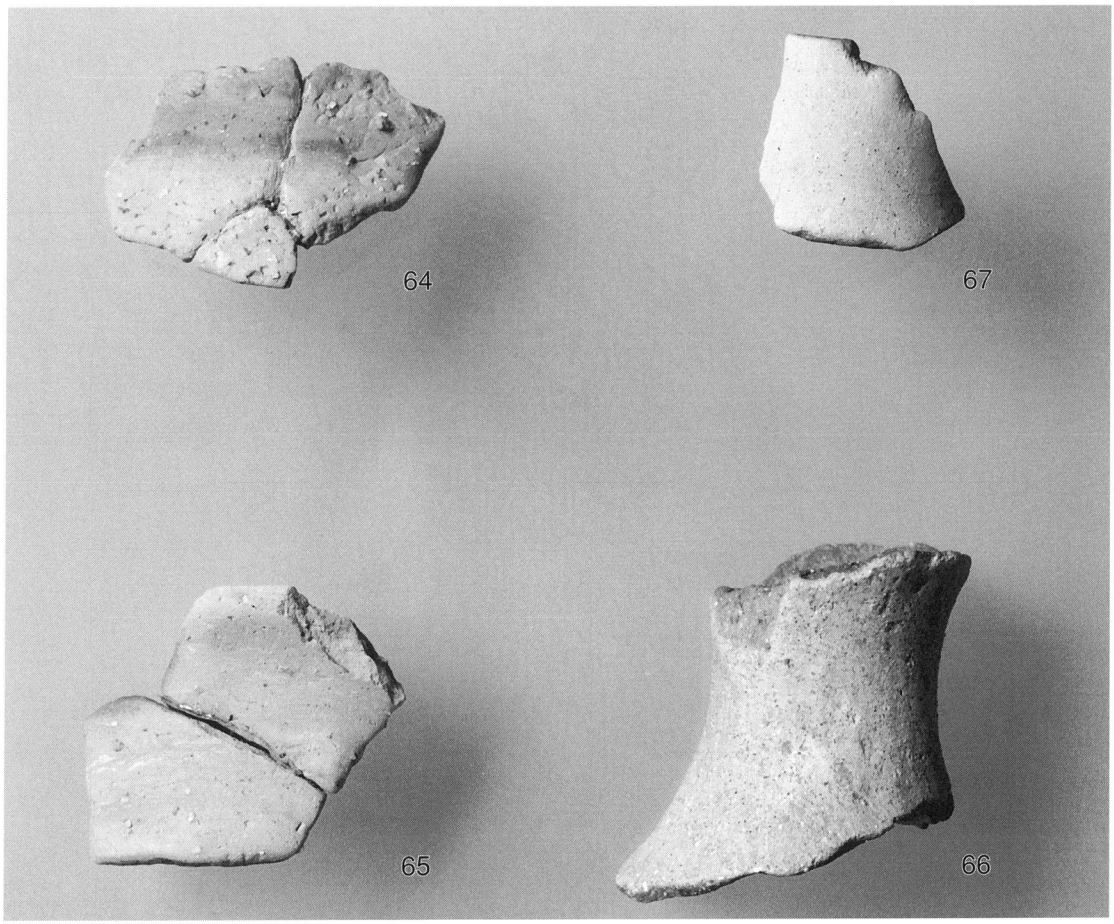

1.出土遺物(5)



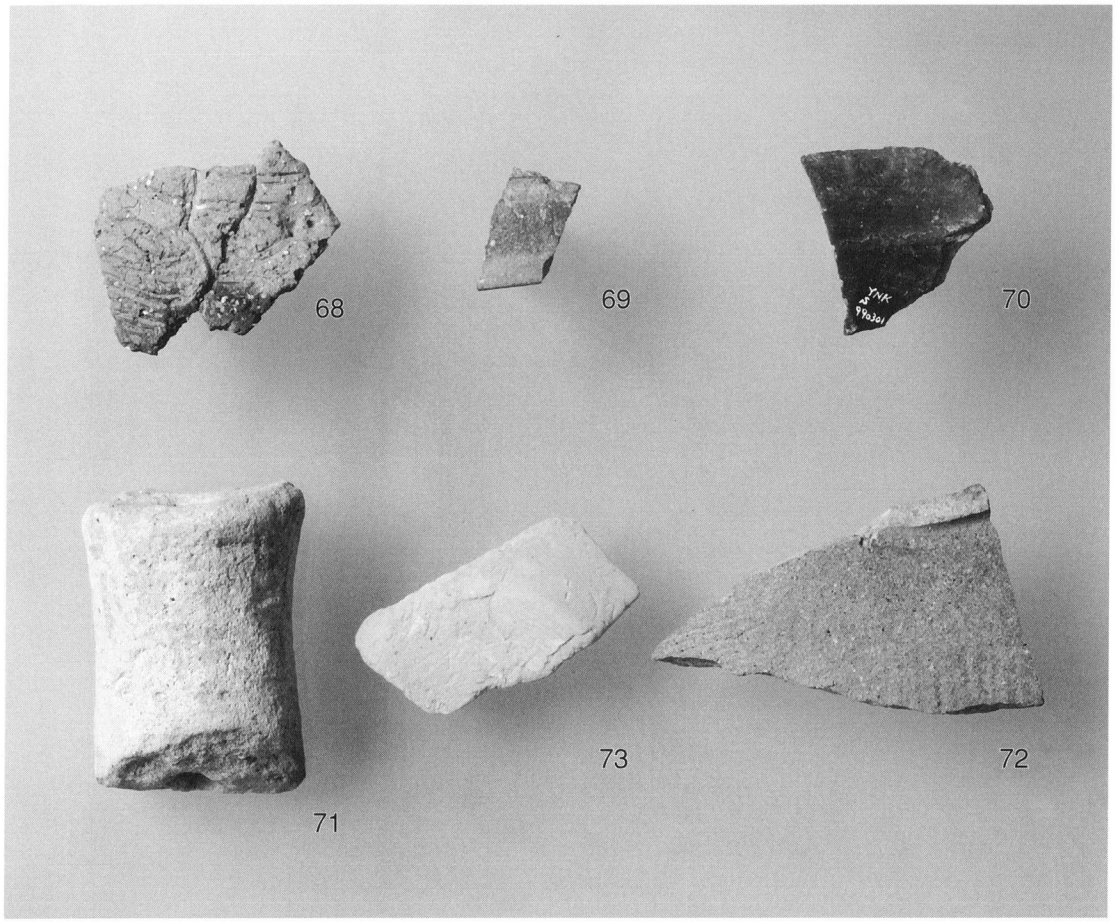

2.出土遺物(6)



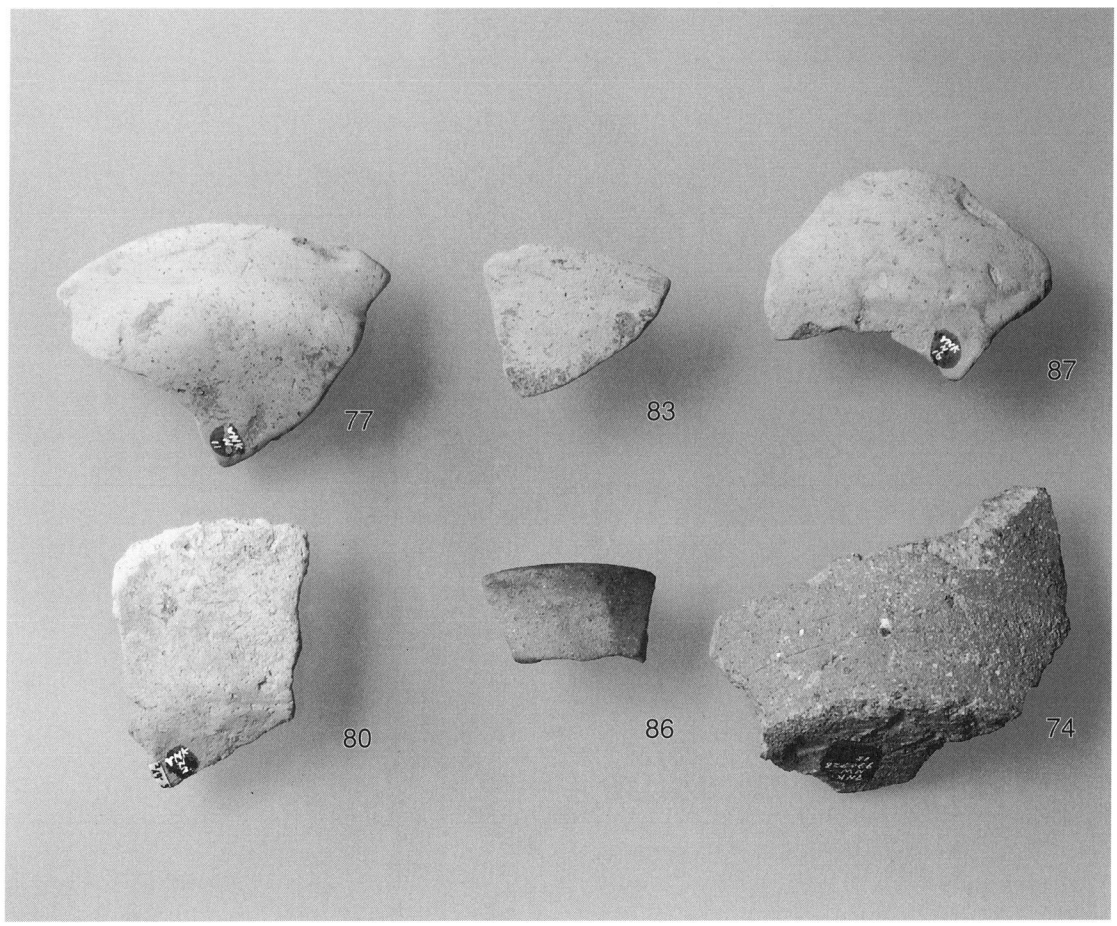

1.出土遺物（7）



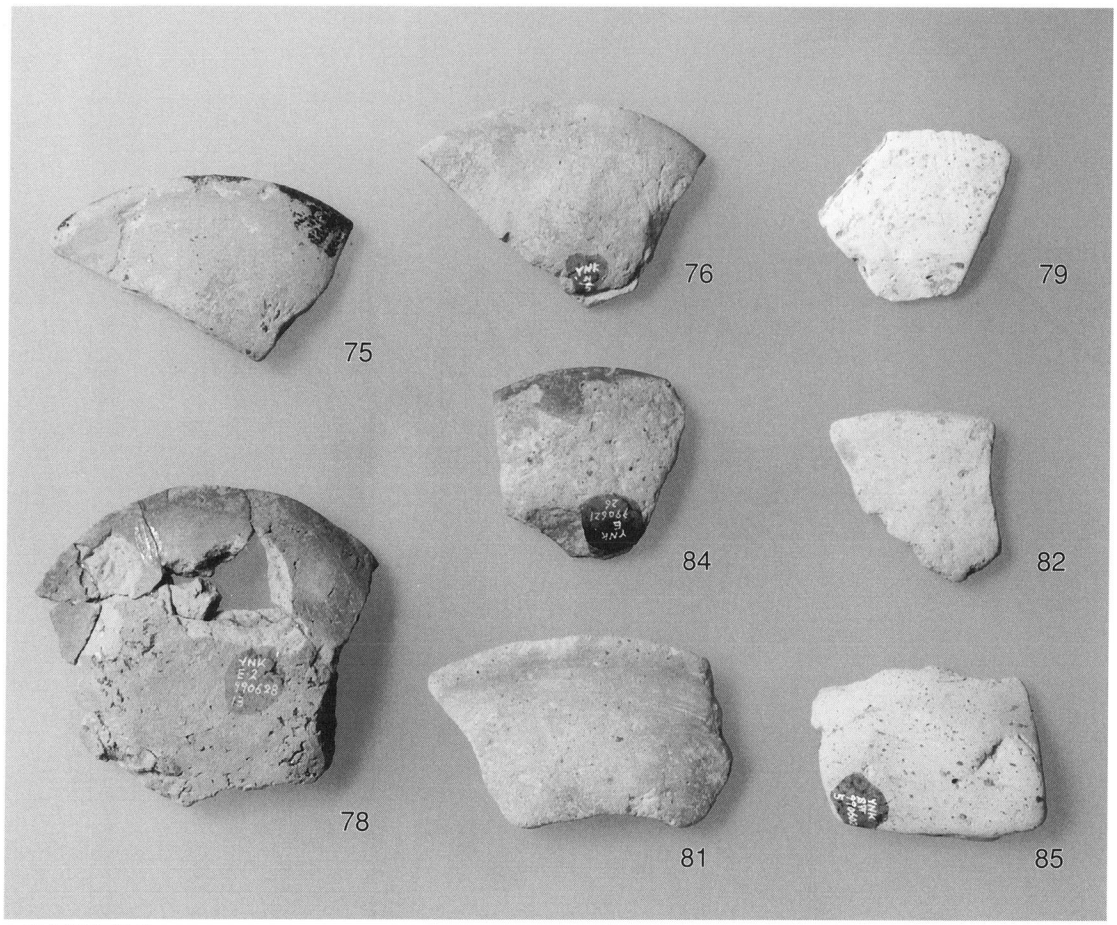

2.出土遺物（8）



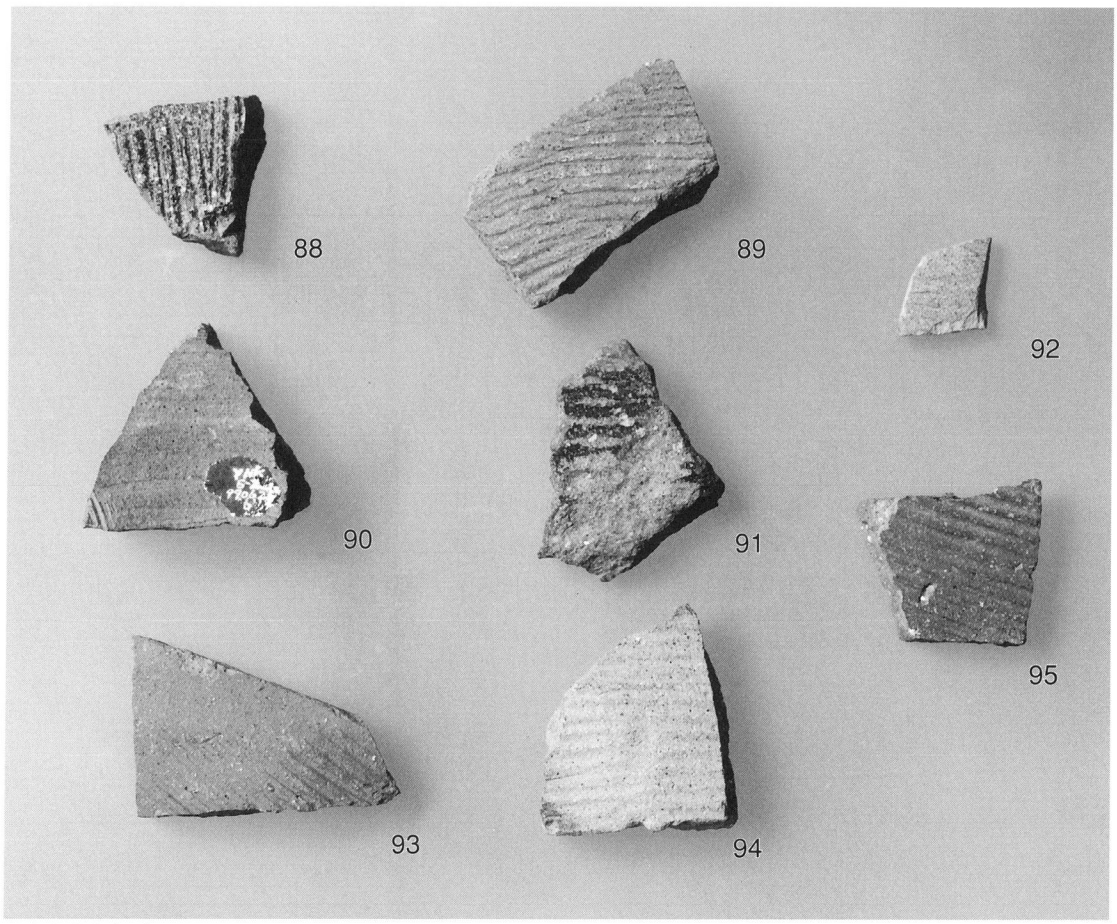

1.出土遺物（9）



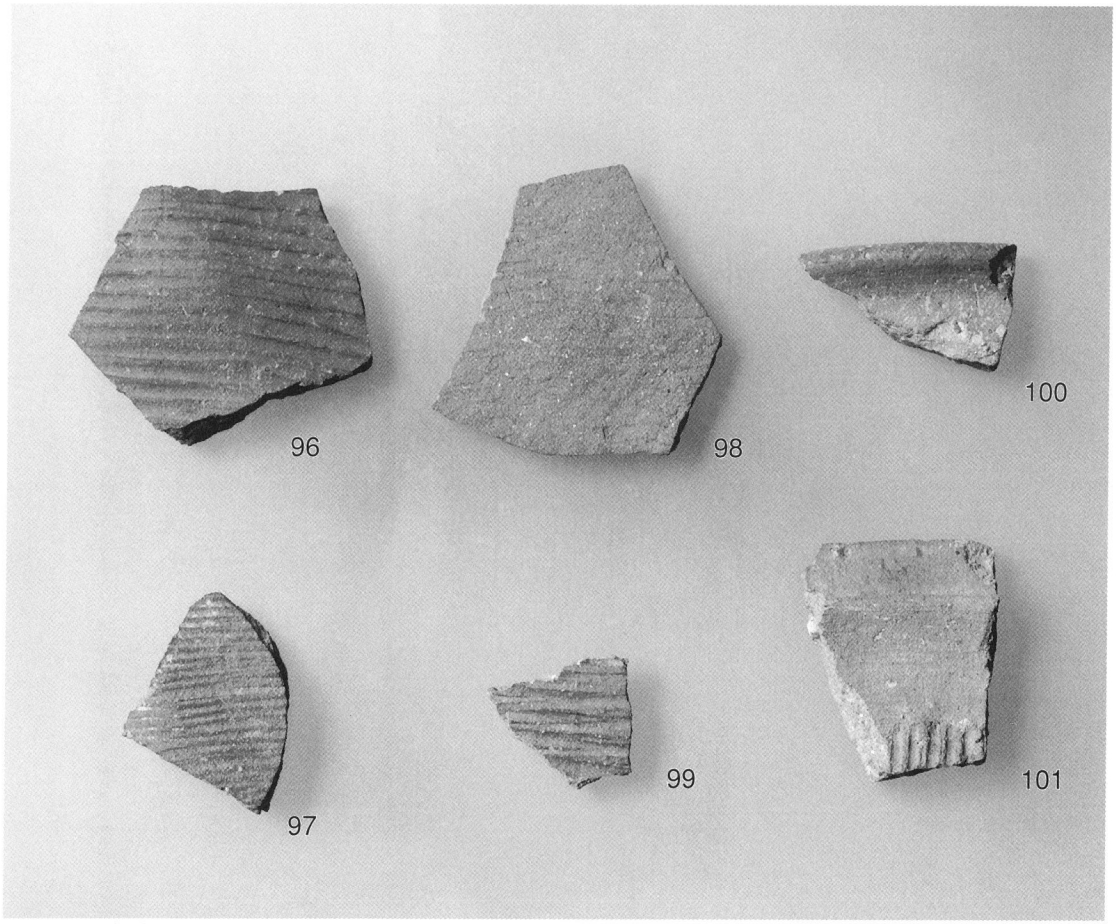

2.出土遺物（10）



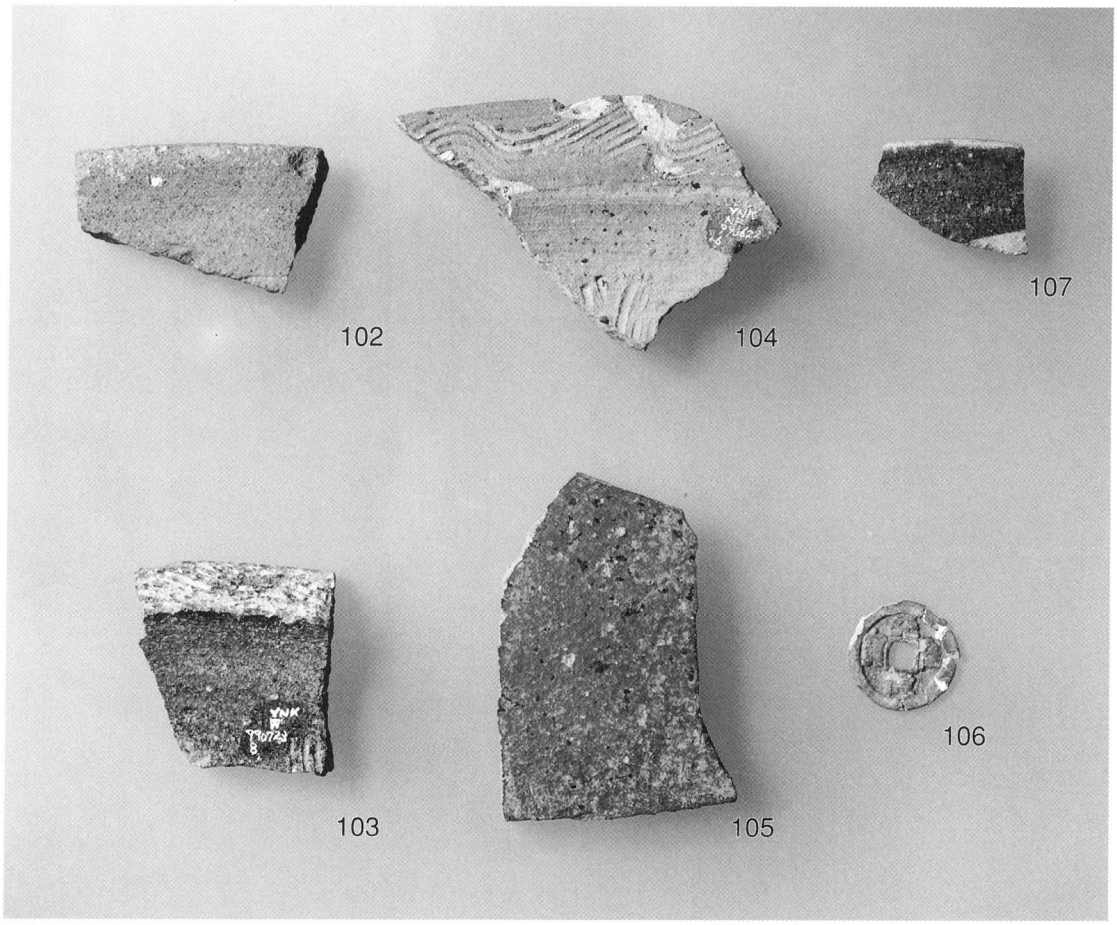

1.出土遺物（11）



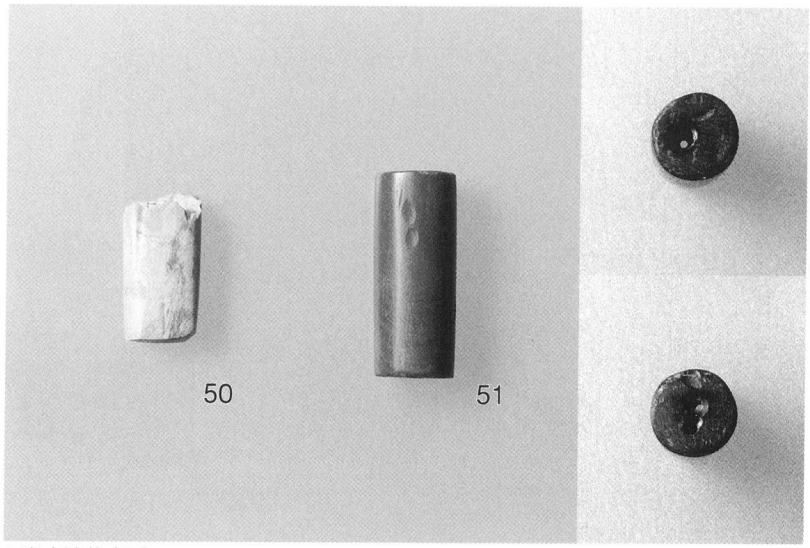

2.出土遺物（12）




1.出土遺物（13）




2.出土遺物（14）




1.出土遺物（15）

2.管玉（51）表採地点（後方部南裾近く、ポールの位置）

3.同上近景

平成１２年３月２５日　印刷
平成１２年３月３１日　発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第２９冊

# 柳田布尾山古墳

第１次・第２次発掘調査の成果

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935-0016　富山県氷見市本町４番９号
TEL 0766-74-8215
印　　刷　（株）チューエツ